

県道紫雲出山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第1冊

## 本村中遺跡

2017.3

香川県教育委員会



調査地遠景（北から小萬島遺跡方面を望む）



調査地遠景（東から紫雲出山遺跡方面を望む）

巻頭図版 2



調査地から栗島方面を望む（東から）



調査地から備讃瀬戸方面を望む（南から）



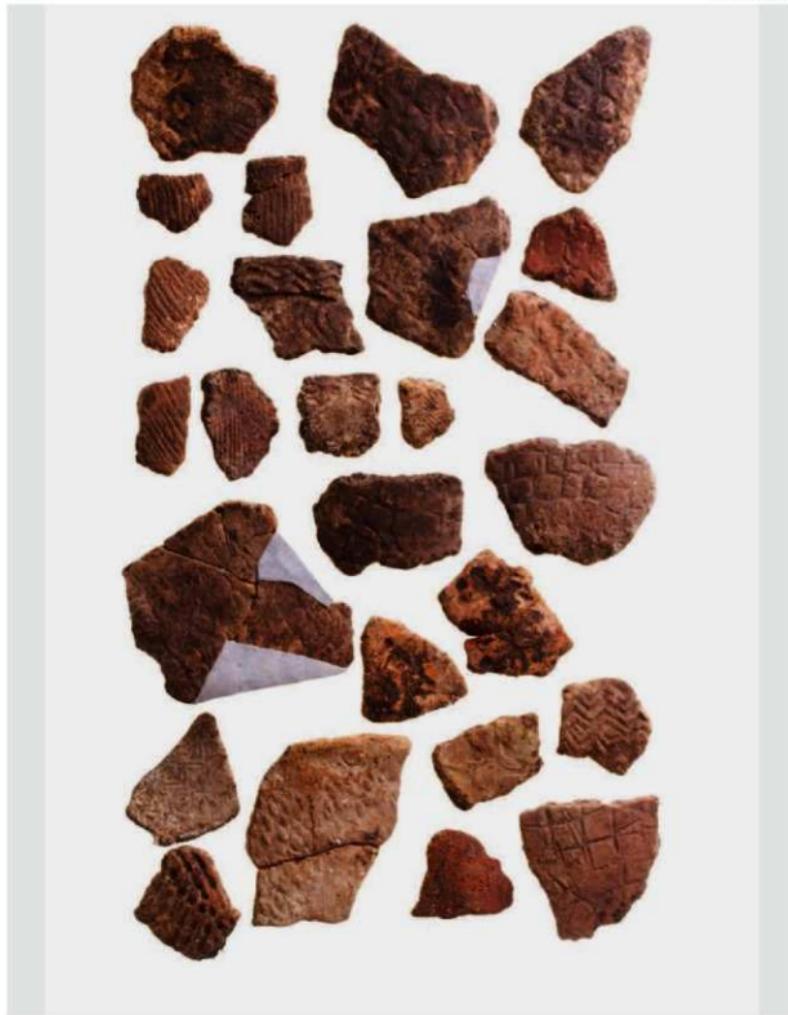
調査地から本村集落を望む（北から）



調査地から丘陵裾の緩斜面を望む（西から）



押型文土器 深鉢（1区5層下位出土）



縄文包含層出土の押型文土器群



縄文包含層出土の磨石・叩石類



縄文包含層出土のサヌカイト製石器



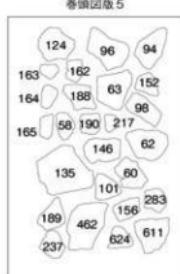
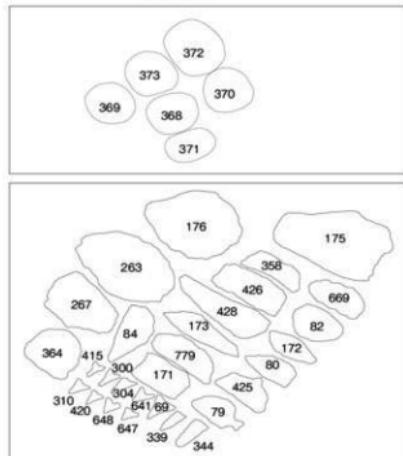
縄文包含層出土の非サヌカイト石器

卷頭図版 8

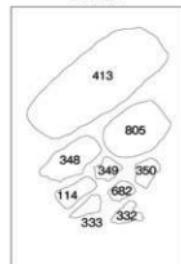


SD501 出土の瓦経（「法華経」「妙法蓮華経」述門 見宝塔品第十一）

卷頭図版 6



卷頭図版 7



# 序 文

本書には、県道紫雲出山線建設に伴い発掘調査を行った香川県三豊市託間町託間に所在する本村中遺跡（ほんむらなかいせき）の報告を収録しています。

本村中遺跡では、今から約8千年前の堆積層から多数の縄文時代早期土器と、それに伴う石器を検出したほか、掘立柱建物跡・溝跡・河川跡などから平安時代の綠釉陶器、白磁、馬具や、同時代末頃の瓦経など、貴重な遺物が出土しました。

このたび、県道紫雲出山線建設に伴う発掘調査のうち、平成11年度から平成13年度までの期間で実施した発掘調査の整理作業が終了し、「県道紫雲出山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 本村中遺跡」として刊行することとなりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、西讃土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきましたことに、深く感謝申し上げますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月17日

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

# 例　　言

1. 本報告書は、県道紫雲山山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第1冊で、三豊市詫問町詫問に所在する本村中遺跡（ほんむらなかいせき）の調査成果を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、平成11～13年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 調査にあたっては、次の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
　　香川県土木部道路課、香川県西讃土木事務所、地元自治会、地元水利組合、三豊市教育委員会
4. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施し、執筆・編集は森下英治が担当した。
5. 本報告書で図示する座標は、発掘調査の際に使用した昭和43年建設省告示第3059号の規定による平面直角第IV座標を基準とするものであり、標高はT.P.を基準としている。また、遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SE：井戸跡 SK：土坑 SP：柱穴 SG：池状遺構  
ST：墓 SR：河川跡 SX：性格不明遺構 SA：柵列跡

なお、本文中の説明では座標の北東方向を「北」としている。
6. 本報告書で図示する縄文土器実測図の表裏面は、断面図を中心として右側に表面、左側に裏面を配置した。また、同写真図版も右側に表面、左側に裏面を配置した。なお、縄文土器の写真図版の縮尺は約1/3に統一した（巻頭図版及び一部の例外を除く）。石器及び弥生時代以後の遺物写真の縮尺は不統一である。
7. 本報告書で図示する石器実測図の遺物番号の下に石材を記した。ただし、記載のないものはすべて「サヌカイト」である。
8. 本文で引用・参照した文献は巻末155ページに参考文献として一括して掲載した。
9. 土器観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1998年度版』による。
10. 本文中に、国土交通省国土地理院発行「数値地図(地図画像)25000 岡山及び丸亀」、国土交通省国土地理院ホームページ掲載「数値地図(土地条件)」、詫問町（現三豊市）発行「詫問都市計画図10・14」の一部を加工して使用した。

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	7
第3章 調査の成果	
第1節 概要と土層 .....	11
第2節 縄文時代の遺構・遺物 .....	24
第3節 弥生・古墳時代の遺構・遺物 .....	97
第4節 古代・中世の遺構・遺物 .....	106
第4章 自然科学分析	
第1節 本村中遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定 .....	133
第2節 本村中遺跡出土黒曜石製石器の産地推定 .....	137
第3節 放射性炭素年代測定 .....	140
第5章 まとめ	
第1節 縄文時代早期の遺構・遺物について .....	143
第2節 SD501 出土の瓦絆について .....	149
第3節 総括 .....	154

# 挿図 目次

第1図	遺跡位置図	1	第57図	5区縄文包含層下層出土遺物 (2)	76
第2図	遺跡周辺の土地条件図	4	第58図	5区縄文包含層下層出土遺物 (3)	77
第3図	莊内半島・高瀬川河口付近の土地条件図	5	第59図	5区縄文包含層下層出土遺物 (4)	78
第4図	周辺遺跡分布図	6	第60図	5区縄文包含層下層出土遺物 (5)	79
第5図	周辺地形と調査地区割図	10	第61図	5区縄文包含層下層出土遺物 (6)	80
第6図	調査地地形区分図	12	第62図	5区縄文包含層下層出土遺物 (7)	81
第7図	調査地全体概要図	13~14	第63図	5区縄文包含層下層出土遺物 (8)	82
第8図	1区西壁・南壁土層断面図	15	第64図	5区縄文包含層下層出土遺物 (9)	83
第9図	1区北壁土層断面図	16	第65図	5区縄文包含層下層出土遺物 (10)	84
第10図	2区南壁土層断面図	17	第66図	5区縄文包含層下層出土遺物 (11)	85
第11図	2区北壁土層断面図	18	第67図	5区縄文包含層下層出土遺物 (12)	86
第12図	3区南壁土層断面図	19	第68図	5区縄文包含層下層出土遺物 (13)	87
第13図	3区東壁土層断面図	20	第69図	5区縄文包含層上層出土遺物 (1)	89
第14図	4区北壁土層断面図	21	第70図	5区縄文包含層上層出土遺物 (2)	90
第15図	5区北壁土層断面図	22	第71図	5区縄文包含層上層出土遺物 (3)	91
第16図	4~5区東壁土層断面図	23	第72図	5区縄文包含層上層出土遺物 (4)	92
第17図	3区縄文時代遺構分布図	25	第73図	5区縄文包含層上層出土遺物 (5)	93
第18図	SK301・SK302・SK303実測図	26	第74図	5区縄文包含層上層出土遺物 (6)	94
第19図	SK301出土遺物 (1)	27	第75図	4~5区出土位置・層位不明遺物 (1)	95
第20図	SK301出土遺物 (2), SK302~304・306出土遺物	28	第76図	4~5区出土位置・層位不明遺物 (2)	96
第21図	SK308~311・SX301実測図・出土遺物	30	第77図	2~3区弥生・古墳時代遺構分布図	97
第22図	3区土坑周辺包含層出土遺物 (1)	31	第78図	SK201・SK204・SX204実測図,	
第23図	3区土坑周辺包含層出土遺物 (2)	32		桂穴・土坑・不明遺構出土遺物	98
第24図	1区西側縄文包含層遺物分布平面図	35~36	第79図	SD207実測図・出土遺物 (1)	100
第25図	1区西側縄文包含層遺物分布断面図	37~38	第80図	SD207出土遺物 (2)	101
第26図	1区縄文包含層7層出土遺物 (1)	40	第81図	SD301・303実測図・出土遺物	102
第27図	1区縄文包含層7層出土遺物 (2)	41	第82図	SD304~305実測図・出土遺物	103
第28図	1区縄文包含層7層出土遺物 (3)	42	第83図	SD307実測図・出土遺物	104
第29図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (1)	44	第84図	SR203・SR204実測図・出土遺物 (1)	105
第30図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (2)	45	第85図	SR203出土遺物 (2)	106
第31図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (3)	46	第86図	4~5区古代・中世遺構分布図	107
第32図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (1)	47	第87図	SB501実測図・出土遺物	108
第33図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (2)	48	第88図	SB502実測図・出土遺物	109
第34図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (3)	49	第89図	SE101実測図・出土遺物	110
第35図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (4)	50	第90図	SK501・SK502実測図・出土遺物	111
第36図	1区縄文包含層5層下位出土遺物 (5)	51	第91図	ST101実測図・出土遺物	111
第37図	1区縄文包含層4層出土遺物 (1)	53	第92図	SD101実測図・出土遺物	113
第38図	1区縄文包含層4層出土遺物 (2)	54	第93図	SD102実測図・出土遺物	114
第39図	1区縄文包含層4層出土遺物 (3)	55	第94図	SD103・SD104実測図・出土遺物	115
第40図	1区縄文包含層4層出土遺物 (4)	56	第95図	SD201・SD202実測図・出土遺物	116
第41図	1区縄文包含層4層出土遺物 (5)	57	第96図	SD401実測図・出土遺物	117
第42図	1区縄文包含層4層出土遺物 (6)	58	第97図	SD403~405実測図・出土遺物	118
第43図	1区出土位置・層位不明遺物 (1)	60	第98図	SD502実測図・出土遺物	118
第44図	1区出土位置・層位不明遺物 (2)	61	第99図	SD501実測図・出土遺物	119
第45図	1区出土位置・層位不明遺物 (3)	62	第100図	SD503~507実測図・出土遺物	120
第46図	1区出土位置・層位不明遺物 (4)	63	第101図	SR201・SR202実測図・出土遺物	121
第47図	1区出土位置・層位不明遺物 (5)	64	第102図	SR401断面図	122
第48図	1区出土位置・層位不明遺物 (6)	65	第103図	SR401出土遺物 (1)	123
第49図	4区縄文包含層下層出土遺物 (1)	67	第104図	SR401出土遺物 (2)	124
第50図	4区縄文包含層下層出土遺物 (2)	68	第105図	SR401出土遺物 (3)	125
第51図	4区縄文包含層下層出土遺物 (3)	69	第106図	SR401出土遺物 (4)	126
第52図	4区縄文包含層下層出土遺物 (4)	70	第107図	SGI01実測図・出土遺物 (1)	127
第53図	4区縄文包含層下層出土遺物 (5)	71	第108図	SGI01出土遺物 (2)	128
第54図	4区縄文包含層下層出土遺物 (6)	72	第109図	桂穴・包含層出土遺物 (1)	130
第55図	4区縄文包含層上層出土遺物	73	第110図	柱穴・包含層出土遺物 (2)	131
第56図	5区縄文包含層下層出土遺物 (1)	75	第111図	柱穴・包含層出土遺物 (3)	132
			第112図	サヌカイト産地推定判別図 (1)	136

第 113 図	サヌカイト産地推定判別図 (2).....	136
第 114 図	黒曜石産地推定判別図 (1).....	139
第 115 図	黒曜石産地推定判別図 (2).....	139
第 116 図	暦年較正結果.....	142
第 117 図	精円文系押型文土器類形分類図.....	143

第 118 図	精円文系押型文土器の変遷.....	144
第 119 図	他系統土器の変遷.....	145
第 120 図	SD501出土瓦経 (1023) の全形想定復元図.....	150
第 121 図	吉野経塚瓦経の想定復元図.....	151
第 122 図	本島八幡神社経塚瓦経の想定復元図.....	153

## 付図

本村中遺跡 1 区～3 区 (1/200)

本村中遺跡 4 区・5 区 (1/200)

## 表目次

第 12 表	本村中遺跡出土土器観察表 (1).....	157
第 13 表	本村中遺跡出土土器観察表 (2).....	158
第 14 表	本村中遺跡出土土器観察表 (3).....	159
第 15 表	本村中遺跡出土土器観察表 (4).....	160
第 16 表	本村中遺跡出土土器観察表 (5).....	161
第 17 表	本村中遺跡出土土器観察表 (6).....	162
第 18 表	本村中遺跡出土土器観察表 (7).....	163
第 19 表	本村中遺跡出土土器観察表 (8).....	164
第 20 表	本村中遺跡出土土器観察表 (9).....	165
第 21 表	本村中遺跡出土土器観察表 (10).....	166
第 22 表	本村中遺跡出土土器観察表 (11).....	167
第 23 表	本村中遺跡出土土器観察表 (12).....	168
第 24 表	本村中遺跡出土土器観察表 (13).....	169
第 25 表	本村中遺跡出土土器観察表 (14).....	170
第 26 表	本村中遺跡出土土器観察表 (15).....	171
第 27 表	本村中遺跡出土土器観察表 (16).....	172
第 28 表	本村中遺跡出土土器観察表 (17).....	173
第 29 表	本村中遺跡出土土器観察表 (18).....	174
第 30 表	本村中遺跡出土土器観察表 (19).....	175
第 31 表	本村中遺跡出土土器観察表 (20).....	176
第 32 表	本村中遺跡出土土器観察表 (21).....	177
第 33 表	本村中遺跡出土土器観察表 (22).....	178
第 34 表	本村中遺跡出土土器観察表 (23).....	179
第 35 表	本村中遺跡出土土器観察表 (24).....	180
第 36 表	本村中遺跡出土土器観察表 (25).....	181
第 37 表	本村中遺跡出土土器観察表 (26).....	182
第 38 表	本村中遺跡出土土器観察表 (27).....	183
第 39 表	本村中遺跡出土土器観察表 (28).....	184

第 40 表	本村中遺跡出土土器観察表 (29).....	185
第 41 表	本村中遺跡出土土器観察表 (30).....	186
第 42 表	本村中遺跡出土土器観察表 (31).....	187
第 43 表	本村中遺跡出土土器観察表 (32).....	188
第 44 表	本村中遺跡出土土器観察表 (33).....	189
第 45 表	本村中遺跡出土土器観察表 (34).....	190
第 46 表	本村中遺跡出土土器観察表 (35).....	191
第 47 表	本村中遺跡出土土器観察表 (36).....	192
第 48 表	本村中遺跡出土土器観察表 (37).....	193
第 49 表	本村中遺跡出土土器観察表 (38).....	194
第 50 表	本村中遺跡出土土器観察表 (39).....	195
第 51 表	本村中遺跡出土瓦・瓦経観察表.....	196
第 52 表	本村中遺跡出土石器観察表 (1).....	196
第 53 表	本村中遺跡出土石器観察表 (2).....	197
第 54 表	本村中遺跡出土石器観察表 (3).....	198
第 55 表	本村中遺跡出土石器観察表 (4).....	199
第 56 表	本村中遺跡出土石器観察表 (5).....	200
第 57 表	本村中遺跡出土石器観察表 (6).....	201
第 58 表	本村中遺跡出土石器観察表 (7).....	202
第 59 表	本村中遺跡出土石器観察表 (8).....	203
第 60 表	本村中遺跡出土石器観察表 (9).....	204
第 61 表	本村中遺跡出土石器観察表 (10).....	205
第 62 表	本村中遺跡出土石器観察表 (11).....	206
第 63 表	本村中遺跡出土石器観察表 (12).....	207
第 64 表	本村中遺跡出土石器観察表 (13).....	208
第 65 表	本村中遺跡出土石器観察表 (14).....	209
第 66 表	本村中遺跡出土金銅器観察表.....	209
第 67 表	本村中遺跡出土木製品観察表.....	209

# 図版目次

巻頭図版 1	SD304 遺物出土状況（西から）
調査地遠景（北から小鳥島遺跡方面を望む）	SD304 遺物出土状況（西から）
調査地遠景（東から新芸出山遺跡方面を望む）	SD307（南から）
巻頭図版 2	SD307 遺物出土状況（西から）
調査地から栗島方面を望む（東から）	図版 7
調査地から備讃瀬戸方面を望む（南から）	3 区弥生・中晩面（西から）
巻頭図版 3	SD201 断面（東から）
調査地から本村集落を望む（北から）	4 区西端柱穴群（東から）
調査地から丘陵脇の緩斜面を望む（西から）	5 区建物遺構全景（東から）
巻頭図版 4	5 区溝群断面（南から）
押型土器 深鉢（1区 5層下位出土）	図版 8
巻頭図版 5	SB501・SB502（上面より）
縄文包含層出土の押型文土器群	SB501（西から）
巻頭図版 6	SB502（東から）
縄文包含層出土の磨石・叩石類	図版 9
縄文包含層出土のサヌカイト製石器	5 区から栗島方面を望む
巻頭図版 7	SD501 断面（東から）
縄文包含層出土の非サヌカイト石器	SD501 断面（東から）
巻頭図版 8	SD502 木橋出土状況（南から）
SD501 出土の瓦絆	SD502 木橋細部（東から）
図版 1	図版 10
3 区縄文遺構面遺構分布状況（西から）	ST101 人骨出土状況（西から）
図版 2	ST101 人骨出土状況（西から）
3 区縄文遺構の分布（東から）	ST101（西から）
SK301 遺物出土状況（西から）	SR401 断面（南から）
SK302 と調査区南壁断面（北から）	SG101（北東から）
SK310（南から）	SG101（上面から）
SK310 遺物（18）出土状況（南から）	1 区柱穴群検出状況（東から）
図版 3	SP101 白磁碗出土状況（東から）
3 区土坑群 SX301（南から）	図版 11
3 区土坑群 SX301 周辺（西から）	3 区・1区 7 層出土の縄文土器
1 区縄文包含層 7 層調査状況（南から）	図版 12
1 区縄文包含層 7 層調査状況（東から）	1 区 7 層・5 層出土の縄文土器
1 区縄文包含層 5 層中遺物出土状況（東から）	図版 13
1 区縄文包含層 5 層完掘状況（東から）	1 区 5 層下位出土の縄文土器
図版 4	図版 14
1 区縄文包含層 5 層下位遺物出土状況	1 区 5 層出土の縄文土器
1 区縄文包含層 5 層下位遺物出土状況	図版 15
1 区縄文包含層 5 層下位遺物出土状況（北から）	1 区 5 層出土の縄文土器
1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況	図版 16
1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況（南から）	1 区 5 層・4 層出土の縄文土器
1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況（西から）	図版 17
1 区縄文包含層（調査区南壁断面）	1 区 4 层出土の縄文土器
1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況（南から）	図版 18
図版 5	1 区 4 层出土の縄文土器
4 区縄文包含層断面（西から）	図版 19
4 区縄文包含層調査状況（東から）	1 区層位不明出土の縄文土器
2 区弥生時代遺構分布状況（東から）	図版 20
SK201 断面（東から）	4 区下層出土の縄文土器
SK204 断面（南から）	図版 21
SD207 断面（南から）	4 区下層・5 区下層出土の縄文土器
SD207 遺物出土状況（東から）	図版 22
図版 6	5 区下層出土の縄文土器
SD202 断面（南から）	図版 23
SR203 遺物出土状況（南から）	5 区下層出土の縄文土器
SR203 遺物出土状況（南から）	
SD302・SD304（南から）	

- 図版 24  
　5 区下層出土の縄文土器
- 図版 25  
　5 区下層出土の縄文土器
- 図版 26  
　5 区下層出土の縄文土器
- 図版 27  
　5 区下層・5 区上層出土の縄文土器
- 図版 28  
　5 区上層出土の縄文土器
- 図版 29  
　5 区上層・4・5 区層位不明出土の縄文土器
- 図版 30  
　3 区縄文時代石器
- 図版 31  
　1 区 7 層縄文時代石器
- 図版 32  
　1 区 5 層縄文時代石器
- 図版 33  
　1 区 4 層縄文時代石器
- 図版 34  
　1 区層位不明縄文時代石器
- 図版 35  
　4 区下層縄文時代石器
- 図版 36  
　5 区下層縄文時代石器
- 図版 37  
　5 区上層・層位不明縄文時代石器
- 図版 38  
　SD207・301～305・307 出土遺物
- 図版 39  
　SR203・SD101 出土遺物
- 図版 40  
　SD102～104 出土遺物
- 図版 41  
　SD401・501 出土遺物
- 図版 42  
　SR401 出土遺物
- 図版 43  
　SR401 出土遺物
- 図版 44  
　SG101・包含層出土遺物
- 図版 45  
　包含層出土遺物
- 図版 46  
　出土金属器 1
- 図版 47  
　出土金属器 2
- 図版 48  
　出土鉄器 X 線写真 1
- 図版 49  
　出土器具 X 線写真 2
- 図版 50  
　補足遺物 1
- 図版 51  
　補足遺物 2
- 図版 52  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 平 01)
- 図版 53  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 平 02)
- 図版 54  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 平 03)
- 図版 55  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 平 04)
- 図版 56  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 平 05)
- 図版 57  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 平 06)
- 図版 58  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (I F 点)
- 図版 59  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (II F)
- 図版 60  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (II C)
- 図版 61  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (III T)
- 図版 62  
　縄文包含層出土のサスカイト製剝片 (III C)

## 第1章 調査に至る経緯と経過

県道紫雲出山線は、瀬戸内海に細長く突き出す県西部の荘内半島を周回する総延長約20kmの一般県道である。弥生時代の高地性集落として著名な県指定史跡紫雲出山遺跡が立地する山塊の山裾と海岸との狭隘な谷地形に営まれる小集落をつなぐ重要な道路だが、車両の離合が困難な道幅5.5m以下の範囲が多く、道路改良の必要性が高い路線とされていた。

当該路線における用地内の埋蔵文化財の保護については、県観音寺土木事務所（現在「県西讃土木事務所」、以下「土木事務所」という）と県教育委員会事務局文化行政課（現在「生涯学習・文化財課」、以下「県教委」という）との間で協議が進められた。平成5年、同市詫間町積地区については、周知の埋蔵文化財包蔵地「船積寺跡」に隣接する要件で工事立会が行われた。その結果中世集落跡「積新田遺跡」が発見され、12世紀～13世紀代の瓦器・土師器・亀山焼などが出土した。

平成7年には、本村地区、須田地区で工事が予定されている範囲の分布調査が行われ、用地買収後に試掘調査を実施する範囲が県教委から土木事務所に提示され、平成8～10・12年度にかけて県教委が試掘調査を実施した。その結果「本村中遺跡」「須田・中尾瀬遺跡」「尾の上遺跡」の新たな遺跡が見つかり、平成11年度から本発掘調査が行われた。本発掘調査は県教委が調査主体となり、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

今回報告する本村中遺跡は、平成11年から13年度にかけて次の期間・体制で調査を実施した。



第1図 遺跡位置図

<平成 11 年 11 月～12 月>

■香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 小原克己、課長補佐 小国史郎

総務 係長 中村禎伸、主査 三宅陽子・松村崇史

文化財 副主幹 廣瀬常雄、係長 西村尋文、文化財専門員 森格也、主任技師 塩崎誠司

■財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 菅原良弘、次長 川原裕章

総務 副主幹 六車正憲・田中秀文、係長 新一郎、主査 長尾寿江子・山本和代、

主任主事 細川信哉

調査 参事 長尾重盛、主任文化財専門員 大山真充・藤好史郎、文化財専門員 西岡達哉、

主任文化財専門員 蓬本和博、文化財専門員 藏本晋司、調査技術員 中村文枝

<平成 12 年 8 月～10 月>

■香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 小原克己、課長補佐 小国史郎

総務 係長 中村禎伸、主査 三宅陽子・主事 亀田幸一

文化財 副主幹 廣瀬常雄、係長 西岡達哉、文化財専門員 森格也・宮崎哲治

■財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 菅原良弘、次長 川原裕章

総務 副主幹 六車正憲・大西誠治、係長 新一郎、主査 長尾寿江子・山本和代、主査 高木康晴

調査 参事 長尾重盛、主任文化財専門員 大山真充・藤好史郎、文化財専門員 西村尋文、主任技師

石原徹也、技師 小野秀幸、調査技術員 中村文枝

<平成 13 年 7 月～9 月>

■香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 北原和利、課長補佐 小国史郎

総務 副主幹 中村禎伸、主査 須崎陽子・主事 亀田幸一

文化財 副主幹 大山真充、主任 西岡達哉、文化財専門員 古野徳久・宮崎哲治

■財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 小原克己、次長 川原裕章

総務 参事 河野浩征、副主幹 大西誠治、係長 多田敏弘、主査 山本和代、

調査 参事 梅木正信、主任文化財専門員 廣瀬常雄・藤好史郎、文化財専門員 木下晴一、

文化財専門員 森格也、主任技師 松岡晶、調査技術員 漆原啓悟

調査にあたっては、平成 11 年度は掘削工事を請負で、平成 12・13 年度は直営で実施した。また、航空写真撮影・図化作業を委託して実施した。

本村中遺跡の調査面積は 3,823m<sup>2</sup>（平成 11 年度 984m<sup>2</sup>、平成 12 年度 1,319m<sup>2</sup>、平成 13 年度 1,520m<sup>2</sup>）、

出土した遺物量は 159 箱（28 リットル入コンテナ）である。

本発掘調査終了後、長期が経過したが、平成 23 年度に県教委と県土木部道路課との間で県道関係遺跡の整理作業を計画的に実施する旨の協議が整い、本村中遺跡については平成 25～26 年度に以下の体制で当該遺跡の整理作業を実施し、平成 28 年度に本書の印刷を行った。

■香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏、副課長 木虎淳（平成 25 年度）川上泰（平成 26 年度）

総務 G 副主幹 松下由美子、主任主事 丸山千晶（平成 25 年度）、主事 和木麻香（平成 26 年度）

文化財 G 課長補佐 片桐孝浩、主任文化財専門員 山下平重、文化財専門員 松本和彥

■香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏、次長 前田和也

総務課 課長 前田和也（兼務）、主任 俟野英二・宮武ふみ代（平成 25 年度）・寺岡仁美（平成 26 年度）・中川美江・高木秀哉・岩崎昌平

資料普及課 課長 森格也（平成 25 年度整理担当兼務）、主任文化財専門員 森下英治（平成 26 年度）

第2章 遺跡の立地と環境

## 第1節 地理的環境

香川県の西部で、直線にして 12kmほど瀬戸内海に細長く突出している莊内半島は、紫雲出山・横峯山・妙見山などの 300m 前後の山が連なり、海岸線近くまで急峻な地形が迫る箇所が多い。地質学的には花崗岩を基盤とし、安山岩や角礫凝灰岩が累積する開析溶岩山地で、花崗岩層の開析が顕著であることから、変化に富んだ海岸線を生み出している。その開析により谷筋から海に向かって小扇状地が形成され、海岸付近では狹小な入り江状の平地部が存在する。この入り江には現在、積・生里・大浜・箱などの漁港が多く所在する。一方で、半島付け根部付近では扇状地範囲は広く、緩傾斜地を活かして詫問・仁尾の集落が展開する。また半島周囲には栗島・志々島・大鳴島・小鳴島などの島が所在する。このうち、詫問沖の栗島は面積 3.68 km<sup>2</sup>と最も大きく、3つの丘陵が浜堤で接続する形状を呈す。同じく志々島が半島の北東側に所在し、高瀬川河口を取り巻くように 2 島が分布する。この海浜と島に囲まれた範囲が詫問湾である。一方、半島南西の仁尾沖には大鳴島・小鳴島が所在し同じく湾状の地形を形成する。

今回、発掘調査を行った本村中遺跡は託問湾に面した莊内半島の北東側の付け根付近に位置し、妙見山（標高319.9 m）、博智山（同 237 m）を経て北に延びる丘陵と、高尾木山（同 270.4 m）から北に延びる丘陵の間に形成された扇状地の緩やかな傾斜面に立地する。半島部の狭小な平地とは対照的に、面



第2図 遺跡周辺の土地条件図

積の大きな緩斜面地である。遺跡周辺の標高は約10~11mで、北東に緩やかに傾斜して海浜に至る。

なお、当該遺跡北 1.5km の塙生山（標高 140.7m）は現在は託問湾に突き出た独立丘陵だが、妙見山から続く尾根筋の延長上にあり、その尾根筋が緩斜面である当遺跡周辺地形の西を区切る。遺跡の東側は高瀬川河口で地形が区切られるので、当遺跡は東西約 2km、南北約 1km 弱の平地・緩斜面地形単位の中央に位置することになる。第 2 図は国土地理院発行の土地条件図をもとに地形単位を図示したものである。土地条件図では高位段丘面とされる緩斜面地（第 2 図の橙色部分）の分布が当遺跡周辺の地形単位を良く示している。高瀬川東岸まで視界を広げると、第 3 図に示したように託問湾周辺には同様の地形単位が、南方約 3km の三野町吉津周辺と、高瀬川東岸の同町大見周辺の 2か所に存在している。つまり



第3図 荘内半島・高瀬川河口付近の土地条件図

り当該遺跡が所在する単位は、高瀬川河口付近に分布する平地・緩斜面地で構成する本村・吉津・大見の3つの地形単位のうちの一つであり、最も海に向かって開かれた地形的環境を有する。



第4図 周辺遺跡分布図

## 第2節 歴史的環境

### －旧石器時代－

莊内半島には、今のところ旧石器時代の遺跡は知られていないが、当該本村中遺跡では今回サスカイト製の角錐状石器が1点（本書43）出土しており、周辺に旧石器時代の遺跡が所在する可能性がある。

### －縄文時代－

縄文時代の遺跡は古くから多数知られている。縄文時代早期は仁尾の1.3km沖合の小鳶島遺跡と当該報告の本村中遺跡がある。小鳶島遺跡では貝塚を伴い、主に山形文・楕円文を中心とした押型文土器が出土しており、早期中葉の黄鳥式を代表する貝塚遺跡として、県史跡に指定されている（仁尾町誌編さん委員会 1984）。当該本村中遺跡では後続する早期後葉の高山寺式の押型文土器が出土した。前期では三豊市仁尾町の南草木遺跡（樋口 1938）がある。貝塚を伴い、前期後半の彦崎ZI・II式の土器を主体とする。またヤスと考えられる骨角器も出土している。三豊市詫間町栗島の東風浜遺跡（香川県教育委員会 1956）でも前期の土器が出土している。中期では同じく栗島の西浜遺跡（香川県 1987）がある。栗島の両遺跡は後期まで継続する。後期になると三豊市詫間町で遺跡数は増加し、大浜遺跡（伊沢・森本 1981）、蟻の首遺跡（香川県 1987）、船越遺跡（香川県 1987）、箱遺跡、生里遺跡など、海浜部で貝塚を形成する遺跡が多くみられる。これらでは、中期の土器が散見されることから、遺跡形成は中期にあって、後期に継続する中で遺跡数の増加や遺跡規模の拡大が行われた可能性が考えられる。また、貝塚を伴うことも県内にあってはこの地区の特徴である。逆に、晚期の遺跡はあまり知られていない。貝塚遺跡が後期までに終焉するパターンが多いものと考えられる。当該遺跡で晚期前半の土器が出土しているほか、栗島の西浜遺跡で僅かに突帯文土器が出土している。

### －弥生時代－

明確な弥生時代前期の遺跡はこれまで見つかっていない。

弥生時代中期、標高352mの紫雲出山の頂上付近に紫雲出山遺跡が出現する。いわゆる高地性集落で、多量の土器とともに石鐵・打製石庵丁などの石器、骨角製の釣り針などが出土し、貝層が伴う（小林・佐原 1964）。それに先行する中期前半には三豊市詫間町北谷遺跡がある。横峯山と妙見山との谷奥の高所に立地する（前田・松本 1961）。また、当遺跡上方の標高100mほどの地点では、かつて弥生土器とともに炭化物層が検出されており、丘陵斜面地を造成した集落が多数所在した可能性が高い（詫間町誌編集委員会 1952）。ただ、これらの集落は後期には続かない。終末期には仁尾の南草木遺跡で堅穴住居跡が1棟検出されており、堅穴住居跡から甕・鉢・瓶・製塙土器が出土している（香川県教育委員会 1988）。また、銅鐵が出土している（瀬戸内海歴史民俗資料館 1983）。このほか、ヤモンベ遺跡で弥生時代後期に属する銅鐵が出土している（瀬戸内海歴史民俗資料館 1983）。

### －古墳時代－

古墳時代では莊内半島の付け根の三豊市仁尾町と詫間町の境の加嶺岬に向かう山裾に加嶺大麻古墳がある（香川県教育委員会 1988）。横穴式石室の一部が残っており、6世紀末の須恵器・土師器とともに耳環が出土している。典型的な後期古墳だが、それ以外海との関わりが看取できる古墳が所在する。大浜からやや北に離れ海に突き出た丘陵先端には吉吾古墳がある。直径9mの円墳と近接する箱式石棺を埋葬主体部とする別墳からなり（塩治・垣見 2012）、箱式石棺の長さは2.92mと長大である。栗島では、

小丘陵あるいは海浜部の浜堤に横穴式石室や箱式石棺を埋葬主体とする古墳が多く分布する。馬城古墳は墳形は不明だが東面する横穴式石室を有する古墳である。墳丘には3基の箱式石棺も併設し、鉄劍の出土が伝わる（三豊市教育委員会 2011）。いずれも浜堤上に立地する。東風浜古墳も浜堤に立地する2基の古墳で高さ2mの墳丘が遺存する。志々島には墳丘の有無は不明だが棺底に玉石敷を備えた箱式石棺を埋葬主体とする十握古墳が所在する。

#### -古代-

古代の莊内半島一帯は三野郡託間郷に属す。日本三代実録卷11に「貞觀7年（865）12月9日、讃岐国三野郡託磨牧を停廃す」（黒川編1934）とあり、郷内に官牧が所在した。927年（延長5年）に完成し、967年（康保4年）に施行された延喜式28卷兵部省に記載された「諸國馬牛の牧」一覧には「託磨牧」の記載はないので、延喜式以前に停廃した牧である。続日本紀卷1文武4年（700）3月17日条で諸國に牛馬牧の設置を義務付けて以来、上記の865年まで165年間、郷内に牧が存続した。

西讃府志では肥後國託磨郡、薩摩國高城郡託馬郷などの類似地名の存在と、栗島に馬木八幡宮が所在することから、栗島に牧の実在を想定している（大塚ほか1989）。昭和46年発行の託間町誌では、長門国角島牛牧、伊予国忽那島馬牛牧、備前国長島馬牛牧、筑前国能巨島牛牧、肥前国生属島牧、肥前国柏島牛牧など島に所在する牧が存在することから、同様に島である栗島が牧として使われたものと想定している（託間町誌編集委員会編1971）。ただ上記の牧は延喜式以降に続いた牧であり、それ以前に設けられ令制の変質とともに停廃した「託磨牧」のような「令制の牧」は開発地との干渉により停廃もしくは移転に至った例が多い（西岡1953）。託磨牧は靈龜2年（716）の摂津国大隅嶋・媛嶋2牧の停廃に始まる8牧の停廃と1牧の移転のうち最後の貞觀7年（865）に停廃した令制の牧であり、開発地との干渉が生じやすい本土側に所在した可能性も考慮する必要がある。栗島には前記の古墳名称のように馬を冠した地名等が知られるが、牧を証する具体的な資料はいまのところ存在しない。

託間町積に所在する船積寺遺跡では、大正15年に経塚の発掘調査が行われた。石で覆われた盛土の一部から、青銅鏡14面、刀剣類、青磁器、金銅装絆箱片、経紙片が出土した（香川県1930）。出土した土器は13世紀の亀山産須恵器で経塚の時期を示す。また、隣接地で13世紀初めごろの古瓦が採集されており（森下英2015）、平安期創建の船積寺跡が所在したことが知られる。さらに、紫雲出山山頂には中世の積石塚が存在し、中世土器の出土が伝えられており近接する船積寺跡との関係が指摘されている（小林・佐原1964）。

妙見山の山頂から南東に延びる尾根上標高約300mの平坦地に妙見山遺跡がある。土師器・須恵器の杯が重ねられて埋納されていた（仁尾町誌編さん委員会1984）祭祀遺跡である。

なお平安時代末～鎌倉時代にかけては、この地域においても莊園が多く成立する。半島先端部近くに摂関家領三崎荘、莊内半島の東側の付け根部分に九条家領託間荘が成立している。

#### -中世-

瀬戸内海に突き出る莊内半島周辺は瀬戸内海航路を行き来する船舶で賑わいを見せる。その中で、「兵庫北闇入船納帳」と呼ばれる摂津国兵庫北間に入闇した文安2年（1445）の船舶記録では、「託間塩」6,190石が通関し、関銭石当たり274文の通関料が支払われている。託間塩は讃岐全体の輸送塩の3割を占め、宇多津、平山、多度津船籍の輸送船がその輸送を担っていたらしい（橋詰2007）。港としての「託間港」

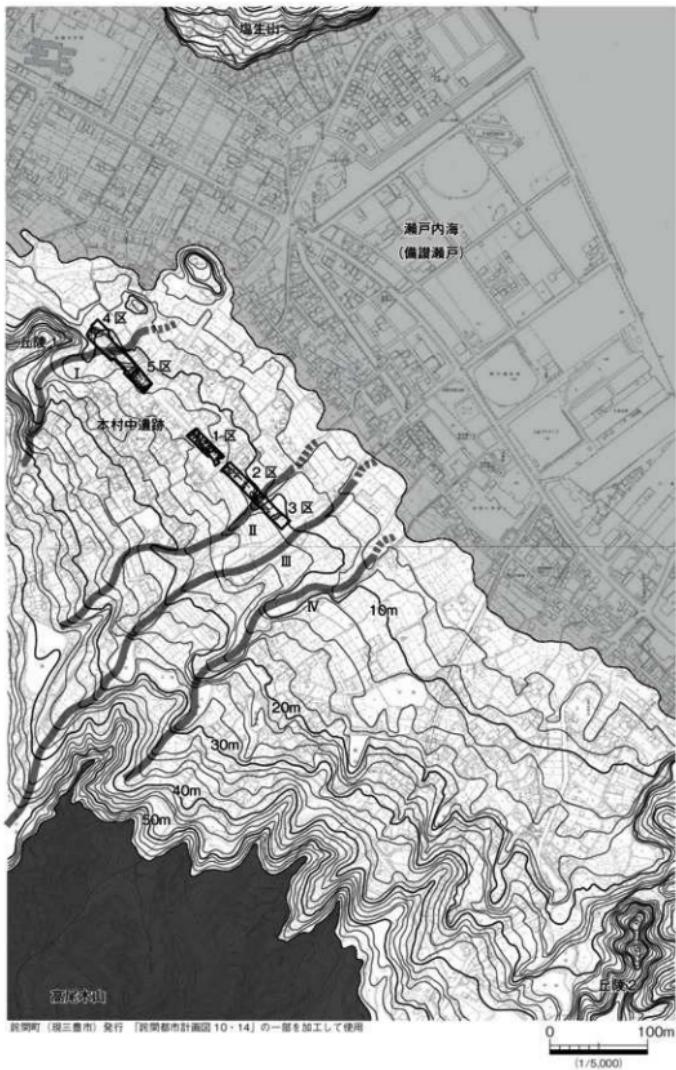
の標記はみられないものの、詫間の海浜部では塩の生産と積み出しが活発に行われていたものと推定される。

中世の遺構・遺物は、当遺跡のほか須田・中尾瀬遺跡や積新田遺跡（森下 1994）で建物柱穴等が検出されている。仁尾町古江善光寺遺跡では平窓跡の一部が検出され、15～16世紀の軒丸瓦・軒平瓦が出土した（塙崎 1997）。15世紀ごろは大小の寺院が各所で建立しており、それらの寺院の瓦を生産したものであろう。なお仁尾の覚城院は15世紀に23の末寺を有する寺院であったことが永享2年（1430）の「覚城院惣末寺古記」（香川県教育委員会 1981）に記されている。同じく仁尾で14世紀創建の常徳寺は重要文化財に指定されている円通殿が応永8年（1401）に建築されたことが棟札から判明している（重要文化財常徳寺円通殿修理委員会 1964）。

#### －戦国期以後－

戦国時代になると莊内半島では、三農市詫間町に詫間城跡、海崎城跡、栗島城跡が、三農市仁尾町には仁保城跡、天神山城跡といった城館がそれぞれ築かれている。在地の土豪詫間氏に関する遺跡が多いと思われるが、その詳しい事歴は不明である。

近現代になると海浜部に塩田が築かれ製塩業で賑わったが、その塩田も昭和40年代に廃止された。



第5図 周辺地形と調査地区割図

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 概要と土層

第5・6図は2m間隔の等高線図に調査地区割を示したものである。緩傾斜面の等高線にはほぼ沿うように北北西から南南東に向けて細長く調査区を設定した。総延長は280mで、途中5区と1区の間の60m分は予備調査の結果遺構が所在しなかったことにより本発掘調査の対象から外している。調査区の幅は道路設計幅に合わせて14mとした。

調査区の名称は、北（図の左側）から4区、5区、1区、2区、3区の順である。調査区名は調査時と異なり、今回新たに付け替えを行い、3か年にわたる調査の統一を図った。なお調査時は1区が平成12年度I区、2区が平成12年度II区、3区が平成11年度調査全区、4区が平成13年度I区、5区が平成13年度II区であった。

調査範囲内では、調査区内外を含めて南から北へ流下する開析谷が数条跨いでいる。まず4区と5区の間に南から北への開析谷が存在する。この開析谷は後述のSR401に対応するとともに、その下位の4区・5区縄文包含層もこの開析谷埋没層に相当する。幅は約50m、深さは縄文包含層下位面で1.3mある。この谷を谷1（第5図のI）とする。谷1の北側は南西から延びる丘陵の先端に取り付く微高地がある。これを微高地1とする（第6図）。2区と3区の境に細い谷筋が北流する。これは幅20mと細く、地表層にはほとんど痕跡を残していないが、2区のSR201～204の弥生時代から中世にかけての浅い流路遺構が対応する。これを谷2（第5図のII）とする。谷1と谷2の間は一部未調査範囲があるが、調査区壁面の土層断面を概観すると、東西約130mの微高地が存在することがわかる。これを微高地2とする（第6図）。谷2を介して東側は地形が東に傾斜する。3区の縄文時代晩期の土坑群はこの傾斜面に設けられたものである。この地形単位を傾斜面1とする。傾斜面1の東への傾斜は調査区から50m東側まで連続し、その後開析谷に行き着く。この開析谷は詫問岬から続く谷で谷3とする。以上の地形単位において、発掘調査では微高地1に所属する柱穴等の遺構が4区北端、谷1の遺構がSR401及び縄文包含層（早期）である。5区から2区までの間の微高地2が中世以後の遺構面となる。また1区縄文包含層は微高地2に形成されたもので、4・5区の包含層とは成因が異なる。2区の弥生時代の河川跡は地形的にみて用水機能が付与された可能性が高いものと言える。3区の縄文時代晩期土坑群は調査区の東方にも延びる可能性があり、開析谷までの東西延長80mの範囲が晩期の遺構分布エリアと考えられる。

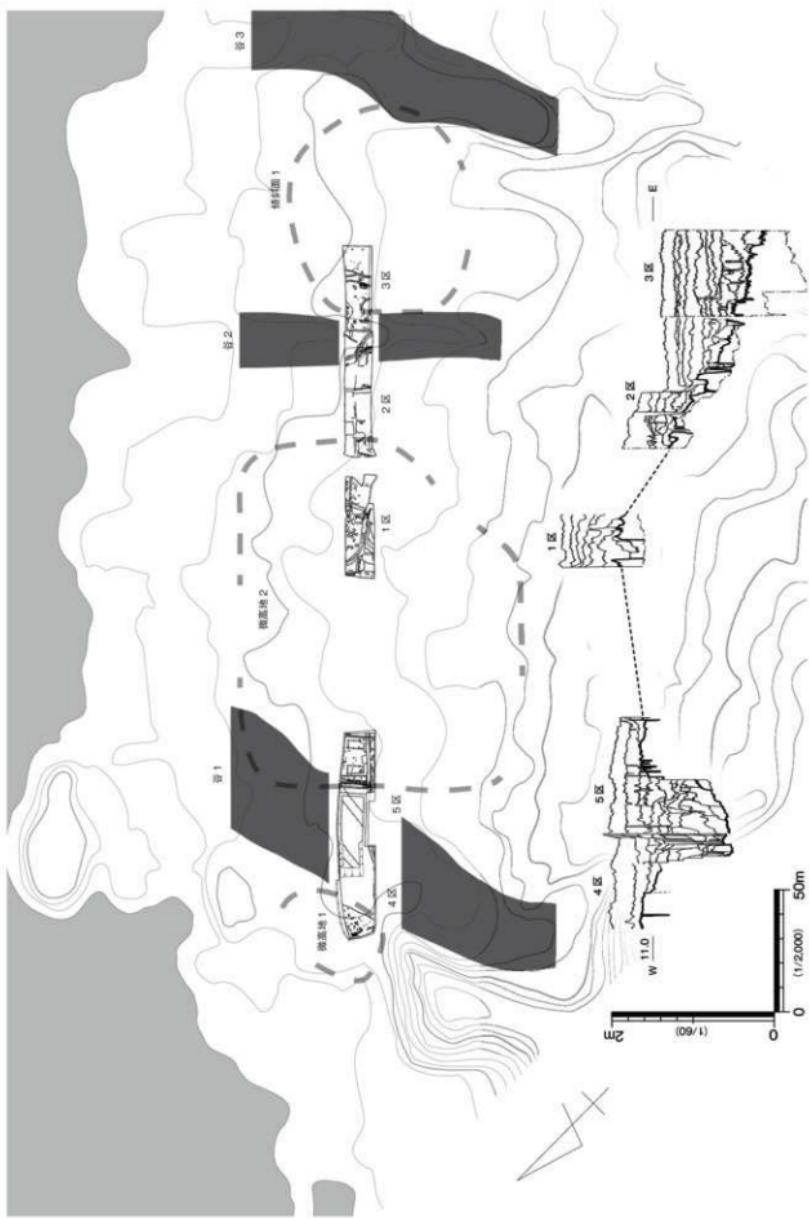
以上の地形単位と調査区との関係を基礎として、以下、各調査区の土層を報告する。

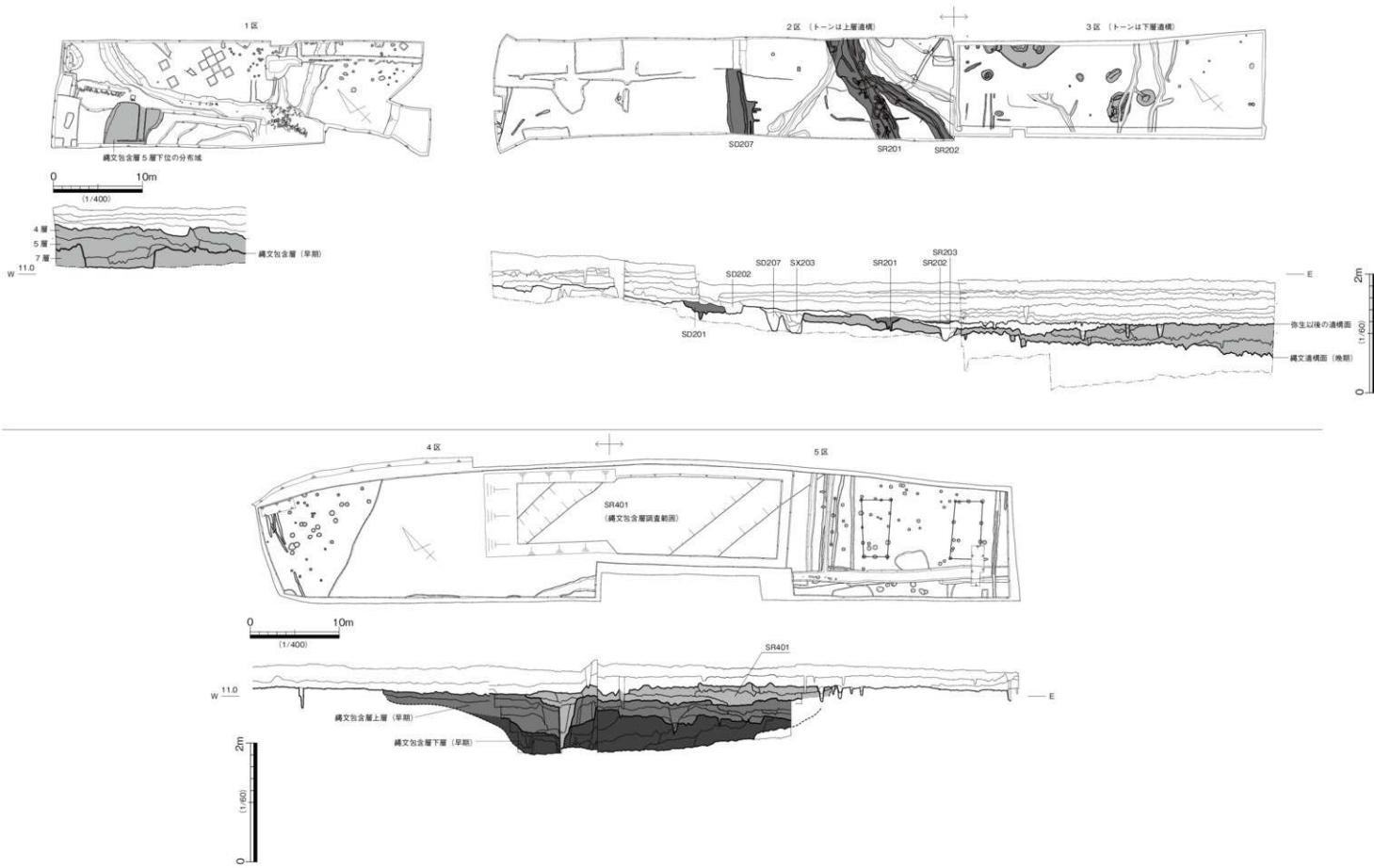
#### 1区

今回の発掘調査対象地の中で、最も高い位置にある調査区である。西壁断面（第8図上段）は現況地盤で北側と南側とで約1mの比高差があり、南が高く北に低い。耕作土及び整地土を除去すると中世包含層が20cm厚さで堆積し、その下位に縄文包含層が存在する。包含層は北に緩やかに傾斜する。西壁中央部に北側と南側の段下をめぐる現代用水路跡があり、その下位に近世の溝SD101が重複する。溝に切られる近世井戸のSE101で下段西壁の大半を占めるが、北壁近くで僅かに縄文包含層（第8図上段9）が残る。

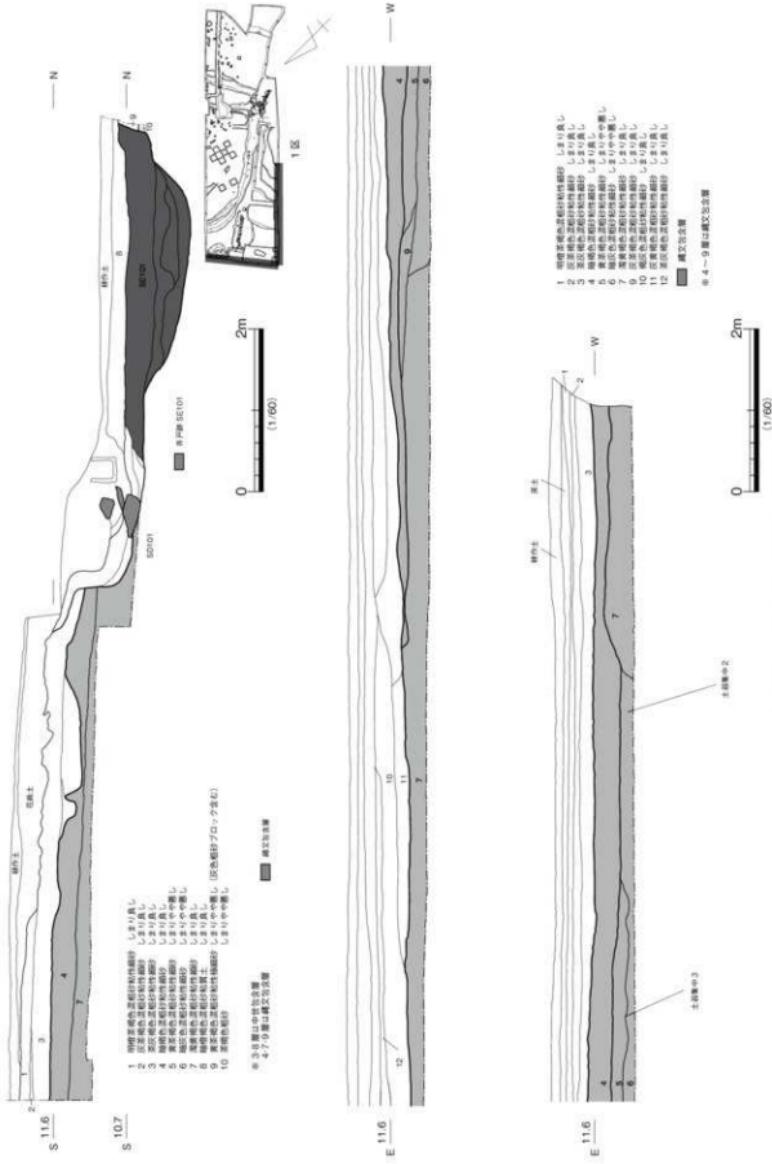
南壁は中世包含層とその下位の縄文包含層がよく残る。縄文包含層は主に1区北側を中心に層序遺存が顯著で、上位に4層、下位に7層が存在する。また7層の部分的な窪みに5層（第8図下段5・6）が堆積す

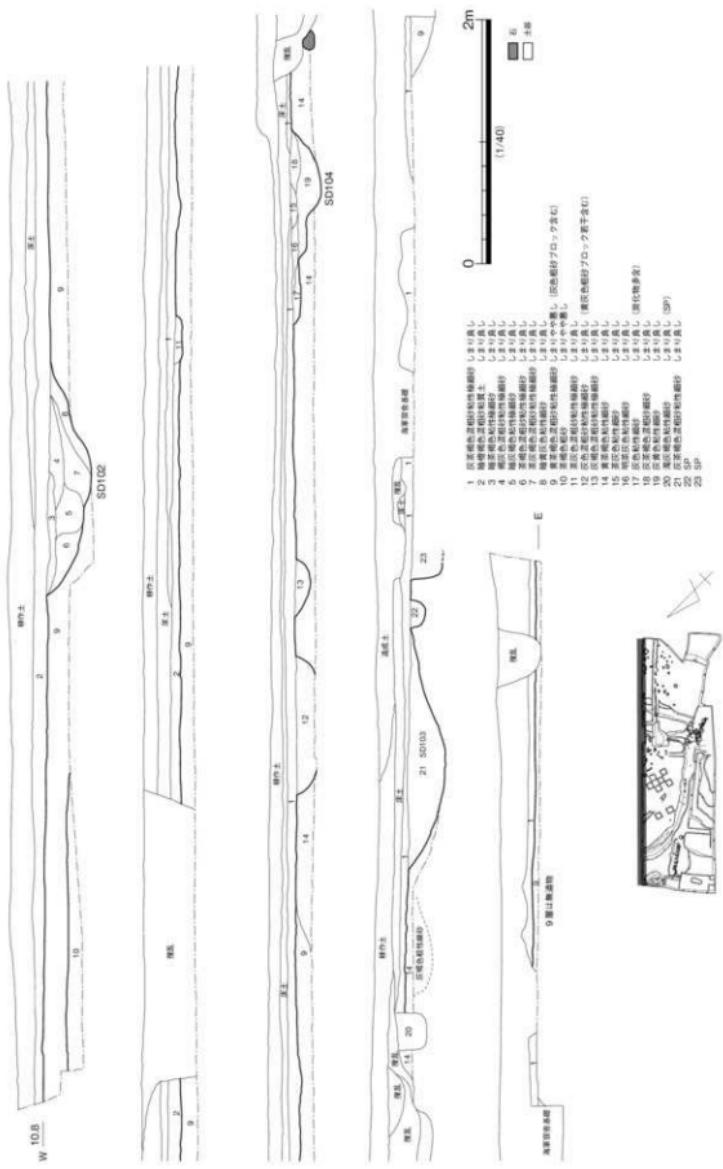
第6図 調査地形区分図



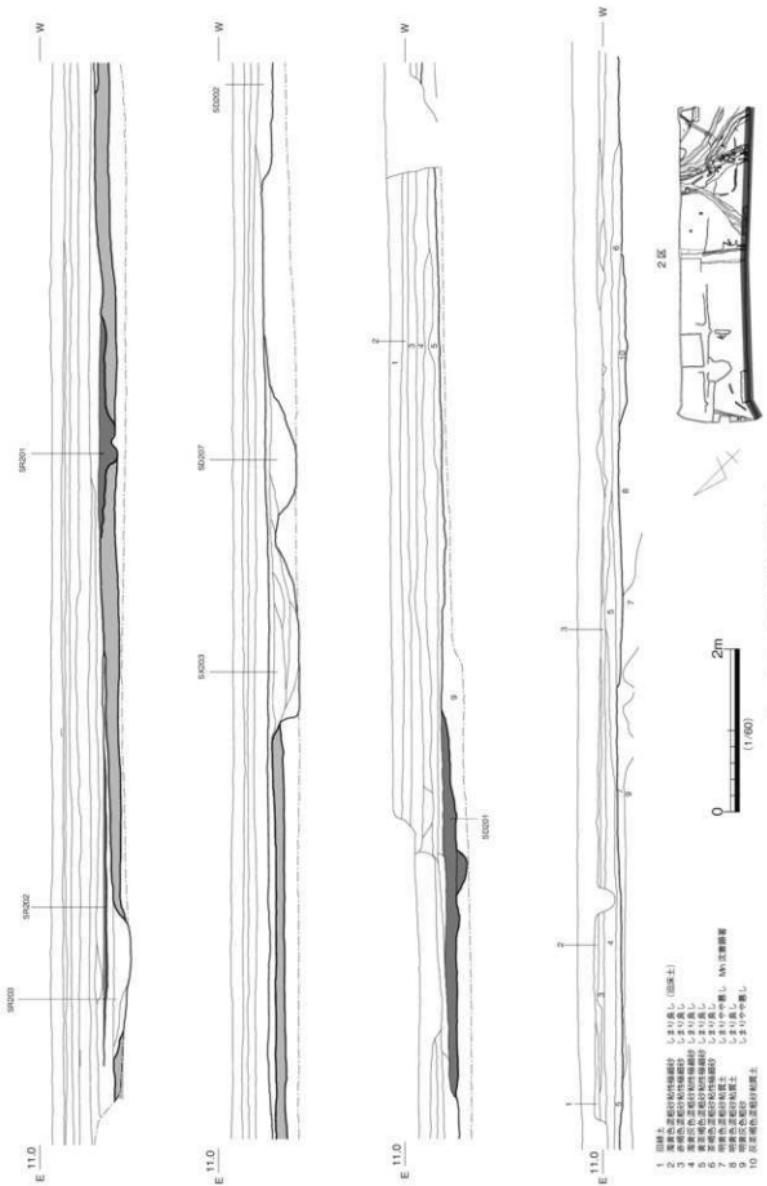


第7図 調査地全体概要図

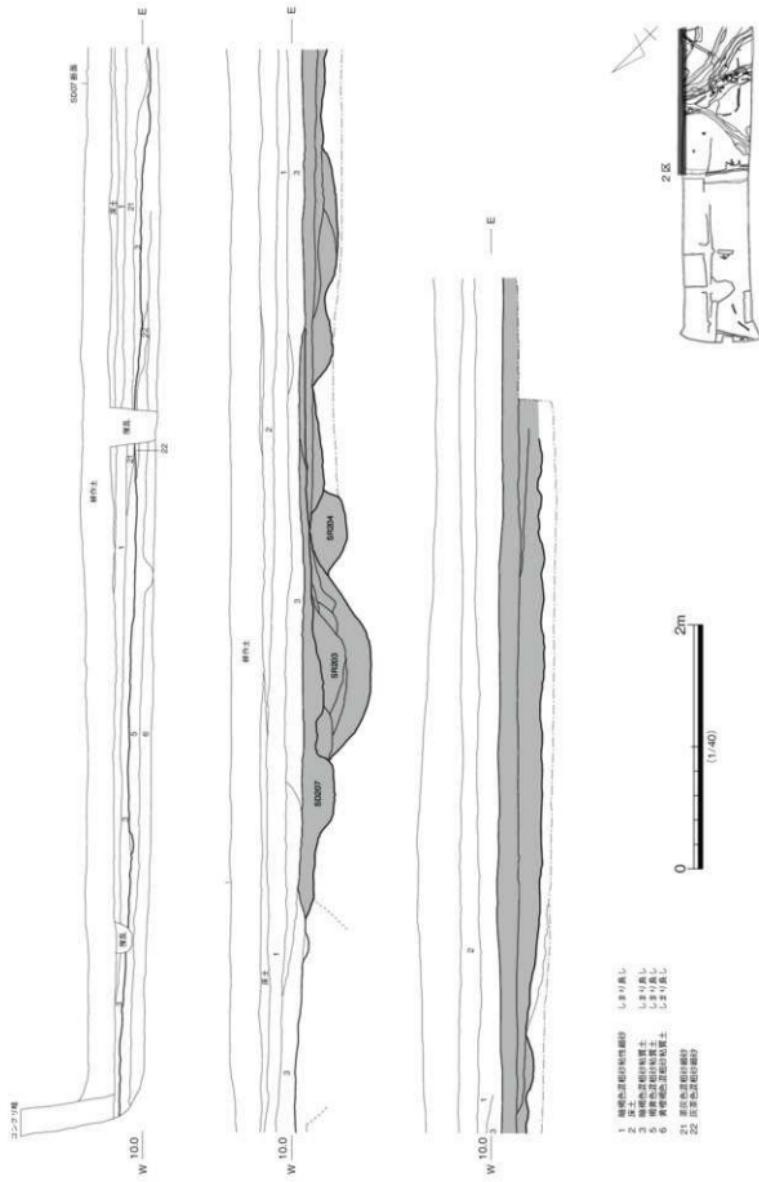




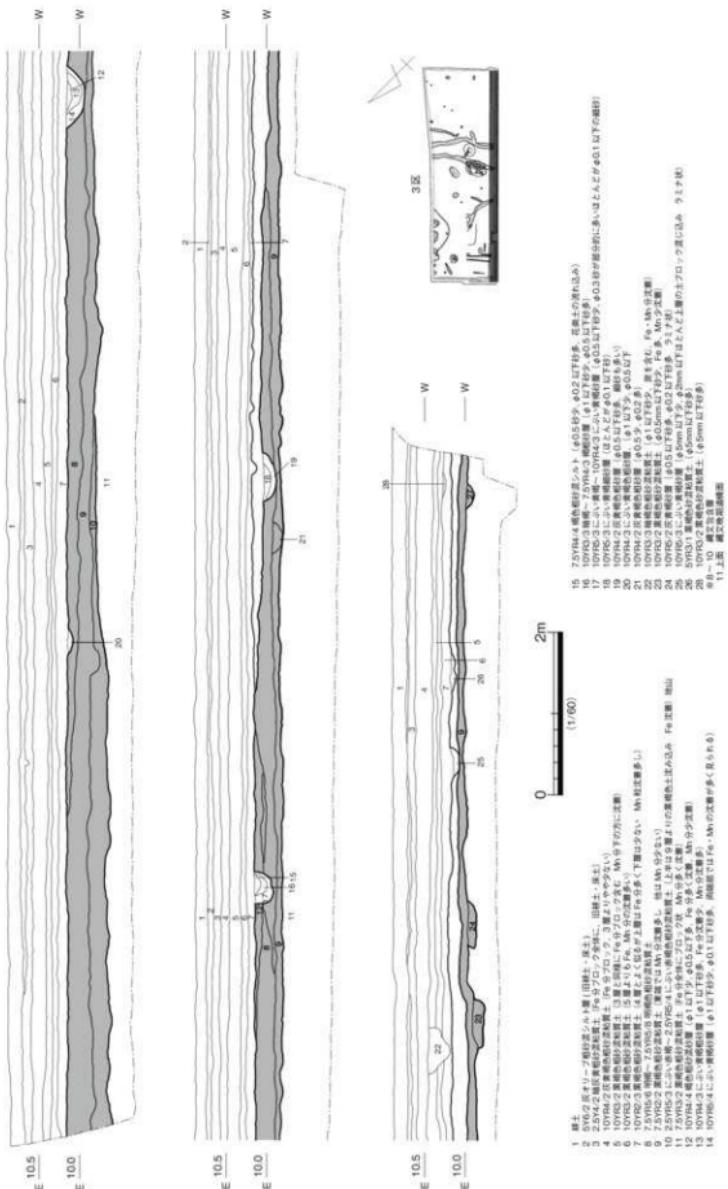
第9図 1区北壁土層断面図



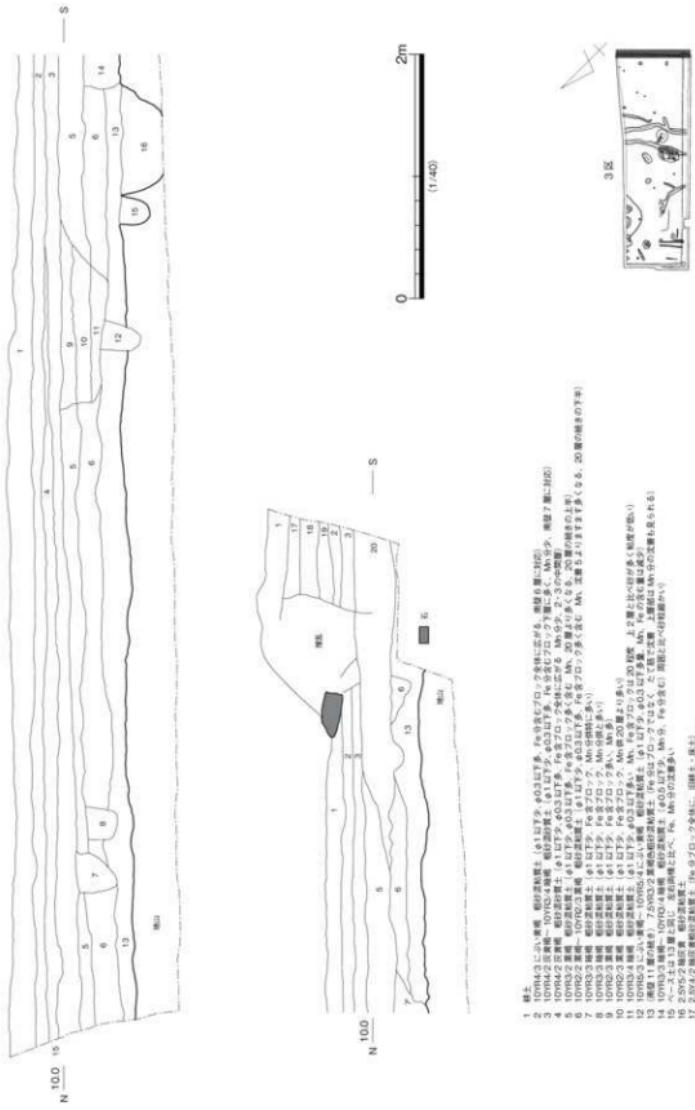
第10図 2区南壁土層断面図



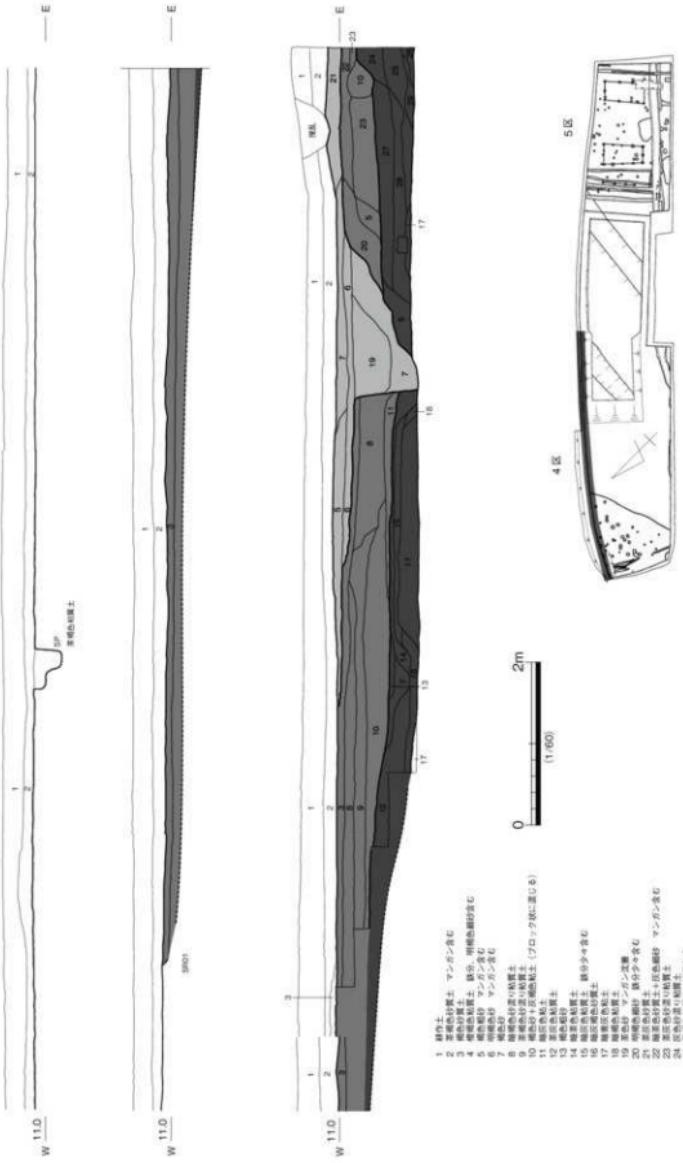
第11図 2区北壁土層断面図



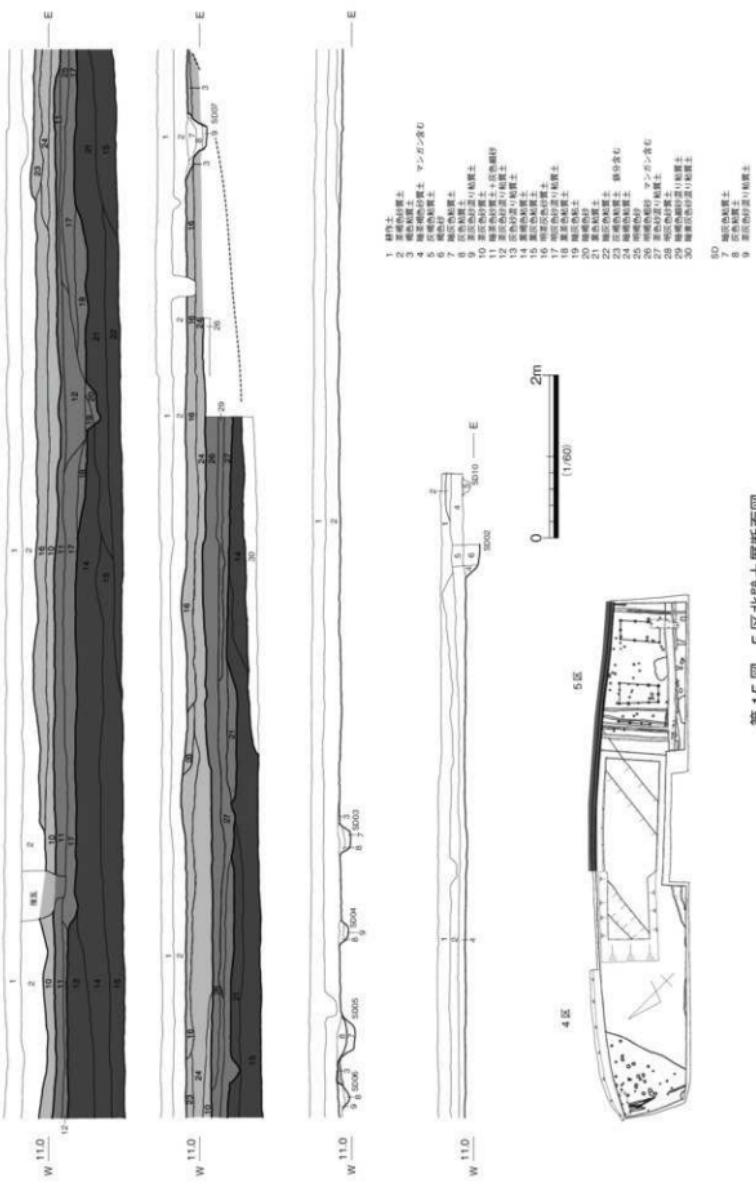
第12圖 3區南壁土層斷面圖



第13図 3区東壁土層断面図

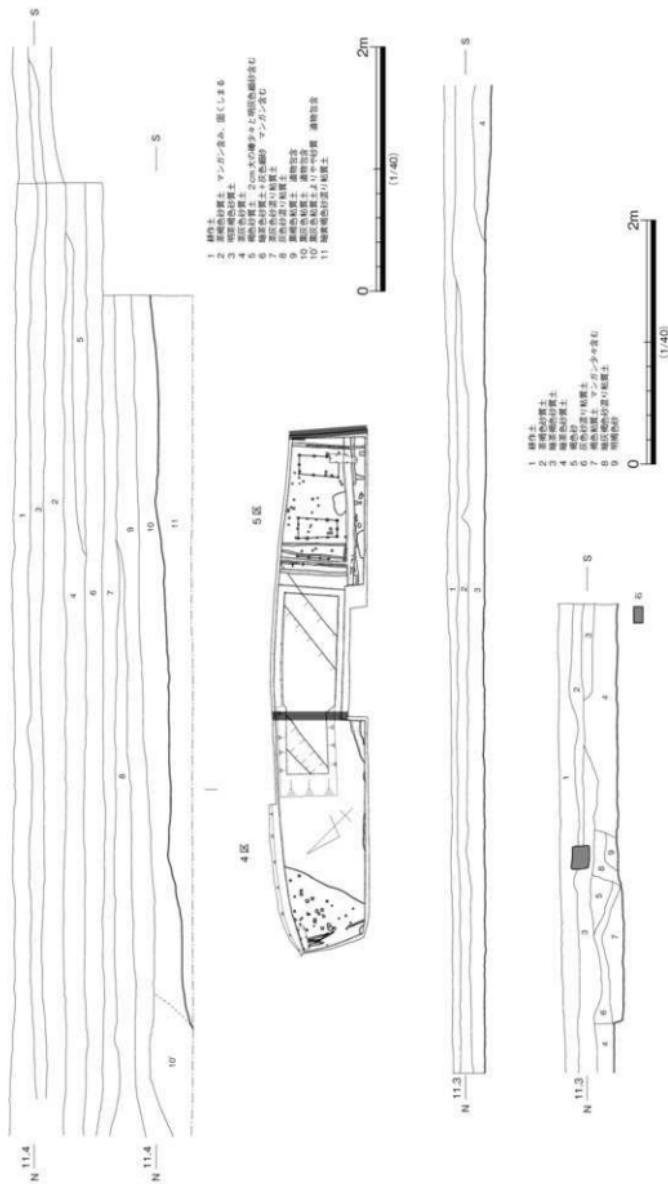


第14圖 4區北壁土層斷面圖



第15图 5区北壁土層断面図

第16図 4区・5区東壁土層断面図



る。土質は中世包含層が灰色系の粗砂混じり粘性細砂で水田耕土の可能性もある。縄文包含層は暗褐色系の粗砂混じり粘性細砂で下位ほど褐色味が薄く、7層では濁った黄褐色系の粗砂混じり粘性細砂となる。7層の窪みに堆積する5層は土の織りがやや弱いため、調査時は縄文期の低地帯として考えていた。ところが、5層下位面が延長7.5mにわたって平坦で、底面に貼り付く土器群を検出したことや、7層の窪みとしている当該層の下がり際の肩部傾斜が比較的急なこと、地形的に高い位置にあたることなどを勘案すると、何らかの遺構が存在した可能性は否定できない。

なお、南壁の包含層堆積は東に向かって緩やかに下降している。

北壁断面（第9図）は耕作土の下位に床土・中世包含層が所在し、その直下に灰色粗砂ブロックを含む黄茶褐色系の砂質土層（第9図9）が堆積する。中世遺構調査後に千鳥状に設置した下層確認トレチでは上部層から沈下した可能性がある石器が若干出土しただけで、基本的には無遺物層と考えられる。

## 2区

調査区南壁を記録している。1区に近い調査区西側では地表下50cm、調査区東側では100cmで明黄灰色砂の基盤層を確認した。緩やかに東に下降する地形である。特に東側では地表下70cmで古代～中世の河川跡SR201・202を検出し、その基盤となる褐色系堆積層を除去した後に弥生～古墳時代の河川跡SR203・204を検出した。

当該箇所の堆積層は全般的に粗砂を多く含み、河川堆積によって形成された可能性が高い。巨視的には開析谷2としての窪みが現況地形に僅かに現れるが、比較的早い段階（縄文時代早期以前か）に埋没を完了しているものとみられる。

## 3区

東に向かって傾斜する地形である。調査区東端では地表下75cmで弥生時代の遺構面、その下位に50cm厚さの包含層が堆積し、その層を除去すると縄文時代晩期の土坑を中心とした遺構群の検出面となる。ただし調査区西端での包含層の厚さは約10cmと浅い。

## 4区・5区

発掘調査範囲の西端にあたる調査区である。両区を斜めに跨いで古代の流路SR401が、その下位に縄文包含層が堆積する。この低地帯域は図示した範囲において調査したため、縄文包含層の厳密な東西の立ち上がりは不明である。ただ、巨視的には先述した谷1に相当しており、流路堆積層と判断できる。

流路の東西の微高地には中世柱穴群・建物跡が所在する。その検出面は耕作土・床土直下にあり、削平を被った面である。流路東側にある建物跡・溝跡は流路SR401の東肩部堆積層を切り込んで掘削している。

SR401は幅約30m、深さ0.3mの広く浅い流路形状で、西肩寄りに深さ約1mのクレバス状の深部がある。堆積層は茶灰色系砂質土（第14図5・6・21、第15図10・16・24）でクレバス部分は褐色砂層である。

縄文包含層はSR401より幅広い範囲に存在し、上層が厚さ20～60cm、下層が30～60cmある。

## 第2節 縄文時代の遺構・遺物

### （1）概要及び報告の手順

縄文時代の遺構は3区で晩期を中心とした土坑群を検出した。また、1区・4区・5区では弥生時代

以後の遺構調査終了後、下位の縄文時代遺物包含層（以下、縄文包含層という）調査を実施し、縄文時代早期を中心とする遺物が出土した。このうち1区は他の調査区より高所に位置しており、前節で5層とした窪み堆積層は底面が平坦で土器集中部を伴うことから、遺構埋土の可能性を否定できない状況である。少なくとも、5層出土遺物とその上位を覆う4層出土遺物には相応の時期差が存在するものと思われる。一方で、5層の窪み堆積の基盤土である7層の遺物は、元来遺物量が少なく、上位層との層境付近の遺物が含まれている可能性もあるので、さほど重視できない遺物群である。したがって4層と5層及び5層下位の3単位の遺物群が1区の主要単位である。

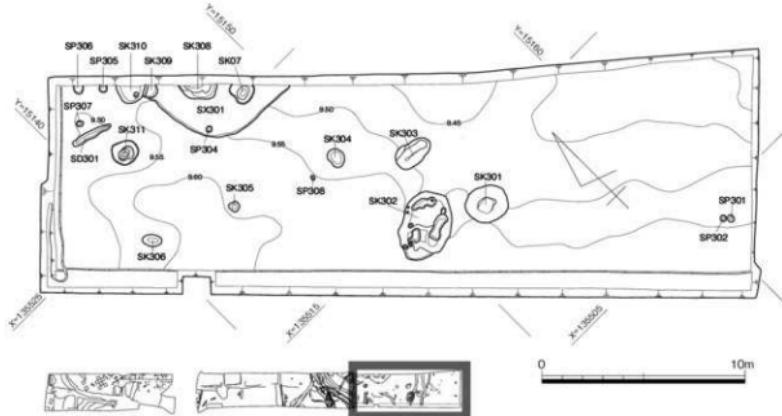
また、2区については縄文包含層の残りが悪く、報告可能な土器は皆無であった。石器については弥生時代以降の遺構検出時に出土したサヌカイト製石器類が少量ある。これらは1区の出土位置・層位不明の遺物と合わせて報告した。

報告はまず遺構が遺存する3区、その後1区⇒4区⇒5区の包含層の順で報告する。3区は遺構図、出土土器・出土石器の順で提示し、1区は遺物分布関連図の提示を行った上で、遺物報告を行う。4区・5区は各区ごとに下層・上層・出土位置や層位不明の遺物の順で報告する。

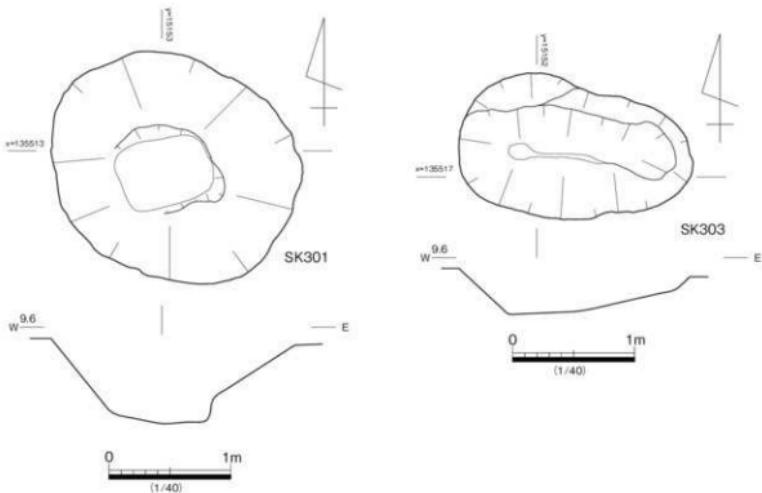
また、出土した石器のうちサヌカイト剥片については末章のまとめで分析対象とし、写真図版に表裏面の写真を掲載して観察表に情報を提示した。また、すべての石器について重量計測を実施して石材別の出土量を比較した。

## （2）3区縄文遺構の調査

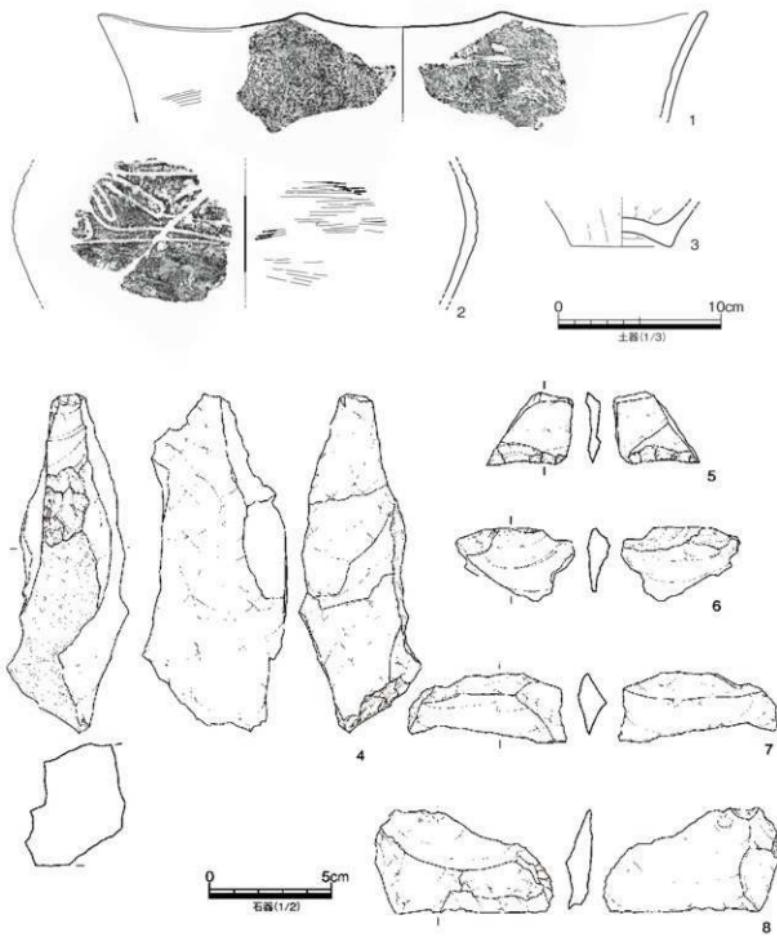
土坑11基及び不明遺構1基を検出した。これらは、弥生時代の溝状遺構の基盤土である縄文包含層（第12図8～10）を除去した後に検出した遺構である。3区全域に散在し、形状は円形や楕円形、不定形なものがある。埋土は灰色系砂質土で、その上部を黒色砂質土が覆う。以下、遺物出土の土坑・不明遺構を説明する。



第17図 3区縄文時代遺構分布図



第18図 SK301・SK302・SK303 実測図



第19図 SK301出土遺物(1)

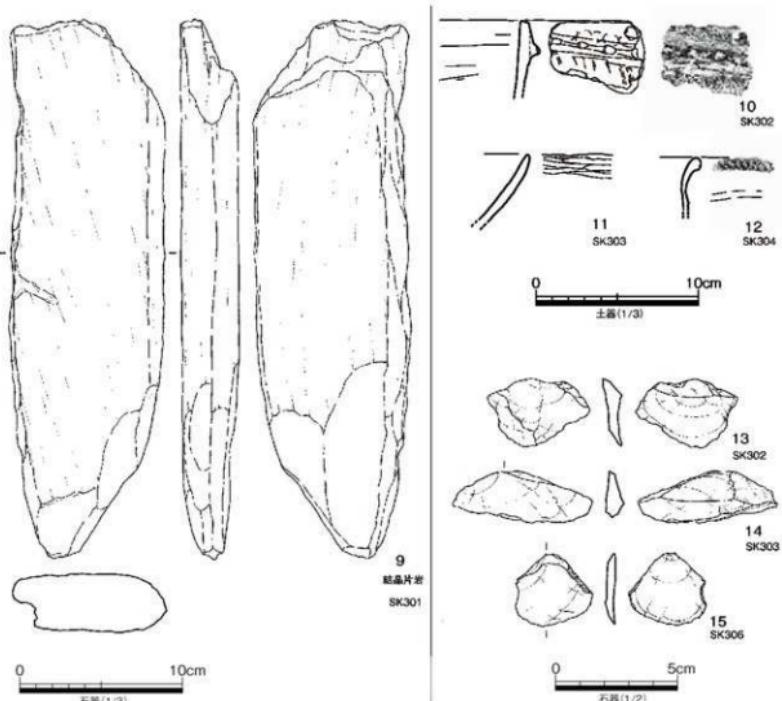
### SK301 (第 18 ~ 20 図)

長径 2.1 m、短径 1.8 m、深さ 0.65 m、平面楕円形、断面逆台形の土坑である。底面は 0.8m × 0.55 m の隅丸長方形を呈し平坦である。埋土は暗灰色系砂質土の単層で、検出面から約 10cm 下がって側面に貼りついた状態で結晶片岩製の碇石片が出土した。このほか埋土中からは縄文時代後期の磨消縄文系土器、サヌカイト製石器・剥片類が出土した。

1 は口縁部片である。接合しないが、同一個体と思われる口縁部破片が 2 片あり、両者の傾きを検討したところ、口縁部波状の径 37.5cm の深鉢に復元できる。内外面とも器表面の磨滅が顕著だが、外面に条痕、内面に条痕及び指押さえが確認できる。波状口縁の粗製深鉢と判断した。2 は胴部径約 28.6cm の浅鉢である。胴部中ほどが緩やかに膨らむ形状で、最大径部から肩部にかけて横位に展開する細葉系意匠を沈線で描き、磨消縄文で加飾する。胴部下半及び内面は横方向の丁寧なヘラ磨きが施される。3 は上げ底の深鉢底部片である。

以上の土器は 2 の浅鉢が、胴下半に屈曲が出現する縁帶文土器後半期より古く、S 字状カーブで口縁に至る器形と推定され、沈線による細葉の曲線文様などから、近畿地方の北白川下層式あるいは瀬戸内地方の彦崎 K I 式に該当する（千葉 2008）。

石器は 6 点出土した。4 はサヌカイト製の石核である。節理に沿って剥離した厚さ 4cm の扇状の大



第 20 図 SK301 出土遺物 (2)・SK302 ~ 304・306 出土遺物

形剥片を素材として、その側縁となる自然面を打面に設定し幅3～4cmの剥片を剥ぎ取るものである。5はサスカイト製のスクレイパーである。剥片末端の両面から加工して付刃する。6～8はサスカイト製剥片である。6・8は打撃時の破碎により、打面が遺存しない。7は幅広く平坦な打面を打撃して剥取した横長剥片である。9は結晶片岩製の碇石片である。長さ33.5cm幅約10cmの破損品。側縁は丁寧な敲打仕上げが残り、上下端が折損する。近隣の須田・中尾瀬遺跡には縄文時代晩期のほぼ完形の碇石が出土しており、当該品とはほぼ同じ形状である（（財）香川県埋文調センター2000a）。

以上の出土遺物から、縄文時代後期前半の土坑である。

#### SK302（第18・20図）

長径3.5m、短径2.5m、最大深さ0.5mの平面楕円、断面不整形の土坑である。底面は凹凸が顕著である。埋土中から土器片・石器片が出土した。土坑形状から風倒木痕の可能性もあるが、出土遺物がある点を重視して遺構として報告する。

10は刻目突帯文をもつ深鉢口縁部片である。端部からかなり下がった位置に斜行する突帯を貼付し、突帯と端部との間に円形浮文を施す。突帯より下は縦位の板ナデにより器面を調整する。当該地域の晚期後半の突帯文系土器（森下2008）には例を見ない文様パターンである。

13は山形の打面を有するサスカイト製剥片である。背面は先行剥離面及び底面に覆われ、連続して剥片を剥取している。

突帯文土器が出土することから縄文時代晩期後半の遺構である。

#### SK303（第18・20図）

長さ2.0m、幅1.15m、深さ0.4mの長楕円形の土坑である。断面はV字状である。埋土中から少量の土器片・石器片が出土した。11は単口縁でボウル状形態の浅鉢である。14は破碎により打面が遺存しないサスカイト製剥片である。

出土遺物からみて、縄文時代後期から晩期にかけての遺構である。

#### SK304（第17図）

直径約1mの不整円形の土坑である。深さは0.13cmで断面は皿状を呈す。埋土中から少量の土器片が出土した。12は胴部から口縁部にかけてS字状カーブを描く器形の浅鉢である。口縁端部が肥厚し、その外面に細かな縄文を施す。後期縁帶文系土器の彦崎K1式に該当する。

#### SK306（第17図）

長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.23mの小形土坑である。埋土中から少量の土器・石器片が出土した。土器片は報告可能なものはないが、石器剥片が1点出土している。15は薄い点状打面のサスカイト製剥片である。

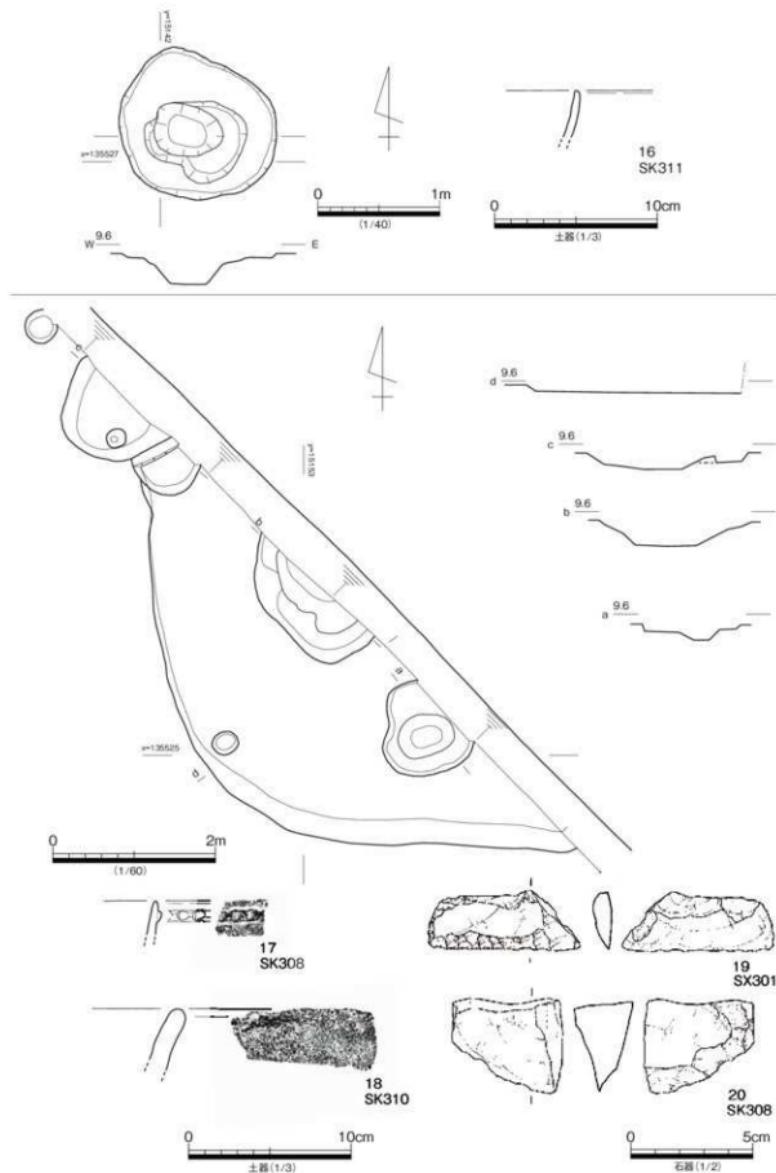
周囲の遺構の時期から見て縄文時代後期から晩期にかけての遺構である。

#### SK311（第21図）

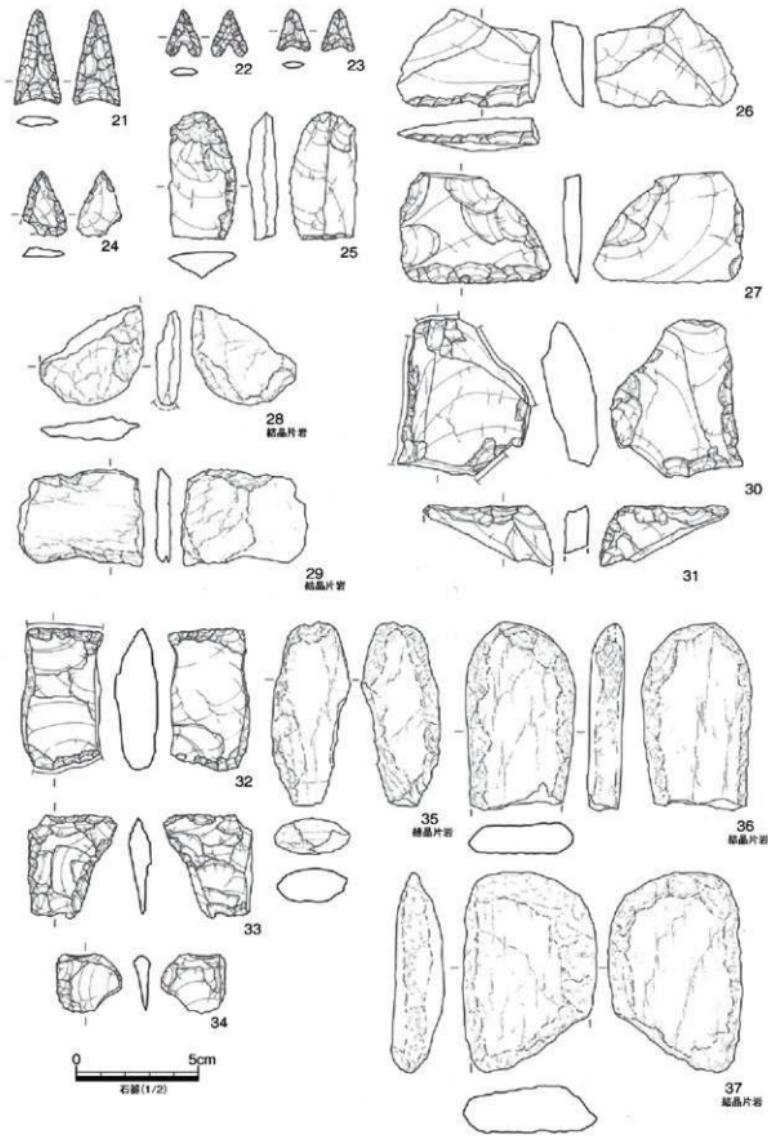
直径1.3mの円形土坑である。底面中央の直径0.6mほどの範囲が大きく窪み、深さ0.28mをはかる。埋土中から土器片1点が出土した。16は直口の浅鉢口縁部片である。所属時期は明らかでない。

#### SX301・SK307・SK308・SK310（第21図）

北壁沿いの8.5mの範囲に遺構が集中する。埋土はいずれも暗褐色系砂質土で下位に灰色系砂層が介在する。円形でもっとも大きな掘り方をもつSX301は肩部の傾斜が緩やかで、SK308付近に向かって下降する床面形状をもつ。SK307は深さ0.16mで浅い円形の窪み。SK308はそれより深く、側縁の傾



第21図 SK308～311・SX301 実測図・出土遺物



第22図 3区土坑周辺包含層出土遺物 (1)

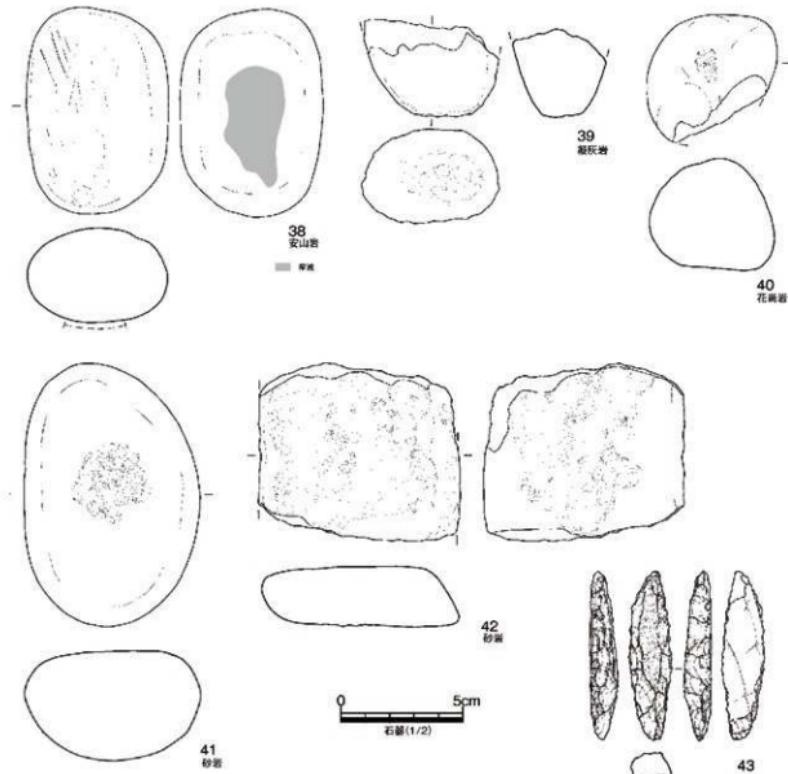
斜が急である。SK310はSX301と重複する遺構か併存する遺構か不明だが、同様の埋土である。出土遺物は少ないが土器片・石器片が出土した。

17はSK308出土の突帯文系深鉢口縁部片である。口縁端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付する。突帯は扁平で、D字形の刻目を施す。18はSK310出土の深鉢口縁部片である。器壁は厚く、口縁端部は丸く取まる。縄文時代後晩期ではなく、1区等出土の押型文系土器に類似する。19はSX301出土のサスカイト製スクリイバーである。打面除去した横長剥片の末端から側縁にかけて、片面からだけ調整加工を加えU字の刃部を作り出すものである。20はSK308出土の加工痕有剥片である。肉厚で打面半截した剥片の末端側背部から粗い加工を施すものである。

縄文時代晩期後半の突帯文土器が出土していることから、晩期の遺構である。

### 3区土坑群周辺出土の石器（第22・23図）

土坑群を覆う褐色系砂質土（縄文包含層）から出土した石器である。21～24はサスカイト製石鎌で



第23図 3区土坑周辺包含層出土遺物（2）

ある。21は平基式で側縁が直線的に先端に向かう形態で長さ4cmの大形品である。22・23は長さ2cm以下の小形品で22は凹基、23は平基である。24は剥片を素材として片面縁辺に調整加工を一周巡らせただけの未製品である。25はサスカイトの縱長剥片の側縁から打面側にかけて調整加工を施したスクレイパーである。調整加工は背面を打撃し、腹面側のみに施す。26・27はサスカイトの横長剥片を素材とするスクレイパーである。いずれも片面のみの調整加工で、26は背面側から、27は腹面側から打撃して加工する。28は結晶片岩製の打製石斧刃部片である。刃部付近に磨滅が残る。29は結晶片岩製の加工痕有剥片である。図の下端に若干の調整加工を施す。30～32はサスカイトの楔状石核である。33・34は同様の石核から剥離した剥片である。いずれも側縁に両極打撃によるとみられる敲打がみられる。35は結晶片岩製の磨製石斧片である。周縁部が強く敲打されており、叩石に転用されているが、図の下端に僅かに刃部が残る。刃部厚さ1.5cmほどの両刃の伐採斧とみられる。36・37は扁平な結晶片岩の周縁に敲打痕が残る叩石である。

38～42は磨石・叩石類である。38は安山岩で片面に磨滅、一方に線状痕が残る。39は凝灰岩の叩石。小口部に敲打痕を認める。40は花崗岩製の磨石である。41・42は砂岩製の叩石である。いずれも腹面に敲打痕を認める。

43はサスカイト製の角錐状石器である。今のところ莊内半島で唯一の旧石器である。背面に自然面を残す横長剥片を素材として主要剥離面側から打撃して周縁全面に調整加工を施す。断面形は中央部が台形で基部が三角形。先端側は折損するため明確ではないが、基部同様に断面は三角形と推定できる。残存範囲で稜上加工は施していない。ただ、基部裏面に若干の基部加工を施す。長さは7cmで、備讃瀬戸地域のナイフ形石器文化期の角錐状石器としては標準的な中形品である（森下編2000）。

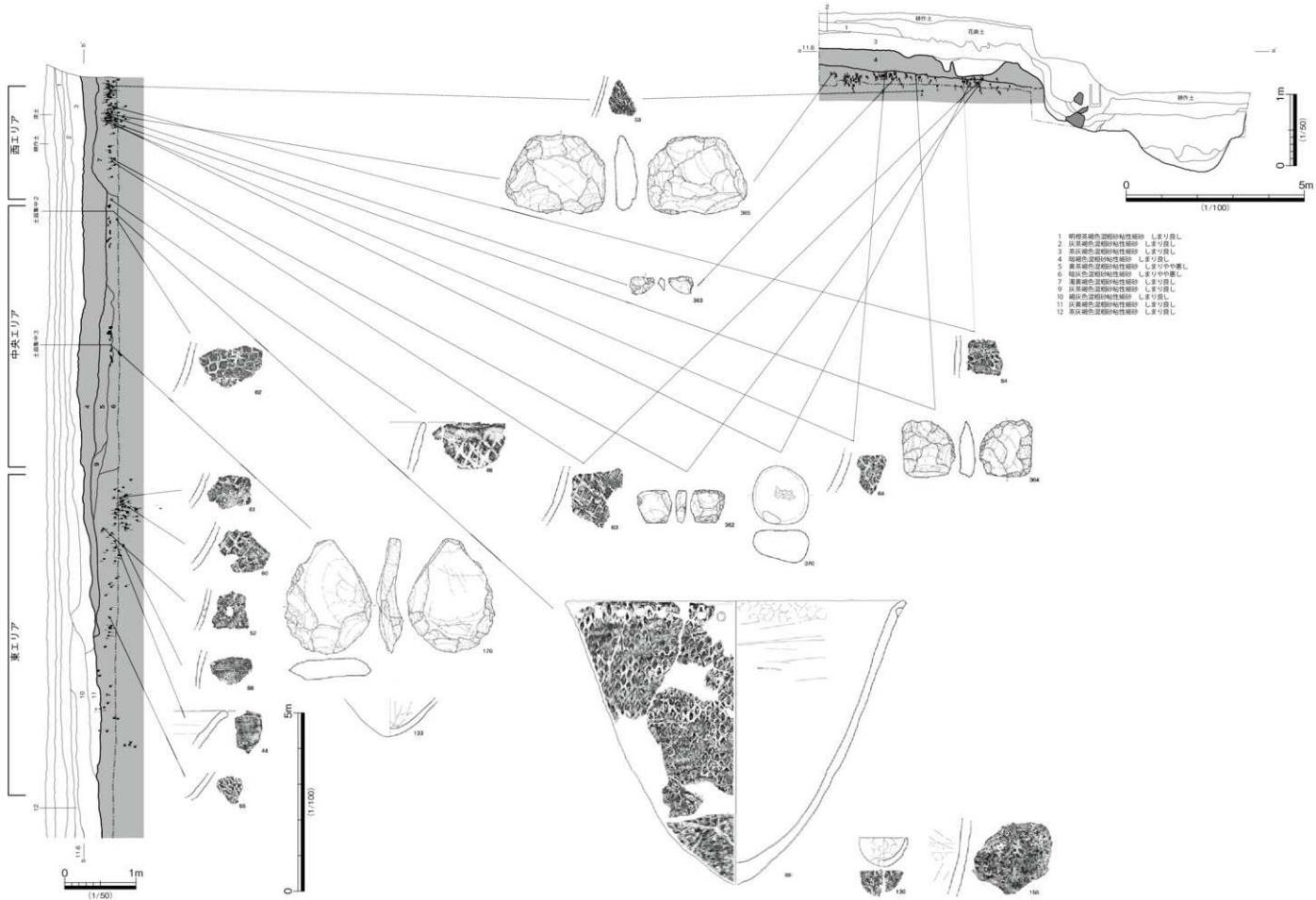
### (3) 1区縄文包含層の調査

1区の南西部は丘陵縁辺にあたり、周囲より約1mほど地盤が高い。縄文包含層はその南西部を中心良好に遺存する。前節でも記したように中世包含層の下位に4層（暗褐色系砂質土）、5層（黄茶褐色系砂質土）、7層（濁黃褐色系砂質土）の順で堆積しており、そのうち5層は東西8mほどの範囲の窪みに堆積した層である。なお、7層の下位には無遺物層とみられる9層がある。

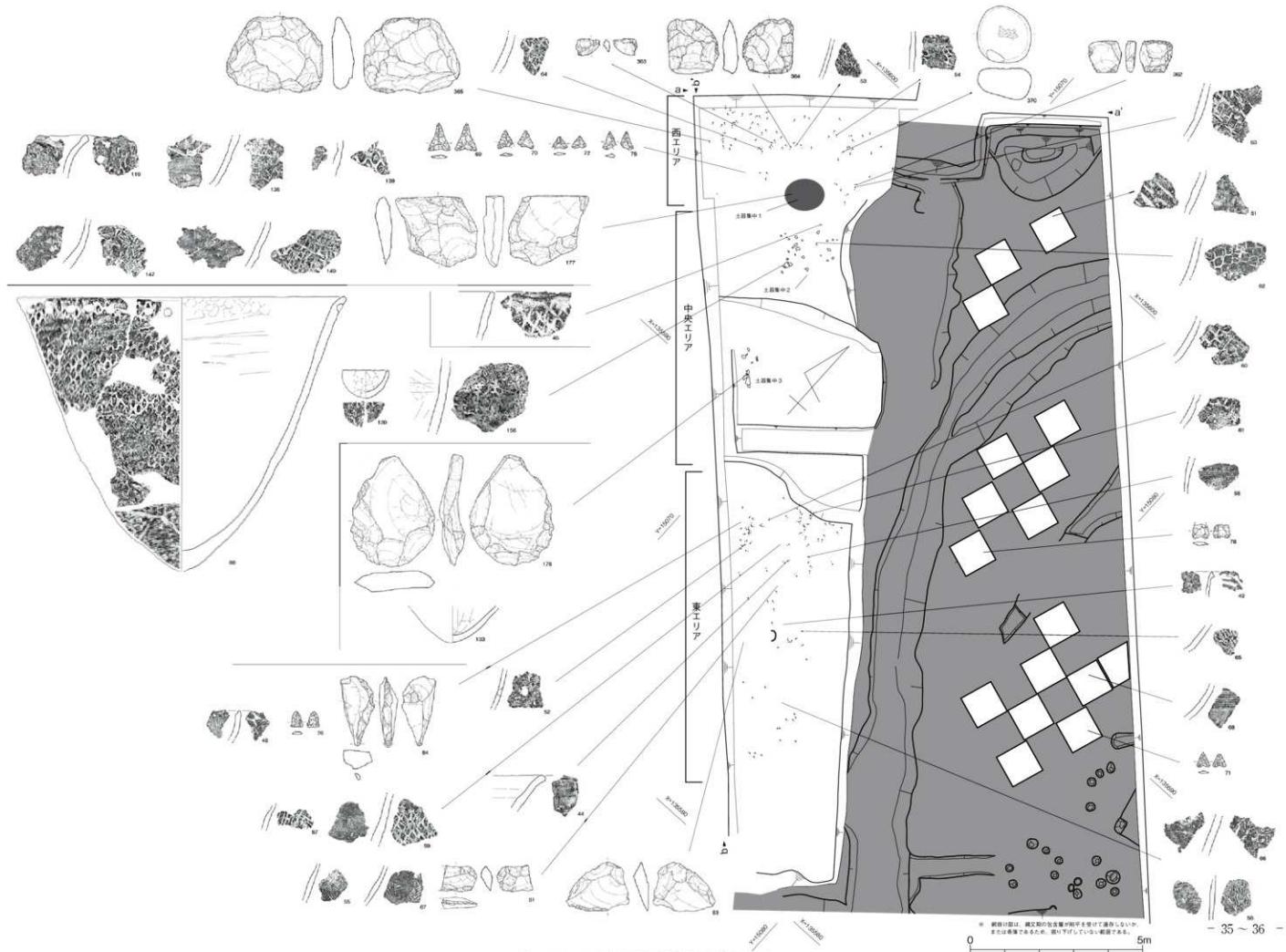
第24図に示した1区西側縄文包含層遺物分布図は、図左側の白抜き部分が縄文包含層遺存範囲、右側の網掛け部分は縄文包含層が遺存しない（9層が露出）範囲である。右側で千鳥状に白抜きとなっている部分は、下層確認のためのトレンチである。ここでは少量の石器片が出土したが、経年による垂直移動の結果、9層に沈下し削平を免れた遺物と判断し、7層と合わせて報告している。

第24図では縄文包含層分布域を便宜上西エリア、中央エリア、東エリアに区分した。調査の詳細手順は次のとおりである。当初4層遺物を全エリアで掘り下げ、遺物を一括取り上げした。さらに中央エリアの5層分布域の窪みを掘り下げ、出土遺物を原則一括取り上げしたが、5層（第25図土層図の6層を含む）下位面に貼りついて出土した大形の土器類については、出土位置を記録した後に取り上げた。5層分布域の窪みの肩部に相当する7層はすべての遺物出土位置を記録しながら掘り進めた。さらに北側（第24図の右側）の9層は千鳥状に確認トレンチを設定して掘り下げた。

以上の調査手順を経た。このうち、西エリアと東エリアの西半分に遺物分布が多いようにみえるが、これは5層出土遺物の出土位置が反映していないためである。5層出土遺物は1区縄文包含層出土の中でも最も多い量が出土しており、5層分布域の窪みとした中央エリア・西エリア・東エリアの西半分が主な遺物集中域である。以下、各層ごとに出土遺物を報告する。



第25図 1区西側縄文包含層遺物分布断面図



第24図 1区西側縄文包含層遺物分布平面図

<1区7層出土遺物>（第26～28図）

44～49は押型文系深鉢口縁部片である。44は上開きの胴上半から口縁部が短く外反する形態で、内外面に文様を持たない。45・46は口縁部が外反しない深鉢形態で、45は口縁端部からやや下がった位置に楕円文を施し、46は口縁部直下から楕円押型文を施文する。47は深鉢口縁部片で僅かに外反する。外面に楕円文、内面に斜行沈線を施す。48・49は小形の深鉢口縁である。このうち48は口縁部がやや内湾気味となる深鉢口縁部片で、外面は口縁端部まで単位の大きな楕円押型文を施文する。また、内面には貝殻原体押捺文を施文する。49は口縁に刻目隆帯を貼付し、隆帯下位に押し引きによる太い沈線を施文する深鉢口縁部である。

50～58は押型文系深鉢胴上半片である。50・51は外面に楕円押型文、内面に太い斜行沈線文を施文する。52～54は外面に楕円押型文を施文、55・56は山形押型文を施文する。57は半載竹管による斜格子沈線を施す。58は横位の条痕文を施す。

59～68は押型文系深鉢胴下半片である。59～65は外面に楕円文を施す。このうち、63・64は格子状の楕円文である。65は楕円の単位が細長い。66・67は外面に山形文を施文する。66は山のピッチが細かく、68は外面に条痕文を施す。

69～78はサヌカイト製打製石錐である。いずれも凹基式で、69～72は側縁が直線的なもの、73～76は側縁中程で屈曲し裾に向かって広がる正面形を呈するものである。なお、77・78は製作途上の欠損品である。基部形状に着目すると、69・70が緩やかな凹基、71～76は左右の逆刺が外に聞く形状で、後者が量的に優勢である。

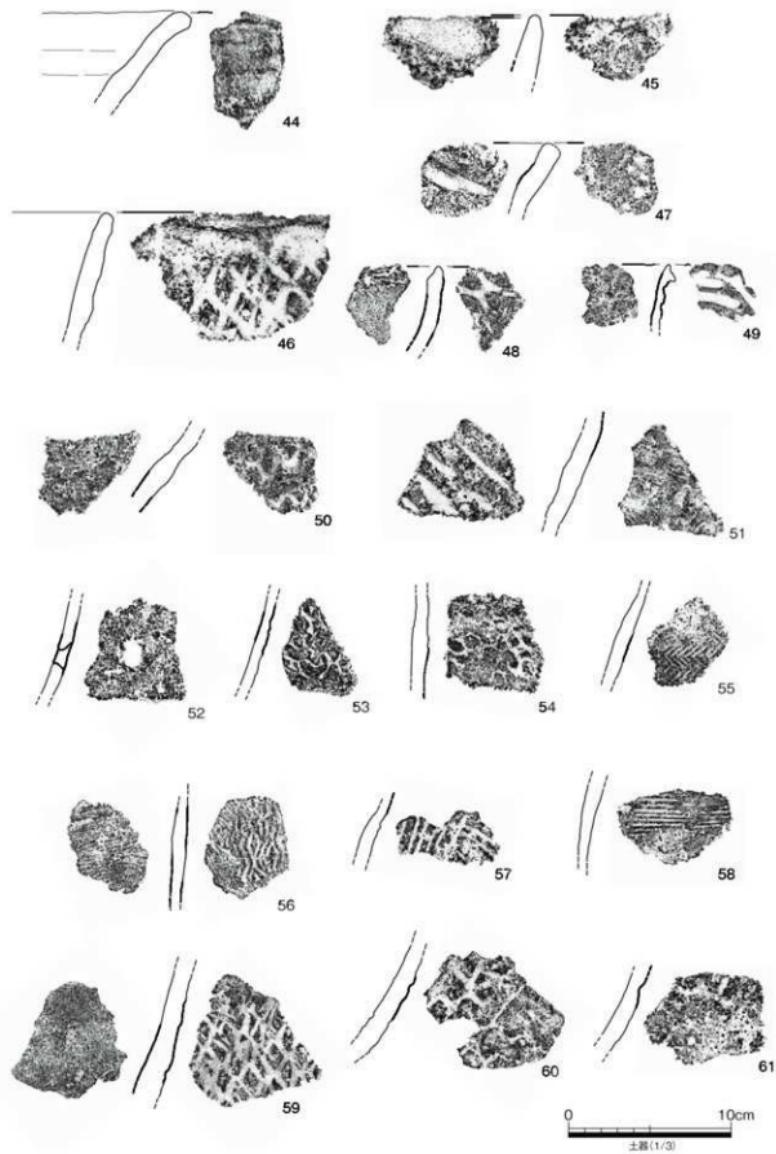
79はサヌカイト製石匙である。横形で素材剥片の背面に多くの調整加工を施し刃部は片刃となる。

80～83はサヌカイト製スクレイパーである。80は端正な正面形を呈す。背面の大部分に自然面を残す素材剥片の腹面側を主に加工して片刃を作出し、背部は丸く仕上げる。81・83は厚味のある素材剥片の打面部を大きく除去して背部を粗加工し、刃部は主に腹面側を加工して直線的な片刃を作出する。82は薄い剥片を素材として、弧状の片刃を作出する。

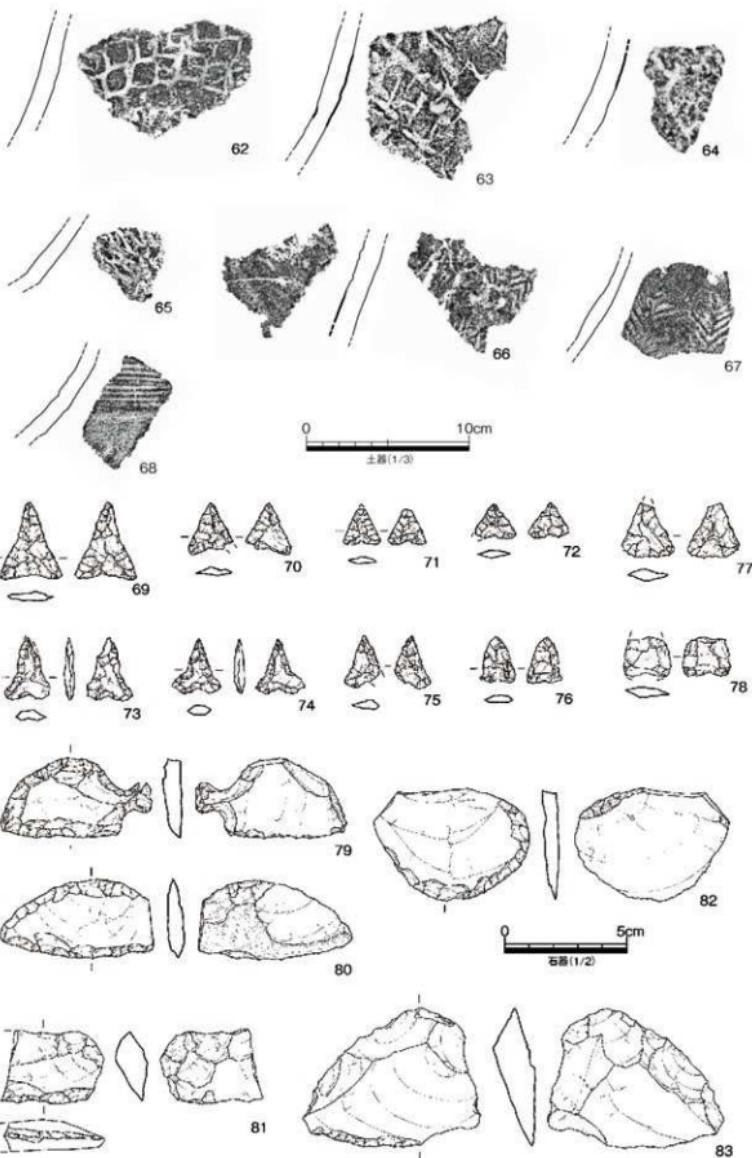
84はサヌカイト製の大形石錐である。厚さ2.1cmのやや厚めの石核を素材として、急角度の調整加工を施し側縁形状を整え、対する折損面との間に下端作用部を作出する。作用部には回転磨滅及び捻じれによる微剝離痕を認める。

85～87は叩石類である。いずれも礫表面に研磨痕があり、磨石として使用した後、叩石に転用している。85は安山岩製。表裏の研磨が顕著で、一部側縁に明確な棱線を残す。敲打痕が線状を呈しサヌカイト剥片素材の両極打撃を示唆する。86は硬質の凝灰岩製で周縁部のあばた状敲打が顕著。87は砂岩製である。

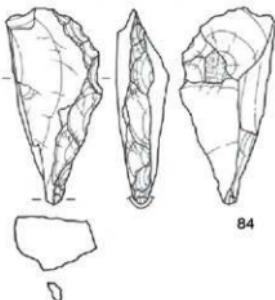
以上の1区7層出土遺物は、押型文系土器において、外面に大粒の楕円文を施すものが多いこと、文様単位の重複が多いこと、格子目状となる原体もあること、口縁部内面に斜行する太いナデ沈線を施文するものが含まれることから、高山寺式に該当する。一方で、突帯文、沈線文、条痕文等を施文する個体があることや、弛緩した角度の山形押型文を施文する個体もあり、これらは高山寺式に後続する穂谷式に位置づけられることから、早期後半の高山寺式から穂谷式にかけての時期と考えられる（矢野2008）。



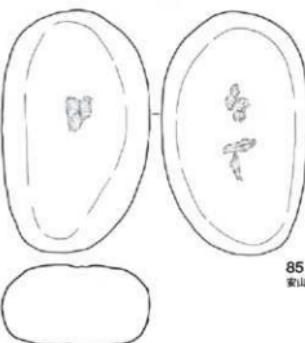
第26図 1区縄文包含層7層出土遺物 (1)



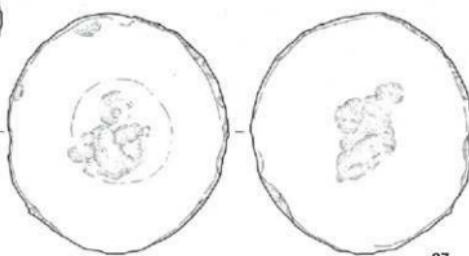
第27図 1区縄文包含層7層出土遺物 (2)



84

85  
東山岩86  
湖底岩

0 5cm  
石器(1/2)

87  
砂岩

第28図 1区縄文包含層7層出土遺物 (3)

<1区5層下位出土遺物>（第29～31図）

88は図上で完形に復元できる楕円押型文系深鉢である。器高47.2cm、口径56.6cmで上開きの胴部から口縁部が僅かに外反する。口縁外面には、押型文原体を用いたと思われる直径15mmの円形刺突文が巡る。胴部外面の押型文は継位の楕円文である。内面は横位の板ナデ調整を施しており、斜行ナデ沈線は認められない。底部は尖底である。

89は口縁部から胴部下半まで残存する楕円押型文系深鉢である。僅かに膨らみながら直立する胴部から、口縁部が緩やかに外反し端部が肥厚する器形である。復元口径は48.4cm。胴部外面の押型文は継位楕円文で、内面は胴部から口縁部にかけて、太形の斜行沈線を施す。胎土に角閃石と思われる微粒を含み、細かな繊維質圧痕が器面及び胎土中にみられる。

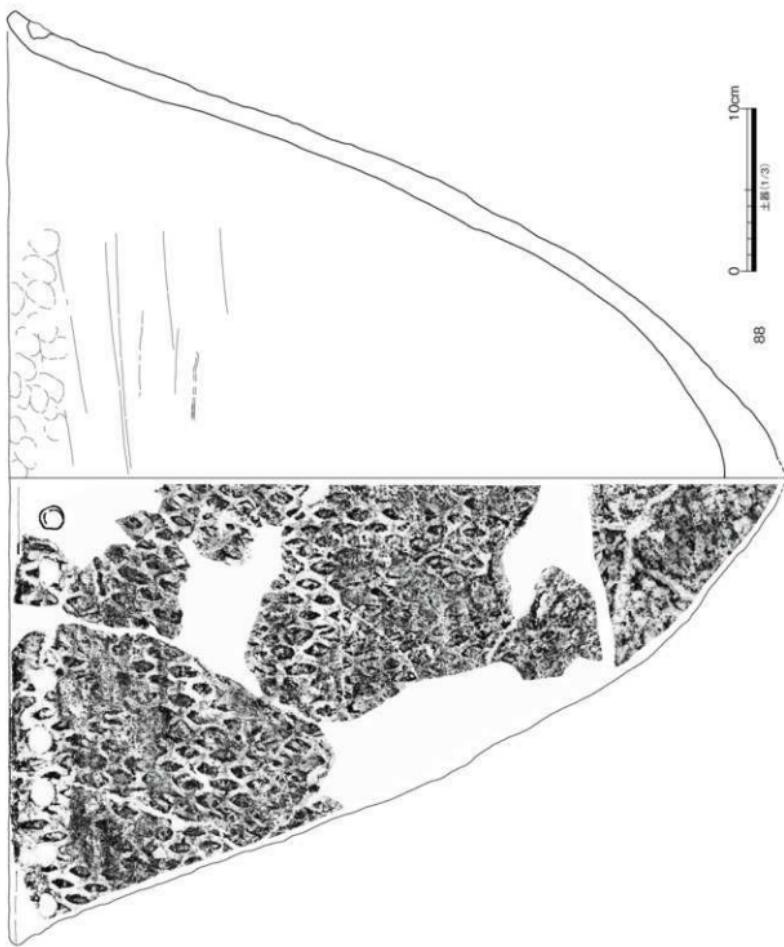
90～92は楕円押型文系深鉢の口縁部片である。90は緩やかに外反する器形で外面に押型文原体によるとみられる円形刺突文が巡る。残存範囲には内面の沈線はみられない。91は上開きの胴部からそのまま口縁部に至る器形で内面に斜行沈線を認める。92は胴部から強く外反する器形で内面に通常とは逆の右上がりの斜行沈線を認める。

93～103は楕円押型文系深鉢の胴部片である。93・94・96～98、101・102は楕円の単位が大粒で格子目状となるもの。99は楕円間が離れて空白部が多い原体である。楕円の形状は小口部が尖り、側縁が緩やかな弧状を呈すため、斜葉文としてもよい。内面には横位のハケ目状工具による器面調整が施される。磨滅顕著な100は、胴部中程に横位区画沈線があり、器面の凹凸の状態で楕円押型文と推定したが、沈線文の可能性もある。

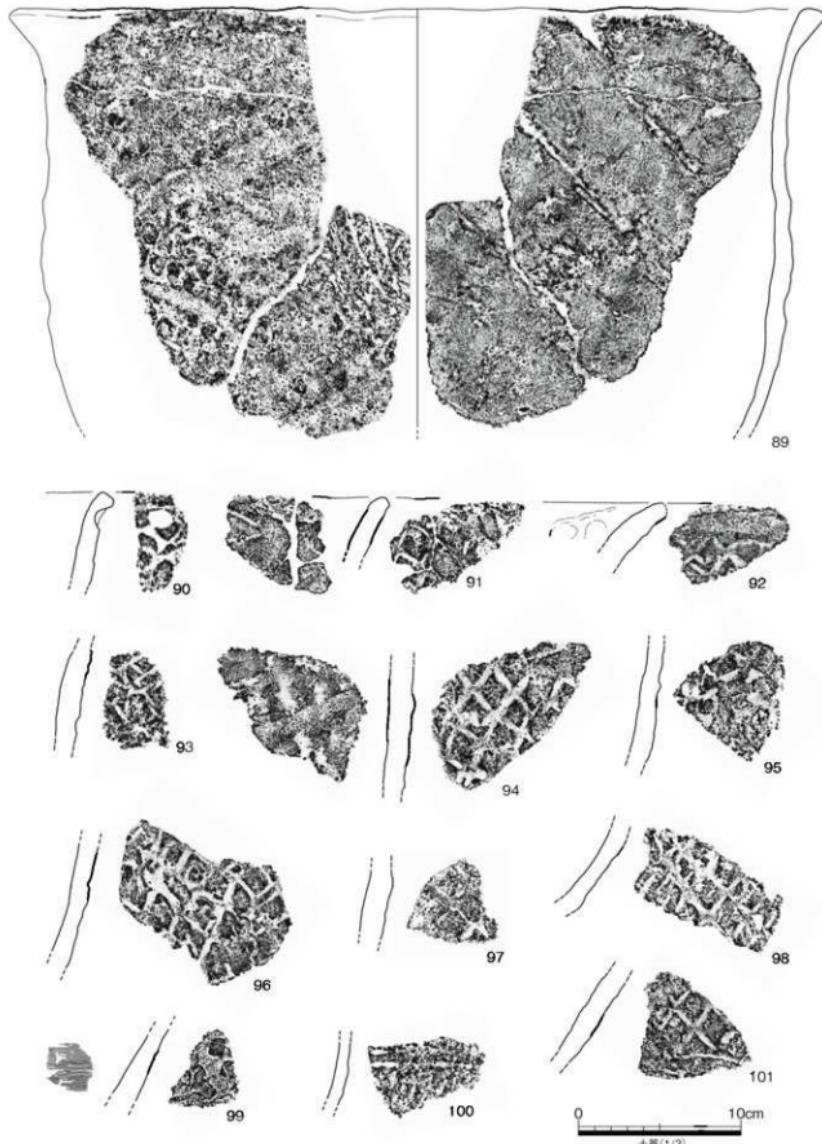
104～109は山形押型文系深鉢胴部片である。104～108は横位で施文し、そのうち106は山形文1条の上位に斜行する条痕沈線文を施し、下位に横位の区画沈線を入れ、さらに継位の条痕沈線文を施している。107・108にも文様の一部に横位の区画沈線を施す。108は幅広い隆帯を貼付する。109は継位で角度の大きな山形文を施す。

石器は、110～112がサヌカイト製打製石鎌である。いずれも側縁は直線的だが、110・112は逆刺中央部が窪み、逆刺が左右下に踏ん張る形状。113はサヌカイト製スクレイパー。剥片刃縁の背面側にのみ調整加工を施し、片刃を作出する。114は蛇紋岩を素材とする石製棒状垂飾である。上端の穿孔部付近がやや幅広く、中央部が僅かにくびれ、下端部は微妙に広がる形状である。断面は隅丸方形で、棱線は不明瞭だが、各面は平坦・平滑に仕上げる。穿孔部上面は表裏とも左右に偏った部分の磨滅が顕著である。この偏りは垂下した際の重心の偏りに連動することから、装身具として垂下使用した痕跡と考える。115は花崗岩製の磨石である。

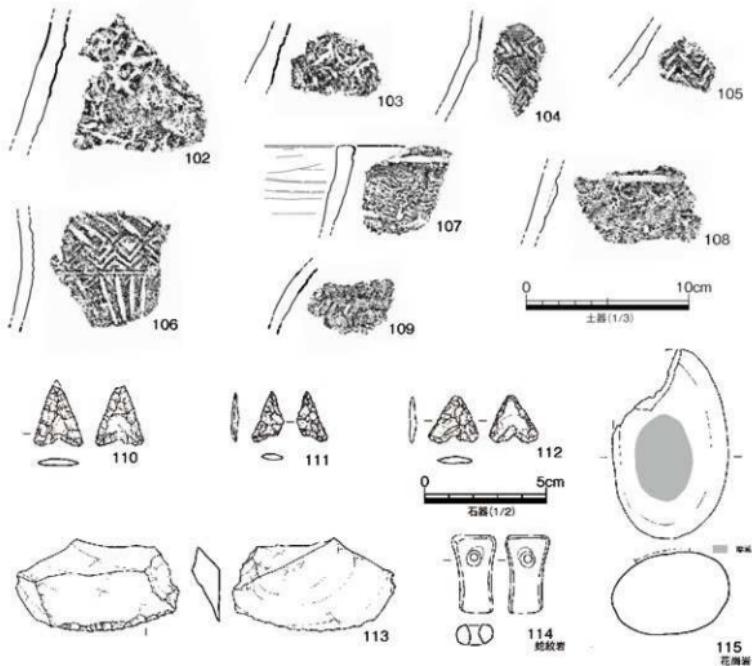
以上の1区5層下位出土遺物は、楕円系押型文土器において、外面に大粒の楕円文を施すものが多いこと、文様単位の重複が多いこと、格子目状となる原体もあること、口縁部内面に斜行する太いナデ沈線を施すものが含まれることから、高山寺式に該当する。ただ、内面沈線を施文せず、口縁部外面に円形刺突文を巡らせる中四国地方に多い深鉢（矢野2008）が含まれる点が7層と異なる。また、5層下位では楕円文押型文以外にも山形押型文とともに沈線文や条痕文等を施文する深鉢が多く含まれており、土器型式としては早期後半の高山寺式から穗谷式の範疇に収まるものと考える。共伴する114の垂飾は玉質とされる滑石または蛇紋岩製で、早期末ごろとされている抉状耳飾を含めた玉質装身具の出現期（川崎1998・2007）とされており、土器型式から導く所属時期と一致する。



第29図 1区縄文包含層5層下位出土遺物 (1)



第30図 1区縄文包含層5層下位出土遺物 (2)



第31図 1区縄文包含層5層下位出土遺物(3)

<1区5層出土遺物>(第32~36図)

116~120は楕円押型文系土器のうち、外面に縦位の楕円文、内面に左上りの斜行沈線を施文する深鉢口縁部片である。いずれも口縁部が緩やかに外反する器形で、118は端部が平坦仕上げ、その他は端部を丸く收める。119は指先による円形押捺を施す。

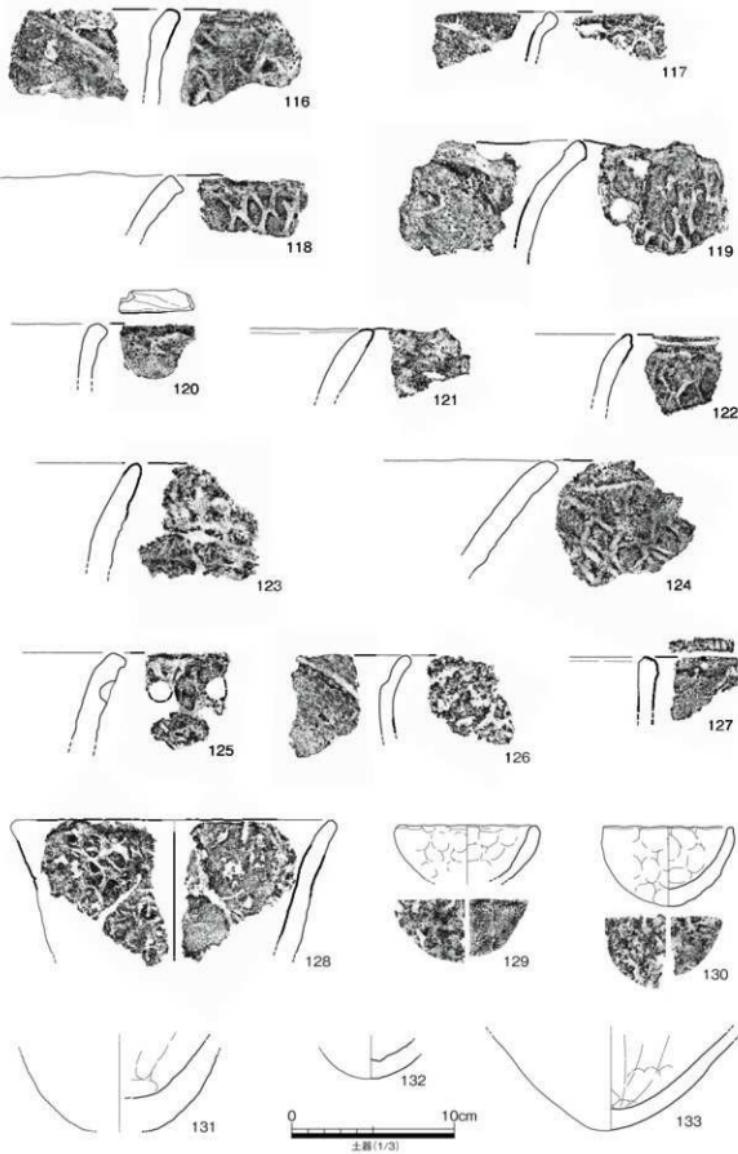
121~125は楕円押型文系土器のうち、内面に斜行沈線を施文しない深鉢口縁部片である。外面の楕円文は122を除き斜位に施文する。125は口縁部外面に押型文原体を用いたと推定される円形刺突文が巡る。

126・127は外面遺存範囲に施文がない押型文系深鉢口縁部片である。126の内面には段状の斜行沈線を施文する。127は口縁端面に条痕原体風の工具による刻目を施す。

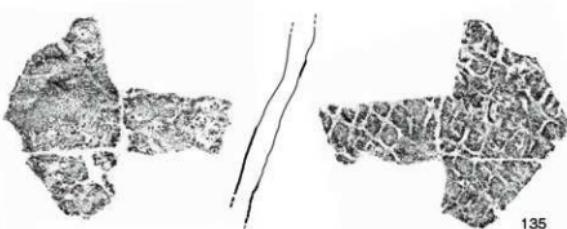
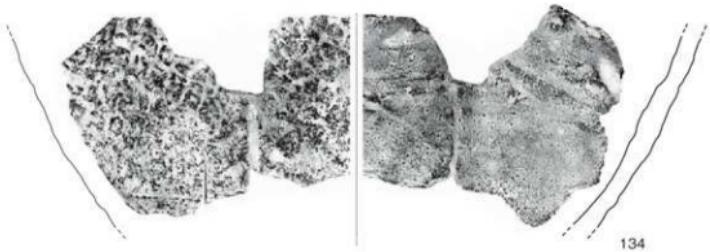
128は楕円押型文系の小形深鉢である。口径19.4cmで、器高は15~18cmほどと推定する。外面には方向が一定しない大粒の楕円文を施し、内面は不明瞭ながら斜行沈線を認める。

129・130は楕円押型文系の楕形浅鉢である。外面に不明瞭ながら楕円押型文を認める。130は口径7.8cm、高さ5.0cmをはかる。

131~133は楕円押型文系の深鉢底部片である。いずれも丸味をもった尖底である。131外面には不

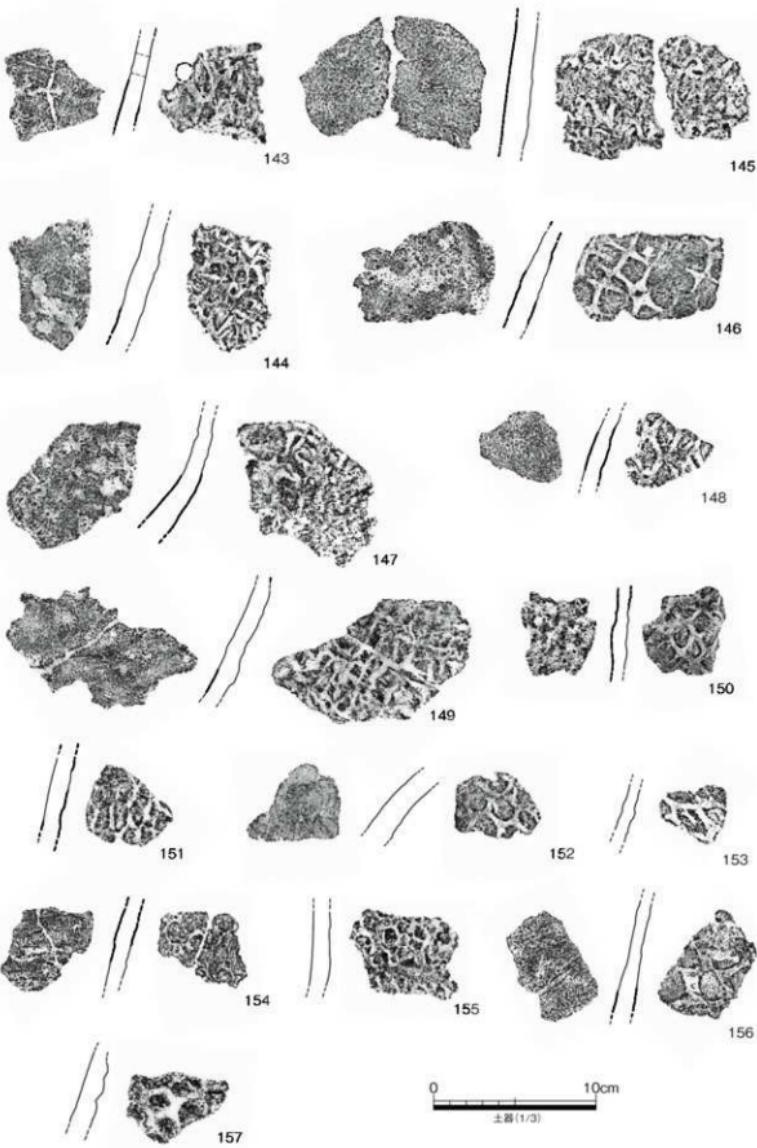


第32図 1区縄文包含層5層出土遺物(1)

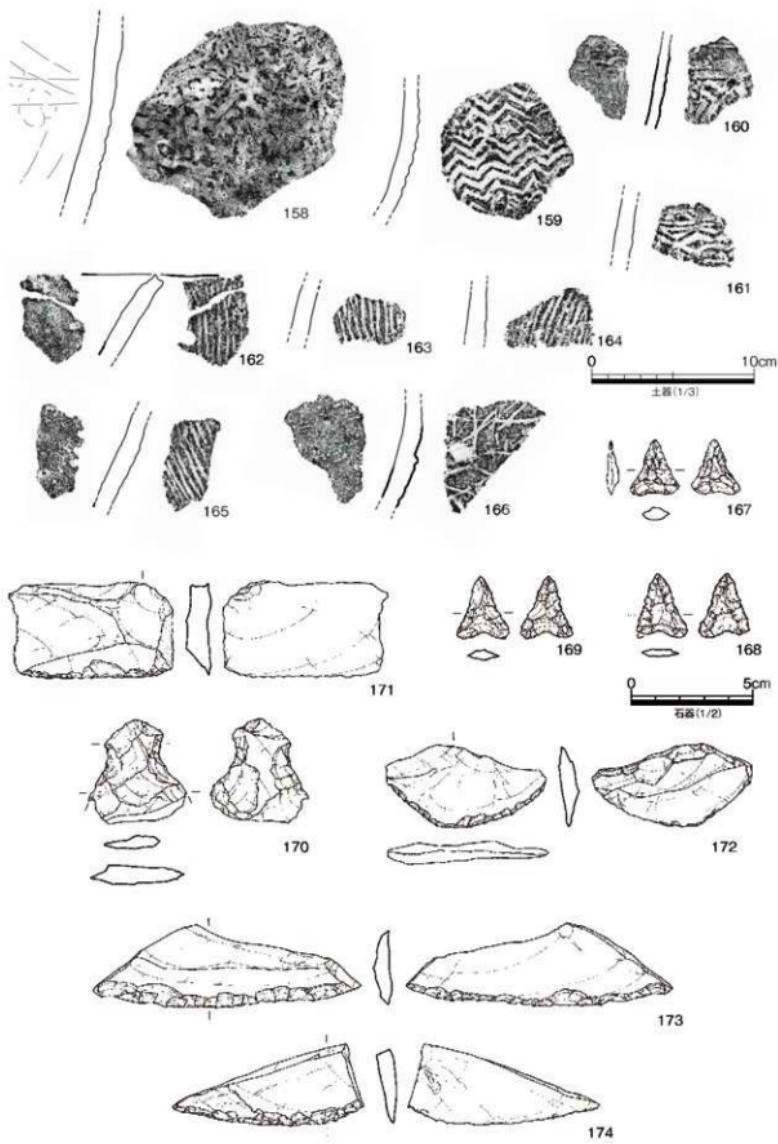


0 10cm  
土器(1/3)

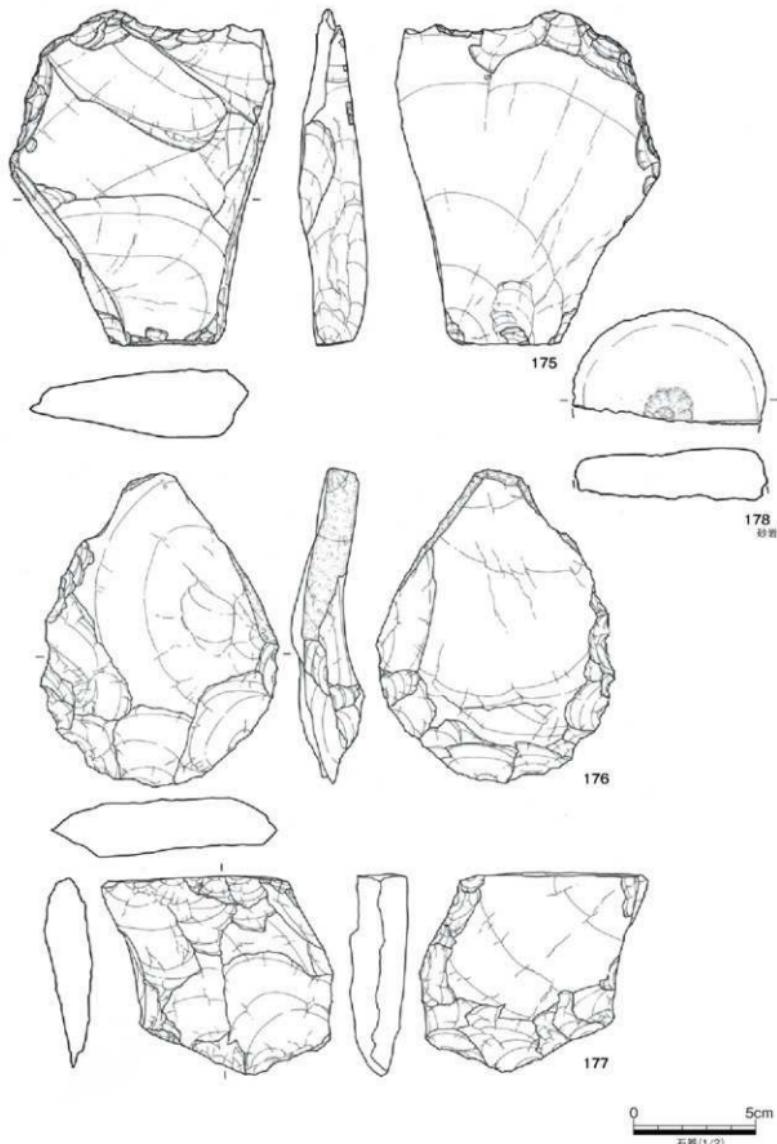
第33図 1区縄文包含層5層出土遺物 (2)



第34図 1区縄文包含層5層出土遺物 (3)



第35図 1区縄文包含層5層出土遺物 (4)



第36図 1区縄文包含層5層出土遺物(5)

明瞭ながら楕円押型文を認める。

134～166は押型文系土器の深鉢胴部片である。134～140は外面に楕円文を施し、内面に斜行沈線を施す。このうち140は格子状の楕円押型文である。また139の内面には土器製作時に付着した木葉圧痕が残る。141～158は外面に楕円文を施し内面に斜行沈線が認められないものである。楕円文には大小や形状にバリエーションがあり、重複して施すものも多い。このうち144・158は楕円文と山形文を組み合わせて施す。159～161は山形文を施すものである。159は胴部の膨らみが強く横位の山形文を胴部全面に施すものである。160は山形文と沈線文を組み合わせて施す。161は山形文の中に入らかじめ楕円部分を組み込んで製作した原体を用いている。162～166は貝殻もしくは木質工具による条痕風の沈線を施す沈線文系土器の深鉢胴部片である。166は貝殻腹縁の圧痕により格子状の沈線文を施す。また166の内面には雜穀類の圧痕が残る。

167～169はサヌカイト製打製石鏃である。いずれも逆刺部が斜下方に踏ん張る形状で、167は側縁の屈曲が顕著である。170はサヌカイト製石匙基部片である。基部の抉り加工が不十分で製作途上品と思われる。171～174はサヌカイト製スクレイパーである。171は直刃、172～174はカーブをもつ刃部である。173は表裏両面に調整加工を施すが、他はすべて片側からのみ調整加工を行う片刃である。175～177はサヌカイト製石核である。いずれも大形の板状石材から表裏を打点をずらしながら剥片剝離する。177は作業途上に分割し、さらに分割面から作業を続けている。178は砂岩製の叩石片である。平面円形で中央部にあばた状の敲打痕が残る。

以上、1区5層出土の楕円押型文系土器は内面に斜行沈線を施す深鉢の存在など、高山寺式の特徴をとどめる。山形文と楕円文を組み合わせて施すものは7層や5層下位ではみられなかつたが、5層では大形個体が存在する。一方で、原体上で山形と楕円を組み合わせる161は九州地方に多いとされる菱形文様内に楕円を有する（矢野2008）文様パターンとの関連性が考えられる。5層も高山寺式及び穂谷式の範疇に収まるものである。

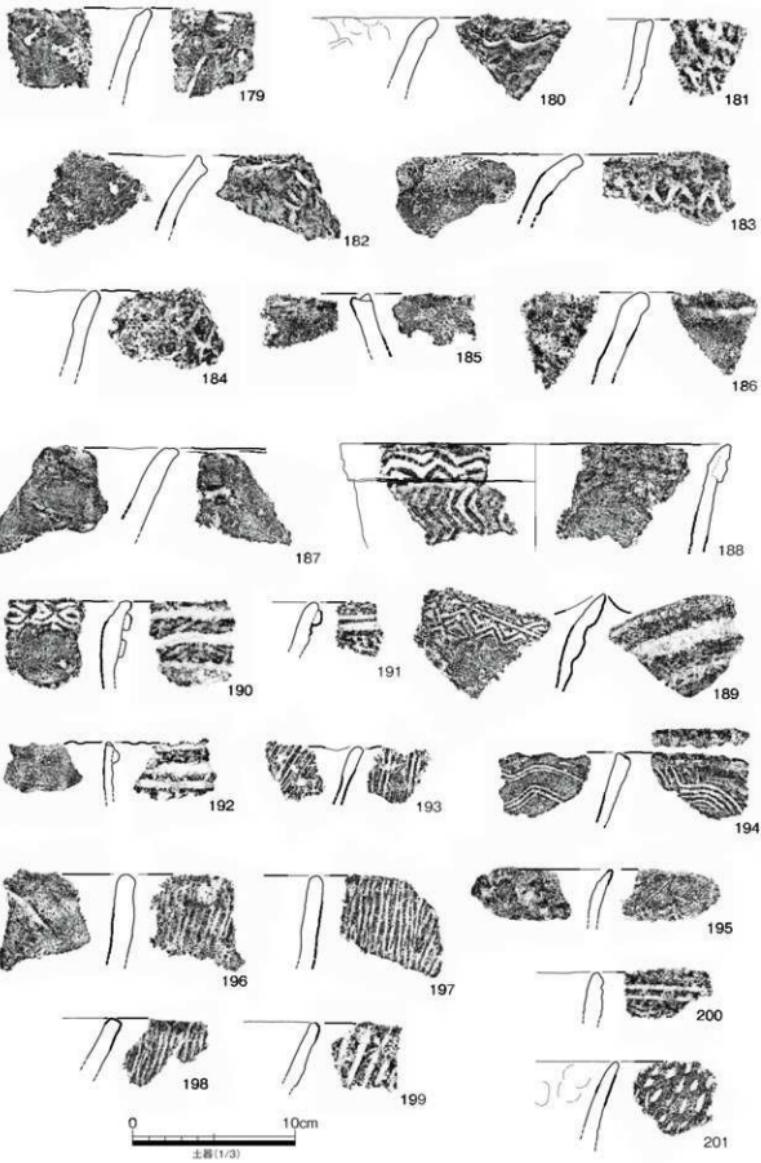
#### <1区4層出土遺物>（第37～42図）

179～184は楕円押型文系土器で外面に楕円文を施す深鉢口縁部片である。179・180・182は内面に斜行沈線を施す。182は沈線上端が口唇部に及び、端面の沈線状の窪みにつながる。楕円文の単位は粒が不揃いで、182は山形文と組み合せた文様となる。

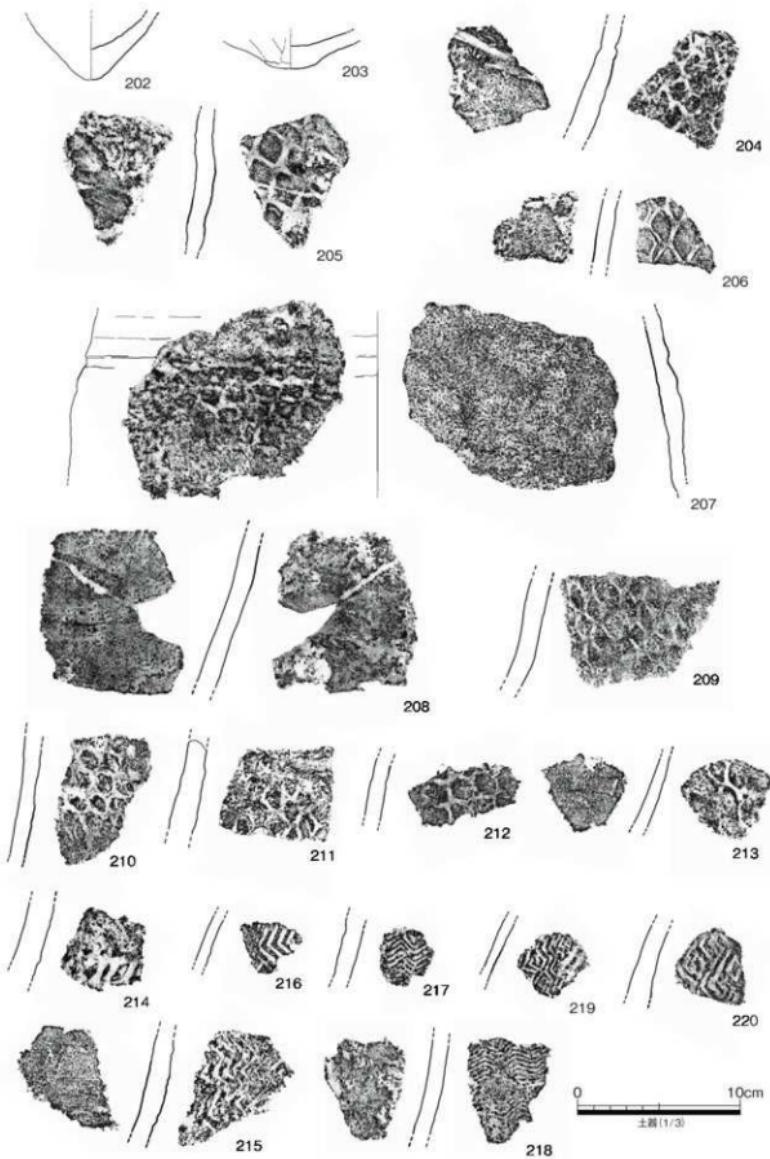
185～187は外面が無文の深鉢口縁部片である。いずれも内面には斜行沈線を施す。185は口唇部にも沈線による窪みが及ぶ。これらの斜行沈線は太いナデで間隔をあけて施している。

188～192は外面に隆帯を貼付する押型文系深鉢口縁部片である。188は口縁端部を折り曲げて幅2.3cmの幅広の隆帯を作り出し、外端面に横位の山形文を施す。隆帯より下位は縦位の山形文を施す。189は口縁部が波状を呈し、幅1.5cmの隆帯を2条貼付する。内面には直線で区画された2条の山形押型文を施す。190は口縁端部からやや下がった位置に幅1.1cmの隆帯2条を貼付し、押型文原体で刻む。内面は山形文と楕円文を組み合せた菱形文を横位に施す。191・192は口縁部直下に細い隆帯（突帯）を貼付し、下位に沈線や刺突文を施す。

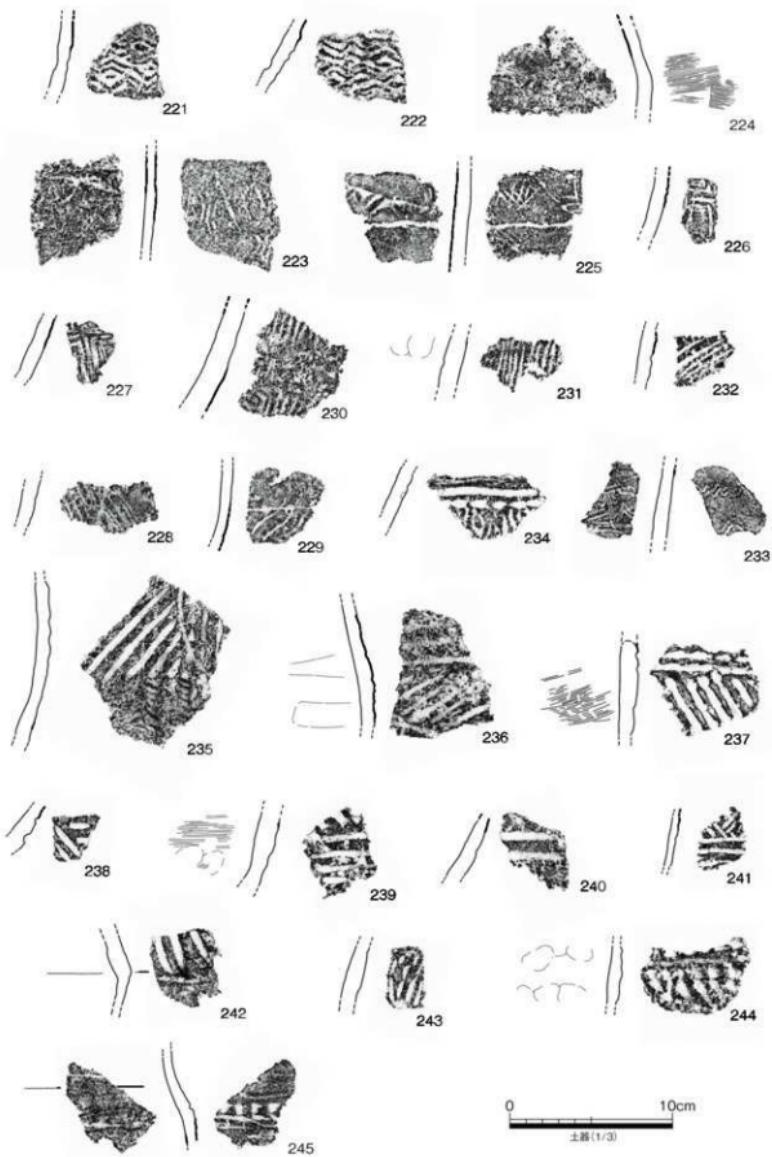
193～198は外面に沈線・条痕または平行線押型文を施す押型文系深鉢口縁部片である。いずれも斜上方に立ち上がり、外反せずに端部に至る器形である。194・195を除き、右上りの条痕もしくは同方向の平行線押型文を施す。窪み内に微細な条線が観察できるものについて条痕とし、それが



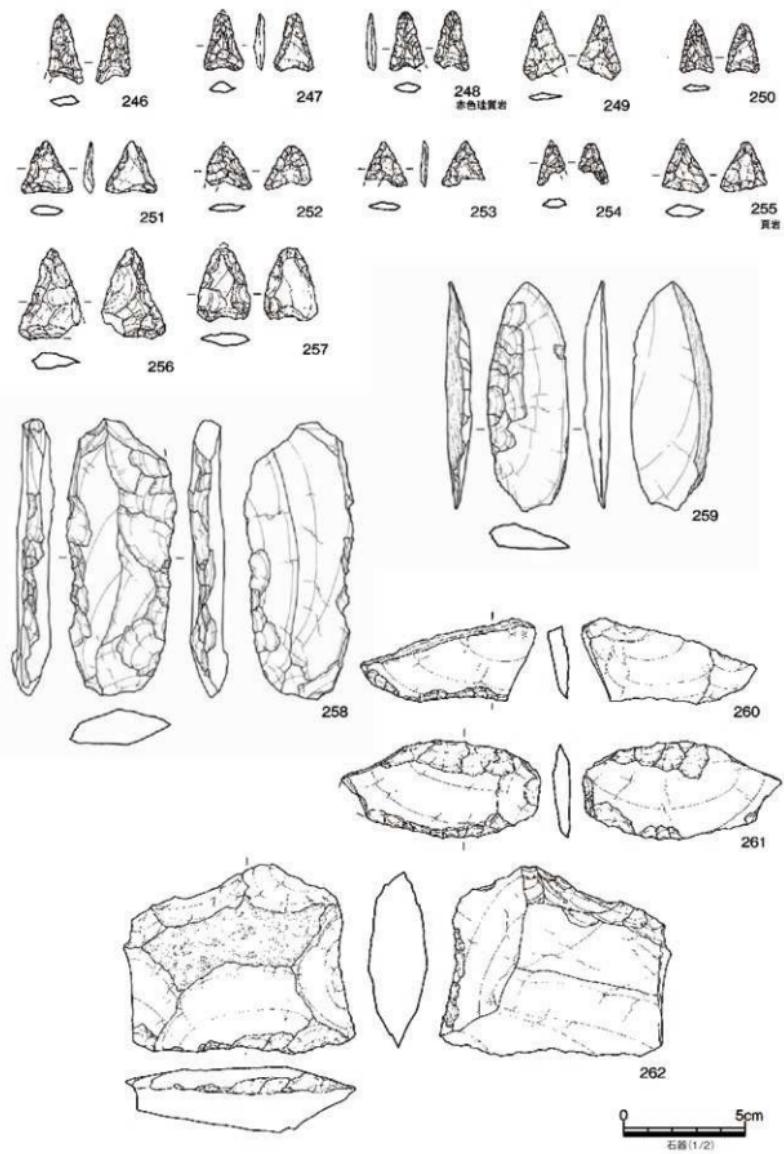
第37図 1区縄文包含層4層出土遺物 (1)



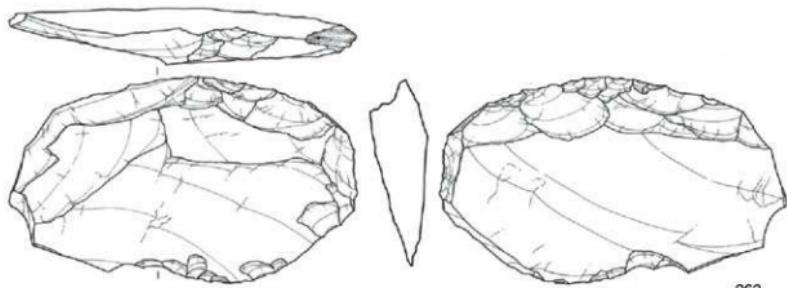
第38図 1区縄文包含層4層出土遺物 (2)



第39図 1区縄文包含層4層出土遺物(3)



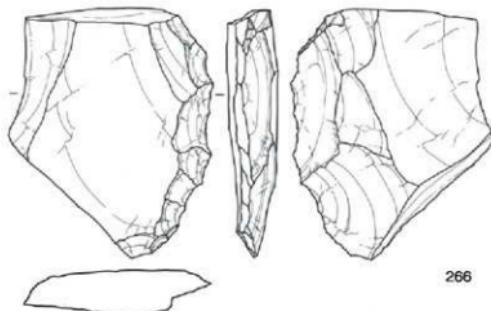
第40図 1区縄文包含層4層出土遺物(4)



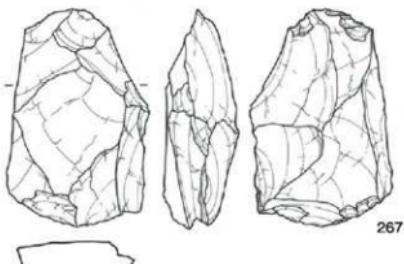
263



264

265  
破片

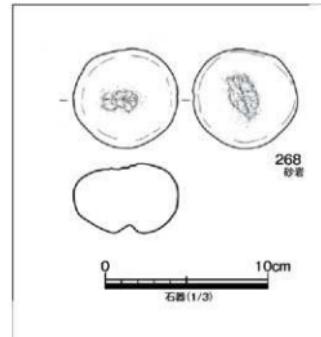
266



267



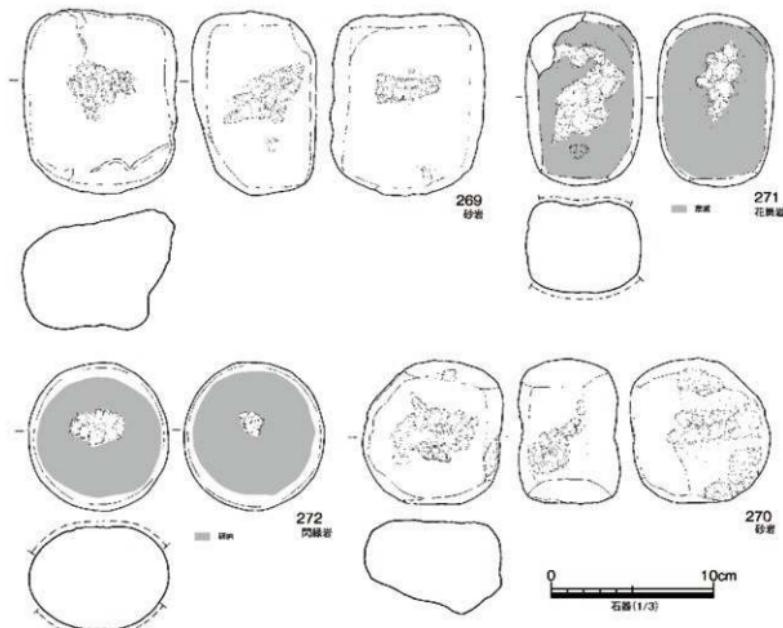
0 5cm  
石器(1/2)



268

0 10cm  
石器(1/3)

第41図 1区縄文包含層4層出土遺物(5)



第42図 1区縄文包含層4層出土遺物（6）

見えないものを押型文とした。ただ、器面風化のため明確ではない。194は条痕原体を使った波状文を施文する。195は口縁内外に間隔を置いた細沈線を斜格子状に施文する。

199・200は沈線施文の深鉢口縁部片である。200は沈線下に山形文を施文する。201は爪形押捺文を施文する深鉢口縁部片である。

202・203は楕円押型文系土器底部片である。202は尖底の深鉢。203は平底で浅鉢の可能性がある。

204～214は楕円押型文系土器深鉢胴部片のうち、外面に楕円押型文を施文するものである。204～206は内面に斜行沈線を施文し、207～214は内面ナデ調整である。楕円の単位は大粒である。

215～227は山形押型文を施文する深鉢胴部片である。215・216は縦位、217・218は横位に施文する。219～223は楕円文を組み合わせ、菱形文の文様形態となる。219・220・223は縦位、221・222は横位に施文する。224・225は施文後のナデ調整により外面の山形文が消失しかかっているものである。225は内面にも施文した痕跡が残るが、その範囲は明確でない。226・227は楕円を組み込まない菱形文と考える。

228・229は外面に撚糸文を施文する深鉢胴部片である。228は細かい単位、229は約1cm間隔で施文する。

230～233は条痕または平行線押型文を施文する胴部片である。233は2条一単位の工具で外面に波状文を施文し、内面は同工具で器面調整を行う。

234～242は外面に沈線施文をもつ胴部片である。234・235は沈線文様帶の下位に山形押型文を施文する。237は沈線工具で押引技法により施文し、刺突文と組み合う。

243・244は押捺文施文の胴部片である。243は細長い工具、244は爪による押捺である。

245は混在した繩文時代晩期の深鉢口頭部片である。屈曲部に半載竹管の押引刺突文を施し、屈曲部から下はケズリ調整を施す。口縁部は緩やかに外反する。

246～257は打製石器である。このうち248は赤色珪質岩、255は頁岩で、その他はサスカイト製である。形態的にはいずれも四基式で幅に対して長さがあるもの(246～250)と正三角形に近いもの(251～255)に大別できる。いずれも側縁は直線的で、基部の逆刺の踏ん張りは目立たない。なお256・257は製作途上の未製品である。

258はサスカイト製の大形の横長剥片を用いた尖頭器未製品とした。素材を縱に使い、打面部を大きく剥ぎ取り側縁を直線的に整形する。階段状剥離で折損した刃縁側も、直線的な整形加工を施す。主に素材剥片の腹面側を加工する。

259はサスカイト製のスクレイパーである。尖頭部を有する素材剥片の形状から、尖頭器を志向した可能性があるが、剥片の刃縁部に連続する微細剥離痕があることから、スクレイパーとした。

260～263もサスカイト製スクレイパーである。260・261は長さ10cm未満で通常サイズのスクレイパーである。一方で、262・263は石核を転用し加工量が多く、その結果直線的な刃部に整形されたものである。他器種の未製品である可能性もあり得る。

264は小形のサスカイト製楔状石核である。石核等の小形器種の整形途上品であろう。

265は硬質頁岩製の縱長剥片である。打面が同時割れにより残存しない。また末端部も折損する。

266・267はサスカイト製石核である。266は板状素材の片面を作業面とし、打面調整を施して打点を横方向にずらしながら長さ8～10cmほどの剥片を連続して剥離する。267は打面転移を繰り返しながら剥片剥離を進め、厚味のある残核に至ったものである。

268～270は叩石・磨石類である。砂岩・花崗岩・閃緑岩を用いて、砂岩以外の石材は表裏に顯著な磨り痕が残る。敲打痕はあばた状のものが多い。

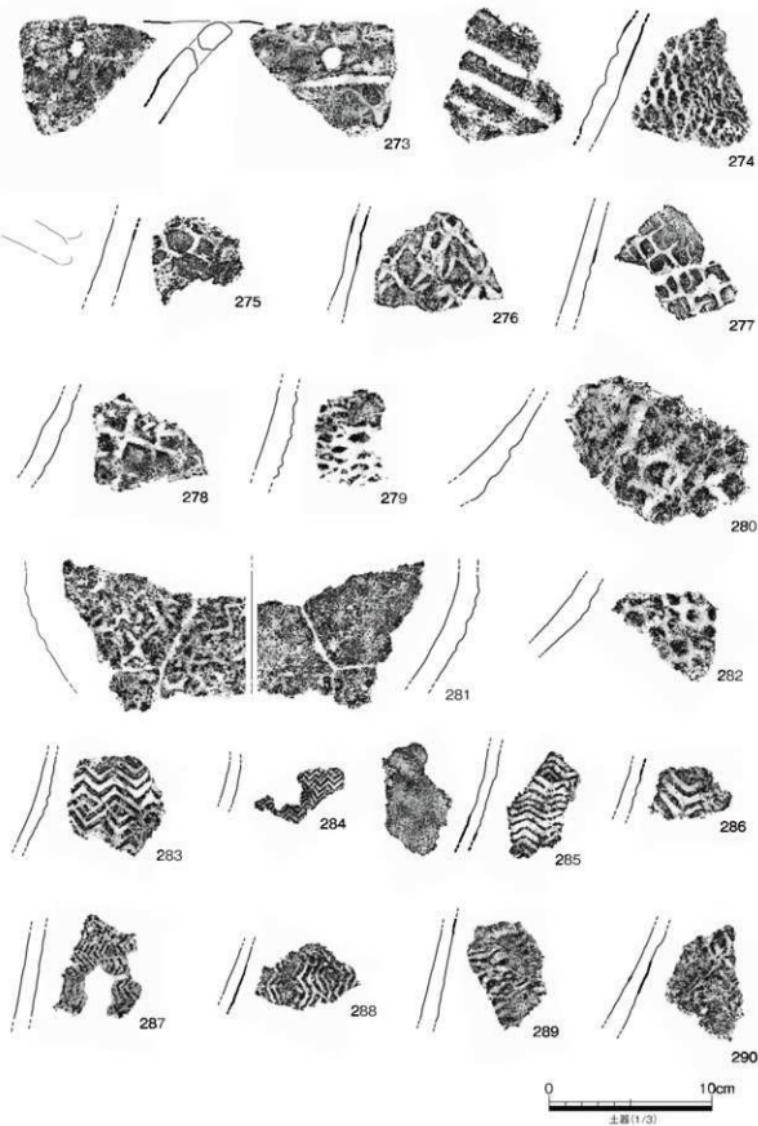
#### <1区及び2区層位不明遺物> (第43～48図)

273～282は楕円押型文系土器の楕円文施文の深鉢である。273は外反する口縁部の外面に沈線を施しその下に楕円文を施す。口縁端部と沈線との間に補修孔が穿たれる。内面はナデ調整で斜行沈線はみられない。274は楕円文を施す胴部片で、内面に斜行沈線を施す。275～282は外面に楕円文を施し、内面をナデ調整し斜行沈線を施さないものである。楕円の単位はいずれも大粒である。

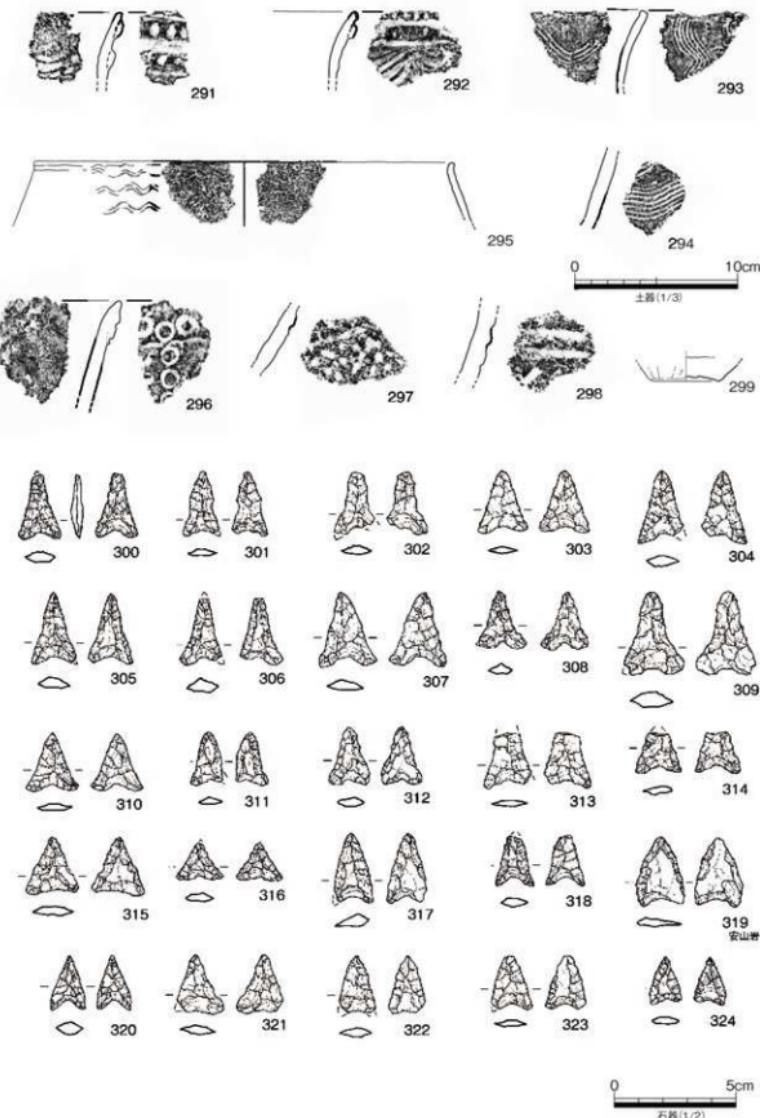
283～288は山形押型文を施文する深鉢胴部片である。289・290は山形文と楕円文が複合する押型文を施文する。285は内面斜行沈線を施す。

291・292は口縁部に刻目のある隆帯文を施し内外面のいずれかに弧状の押型文もしくは条痕文を施文する。292は隆帯1条で口唇部にも刻目を施し、口頭部から口縁部にかけて緩やかなカーブで外反する器形である。繩文時代晩期後半の突帯文系土器に類似する。

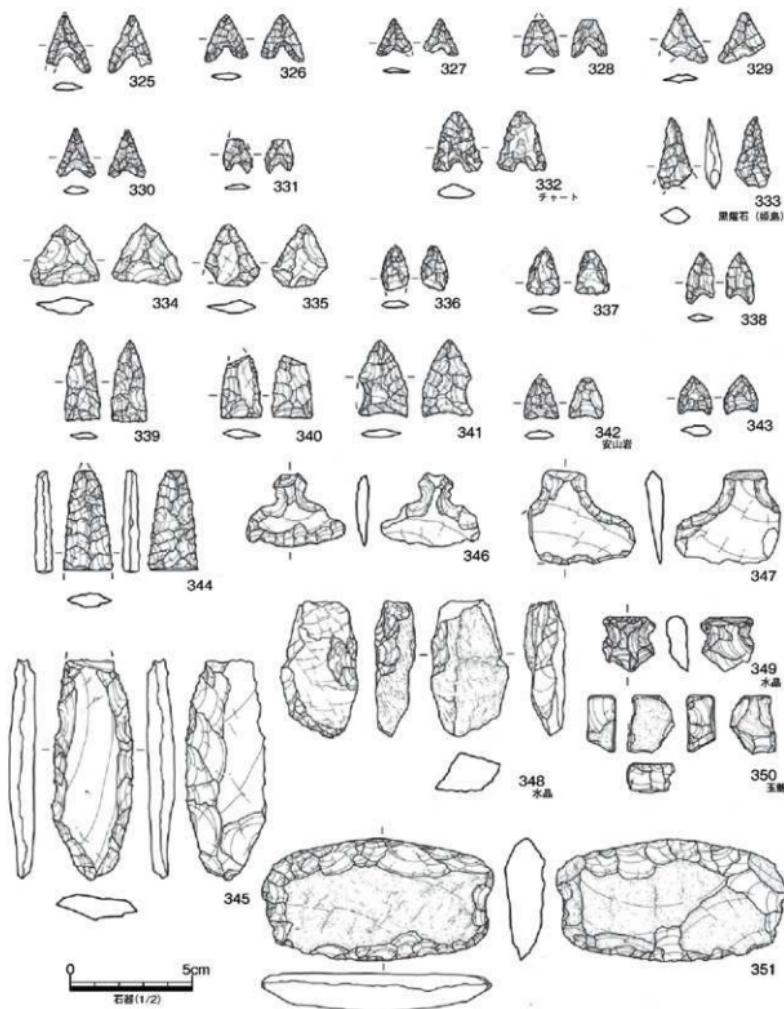
293・294は内外面に条痕波状文を施文する深鉢である。293は外面を縱位、内面を横位に施文する。



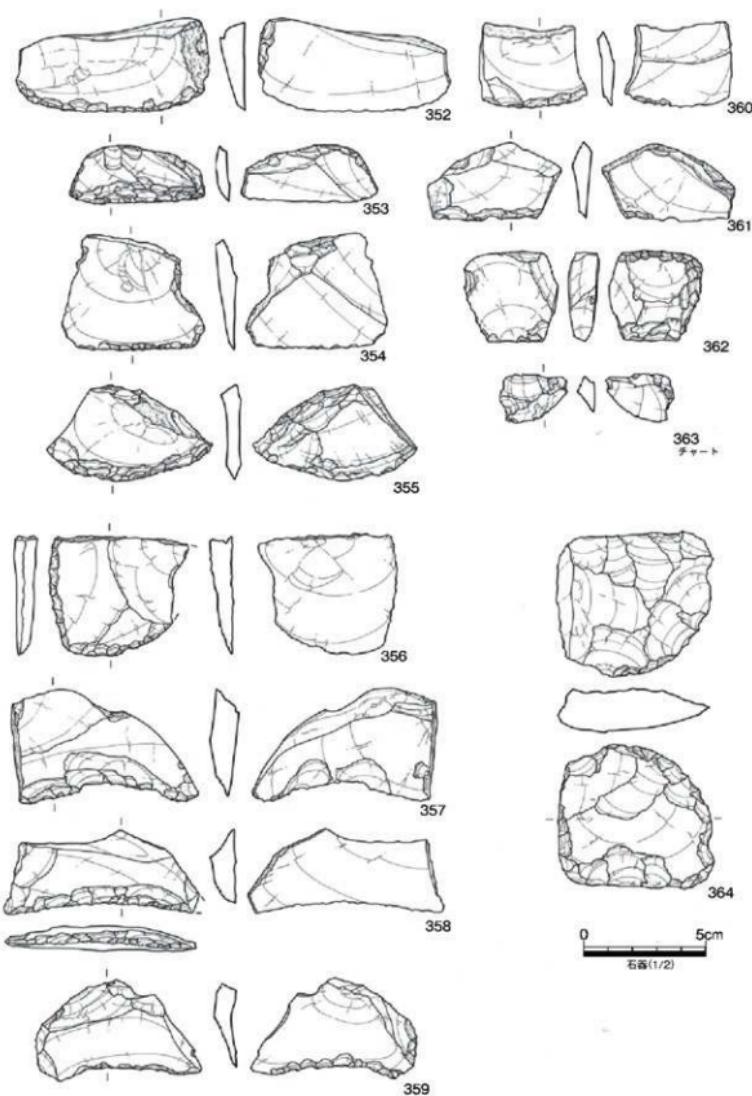
第43図 1区出土位置・層位不明遺物 (1)



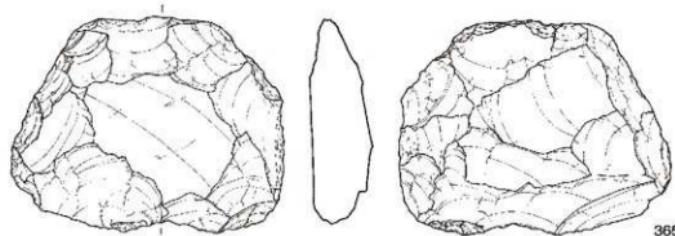
第44図 1区出土位置・層位不明遺物 (2)



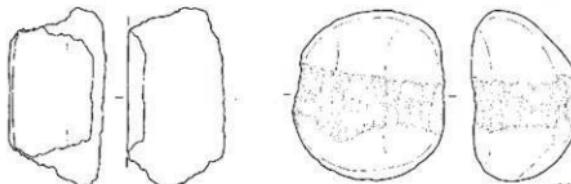
第45図 1区出土位置・層位不明遺物 (3)



第46図 1区出土位置・層位不明遺物 (4)



365



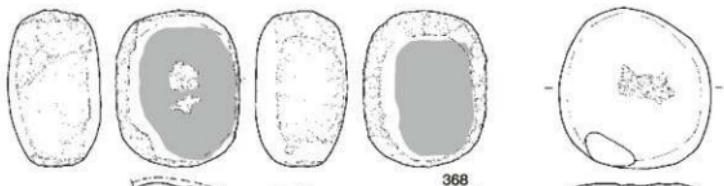
367

砂岩

366  
热液片岩



0  
石器(1/2)  
5cm



368

閃綠岩

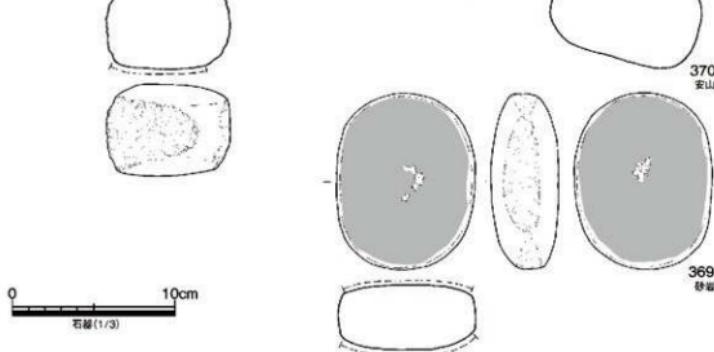
■ 空洞

368



370

安山岩

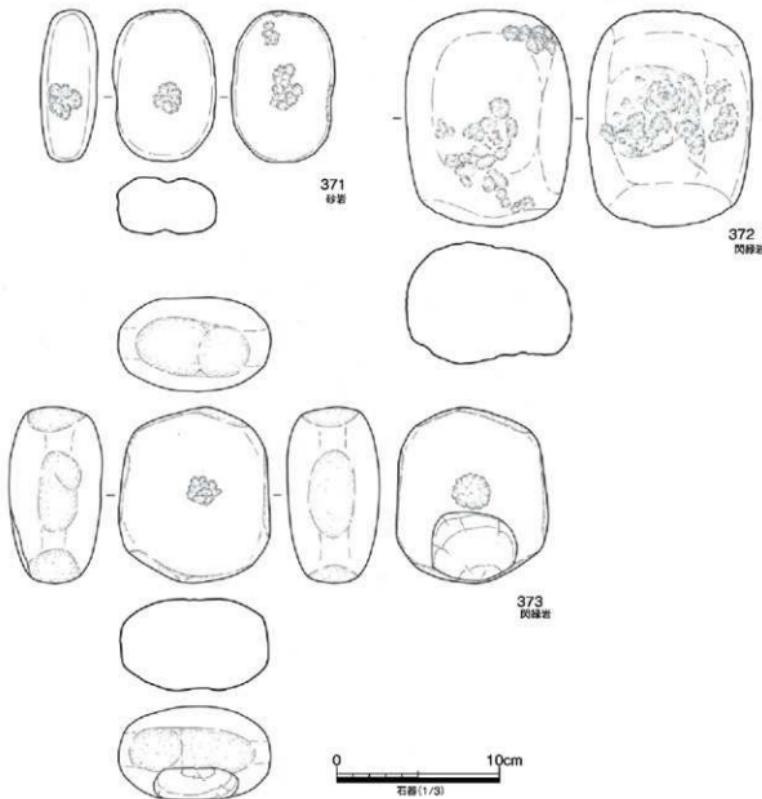


369

砂岩

0  
石器(1/3)  
10cm

第 47 図 1 区出土位置・層位不明遺物 (5)



第48図 1区出土位置・層位不明遺物(6)

器壁が薄く、器面のナデ調整も丁寧に施すことから浅鉢の可能性もある。294は胴部片で、外面に波状文を施文する。

295は口縁部が「ハ」の字に内傾する浅鉢である。口縁端部が短く屈曲し、端部は丸く收める。器壁は薄く均質な厚味に仕上げる。外面に条痕原体による条痕波状文を施文する。器形や器壁の仕上げから縄文時代晩期後半の突帯文系土器に伴う浅鉢に類似する。

296は口縁部に粘土帯を折り曲げた幅広の隆帯を施文し、隆帯上から胴部にかけて竹管刺突文を施す。297・298は棒状原体による押引刺突文を施文する。299は底面が若干の上げ底となる深鉢底部である。外面はナデ調整で仕上げる。

300～343は打製石錐である。319・332・342がチャート製、333が姫島産黒耀石製で、その他はす

べてサヌカイト製である。300～314は側縁が基部付近で屈曲して下に広がる形態、315～331は側縁が直線的に聞く形態である。基部形状は凹基式が多く、平基式は315・316のみである。325・326は逆刺部が細長く伸びる。チャート製の332は黒灰色を呈し先端が幅広く、側縁は先端部付近で屈曲して基部に向かう形態である。逆刺は短く、幅を減じることなく下端に向かい、端部は丸く仕上げる。333は側縁が基部付近で屈曲して下に広がる。逆刺は折損するが強く踏ん張る形態と推定する。334～338は形状が歪な未製品である。339～343は側縁が内脣気味で基部付近で垂直となる形態で、いずれも平基式である。340は器面の風化が進行していない。

344・345はサヌカイト製の尖頭器である。344は下半が折損するが、表裏面に連続する横状剥離が残る。345は未製品とした。大形の横長剥片を縱に使い、側縁に加工量の多い調整加工を施す。

346・347はサヌカイト製の横形石匙である。いずれも刃部は片面のみを加工する。

348～350はサヌカイト以外の石材搬入品である。348は粗い水晶塊の一部を加工するものである。349は水晶の小形の剥片を加工し、左右に浅い抉り、下端に尖端加工を施し、上端の基部には刃潰し加工を施す。350は玉髄の角礫各面に剥離痕を施す。

351はサヌカイト製の打製石庖丁である。弥生時代の混在であろう。

352～362はサヌカイト製のスクレイパーである。片面のみ加工する片刃が多い。363はチャート製の剥片である。364・365はサヌカイトの塊状の石核である。打面転移を頻繁に繰り返して小形の剥片を剥離する。

366は結晶片岩製の石棒である。縄文時代後晩期の遺物と考える。367は砂岩製の石錘である。楕円礫を横に使い、敲打による抉りを施す。

368～373は叩石・磨石系石器である。扁平な円形礫を用いて表裏の腹面と周縁部を敲打に使う。敲打痕はあばた状となり、線状の敲打痕は目立たない。なお368・369は表裏面に顯著な研磨痕が残る。

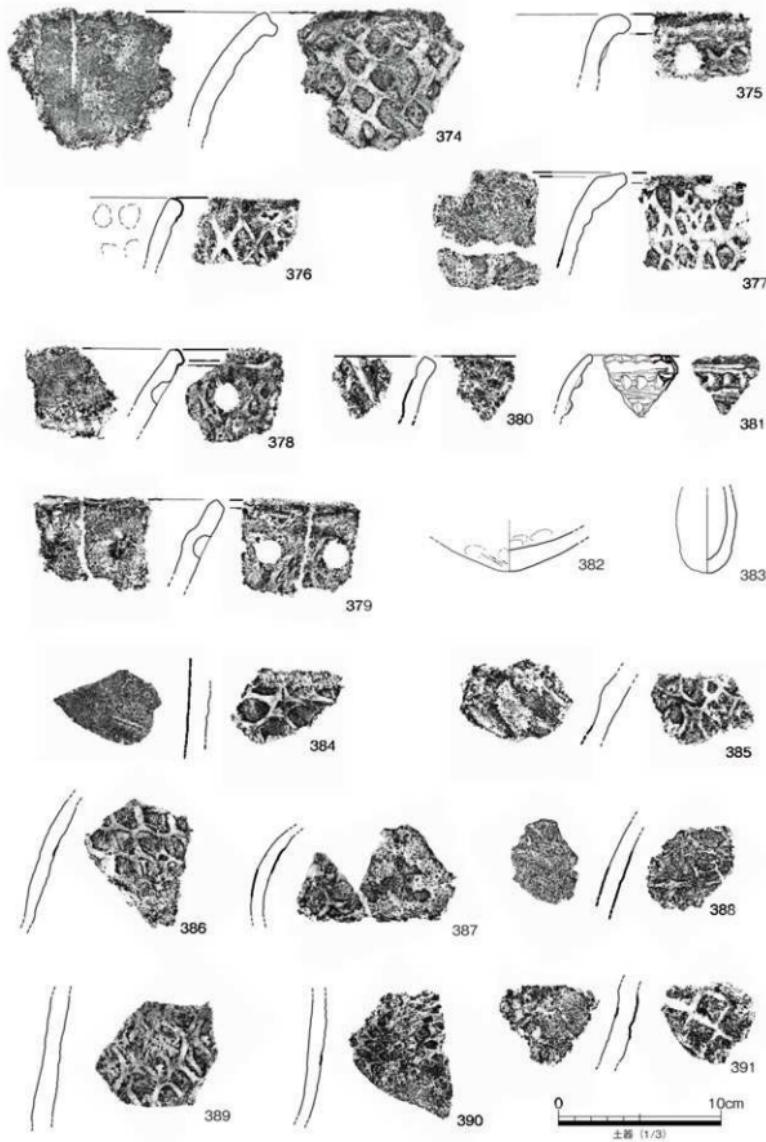
#### (4) 4・5区縄文包含層の調査

前節で記したように、両区にまたがって縄文期の低地帯が南から北に流下する。その範囲を東西50m、南北13mの範囲を階段状に掘り下げ、層位別（上層と下層の2区分）に出土遺物を回収した。この掘削は中世遺構面から範囲設定し掘り下げはじめており、後述する古代の河川跡としたSR401もこれにより埋土を掘削し、後にSR401の流路形態を断面で確認したという経緯である。SR401は後述するようく流路中央部がクレバス状に下刻しており、そこに含まれた古代の遺物は縄文包含層に相当混在している。しかし、その下位に存在する縄文包含層は取り上げの際の層位区分と断面で確認できる層位区分が概ね一致しており、第14図の断面図に示した層位区分が実態を反映しているので、古代以後の混在遺物を抽出することでSR401に伴う遺物を除外できる。ただ、4区側の縄文包含層断面は5区側より低位まで流路堆積状の断面形状が認められ、5区の包含層を切り込むようなラインも散見できることから、5区の上下層と4区下層との層位的な新古は判別できない。

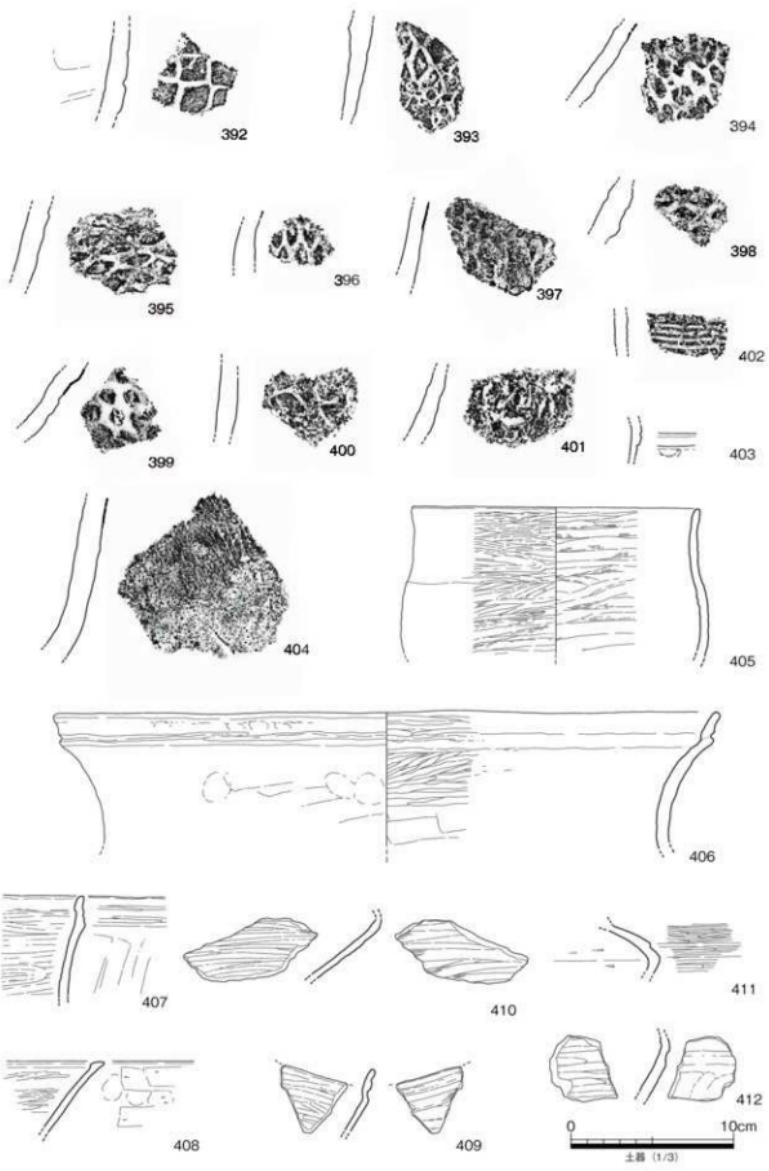
以下、4区下層、5区下層、5区上層、4・5区層位不明の順で出土遺物を報告する。

#### <4区縄文包含層下層出土遺物> (第49～54図)

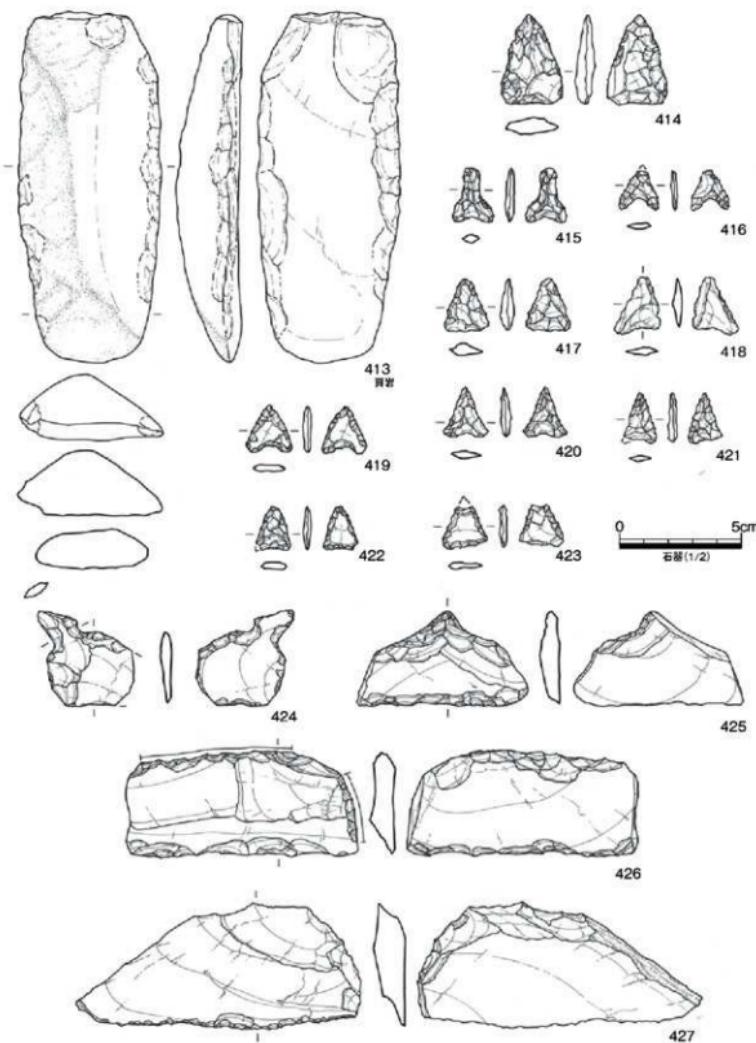
374～379は押型文系土器で外面に楕円押型文を施す深鉢口縁部片である。374・375・377は外反する口縁端部が肥厚するもので、374と377は内面斜行沈線から続くであろう沈線状の溝みを端面に



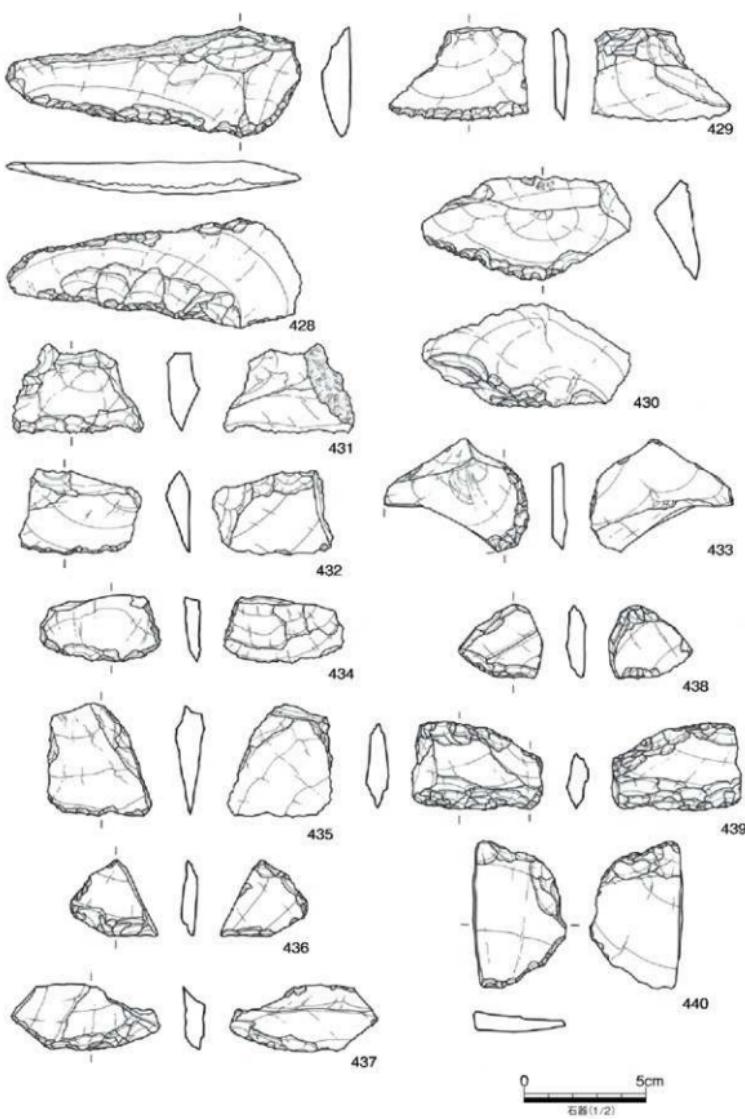
第49図 4区縄文包含層下層出土遺物 (1)



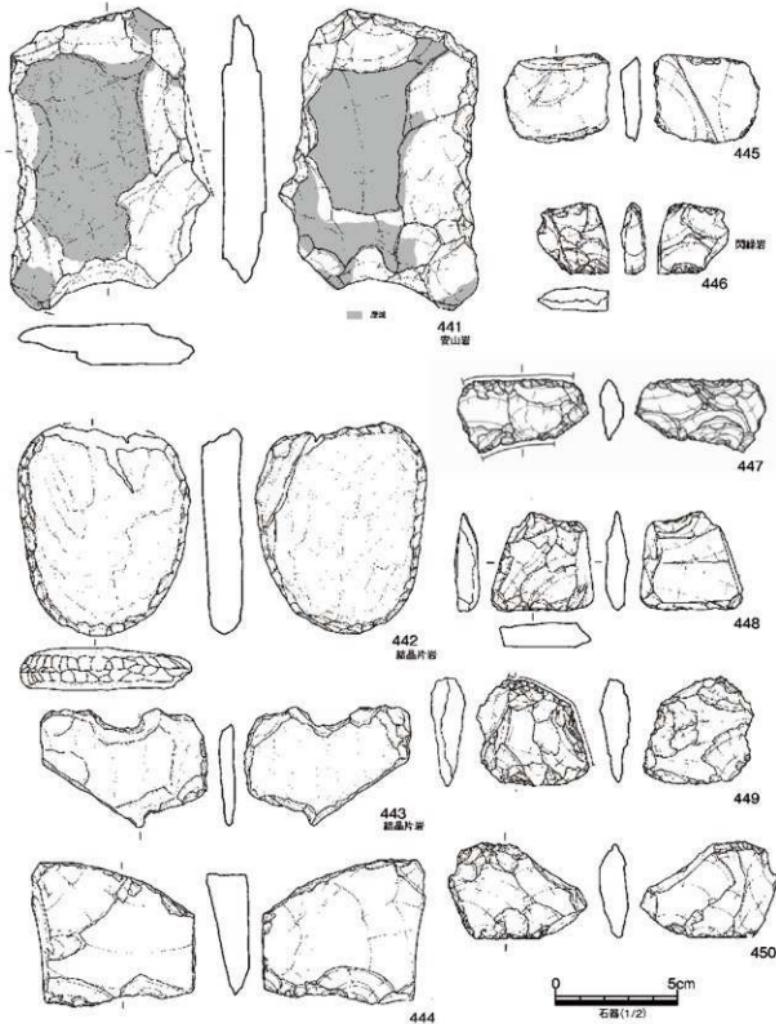
第50図 4区縄文包含層下層出土遺物 (2)



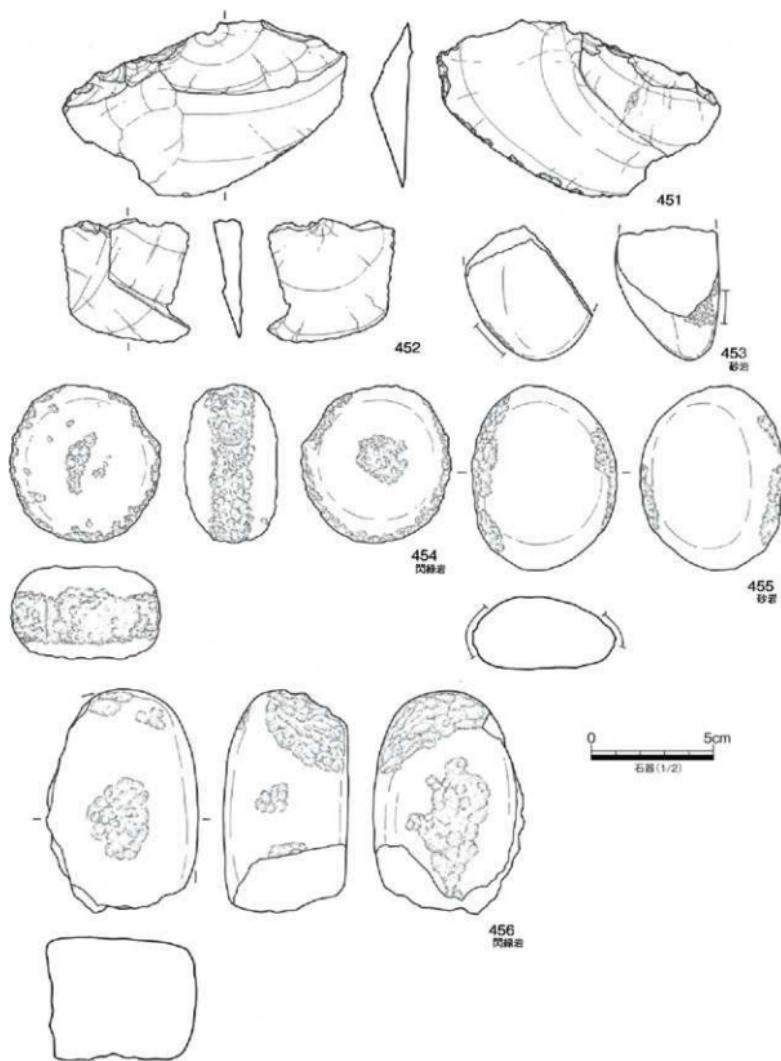
第 51 図 4 区縄文包含層下層出土遺物 (3)



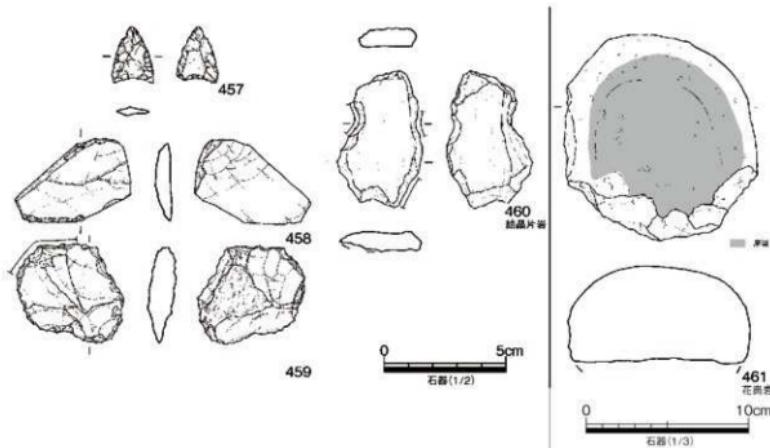
第52図 4区縄文包含層下層出土遺物 (4)



第 53 図 4 区縄文包含層下層出土遺物 (5)



第 54 図 4 区縄文包含層下層出土遺物 (6)



第 55 図 4 区縄文包含層上層出土遺物

留める。378・379は外面に原体による円形刺突文を施文する。

380は外面無文で内面に斜行沈線を施文する深鉢口縁部片である。381は口縁下に2条の刻目隆帯文を貼付し、さらに口唇部に刻目を施す深鉢口縁部片である。縄文時代晩期後半の突帯文系土器に類似するが、晩期では口縁部に突帯を2条施文することはないことから、早期末ごろの穂谷式に伴う隆帯とみておく。

382は尖底の深鉢底部片である。胴部へ緩やかに立ち上がり、寸胴な胴部に接続するものと考えられる。383はミニチュアの深鉢である。内外面ナデ調整で押型文の施文はみられない。

384～400は外面に楕円押型文を施文する深鉢胴部片である。楕円は大粒の単位で、391・392のように斜格子状のものも含まれる。

401は沈線・条痕文を施文する深鉢胴部片である。402は横方向の二枚貝条痕を施文し、403は2条の沈線の下位に円弧状の沈線を施文する。404は斜格子状に施文された撫糸文土器胴部片である。

405～412は縄文時代晩期前半の黒色磨研系土器である。405は内外面を巻貝条痕調整で仕上げる深鉢である。406は口縁部に段をもつ深鉢である。一旦外反口縁を仕上げ、さらに上方に粘土を積み増して段を介して外反する口縁を成形する。外面は撫で仕上げで、内面には丁寧な研磨痕が残る。407も同様に口縁部に段をもつ深鉢である。408～412は浅鉢で、408は外反する口縁端部内面が玉縁状に肥厚する。外面はナデ調整で、内面には研磨痕が残る。409は段を有する波状口縁の浅鉢である。段部外面には2条の凹線を施文する。凹線と内面のミガキ調整は巻貝を使う。410～412は胴部が強く屈曲する浅鉢で、胴部最大径付近に段や沈線を施文する。

413は頁岩製の局部磨製石斧である。自然面もしくは古い剥離面を背面に取り込んで綫長剥片を剥ぎ取り、左右の側縁に粗加工を施し、下端の刃部を研磨する。断面は蒲鉾状で、やや内擣する側面観をもつ。414～423はサスカイト製の打製石錐である。414は長さ3.7cmで大形だが、それ以外は長さ2cmに満たない小形品である。418は未製品。424・425はサスカイト製の石匙である。剥片を素材として、いず

れも片刃に仕上げる。

426～440はサヌカイト製スクレイパーである。427～433は剥片片面を加工して片刃を成形するもので、長さ15cm前後のものと5cm前後のものに分かれる。

441は安山岩製の打製石斧である。刃部付近に強い研磨痕が残る。442・443は結晶片岩を素材とする叩石（敲打具）である。442は外縁に連続する敲打痕を残す。443は敲打により上端に抉りが入る。

444・445は二次加工ある剥片である。444は大形剥片の折損片、445は平坦打面の剥片である。446～450は楔状の石核、451は打面調整を施す石核である。452は調整打面を打撃して剥離された剥片である。453～456は砂岩・閃緑岩製の叩石・磨石類である。いずれも円螺周縁及び腹面に顯著な敲打痕が残る。

#### <4区縄文包含層上層出土遺物>（第55図）

少量の土器片、石器類が出土している。土器片は小片が多くここでは報告していない。石器を報告する。

457は凹基式のサヌカイト製石鎌である。風化状況から縄文時代晚期に所属するものと思われる。458はサヌカイト製スクレイパーである。側面に自然面を残し、対する側縁は折損する。三角形状の剥片の下縁部を直線的に片側から調整加工を施す。459はサヌカイト製の楔状石核である。周縁が敲打により潰れ、表裏に両極打撃により階段状に剥片が剥離した痕跡がある。風化状況から縄文時代晚期に所属するものと思われる。460は結晶片岩製の叩石である。長さ6cm以上、厚さ0.8cmの薄い棒状石片の左右両端に敲打痕が残る。461は花崗岩製の石皿である。上面の磨滅が顯著に残る。

#### <5区縄文包含層下層出土遺物>（第56～68図）

462～500は深鉢口縁部片である。

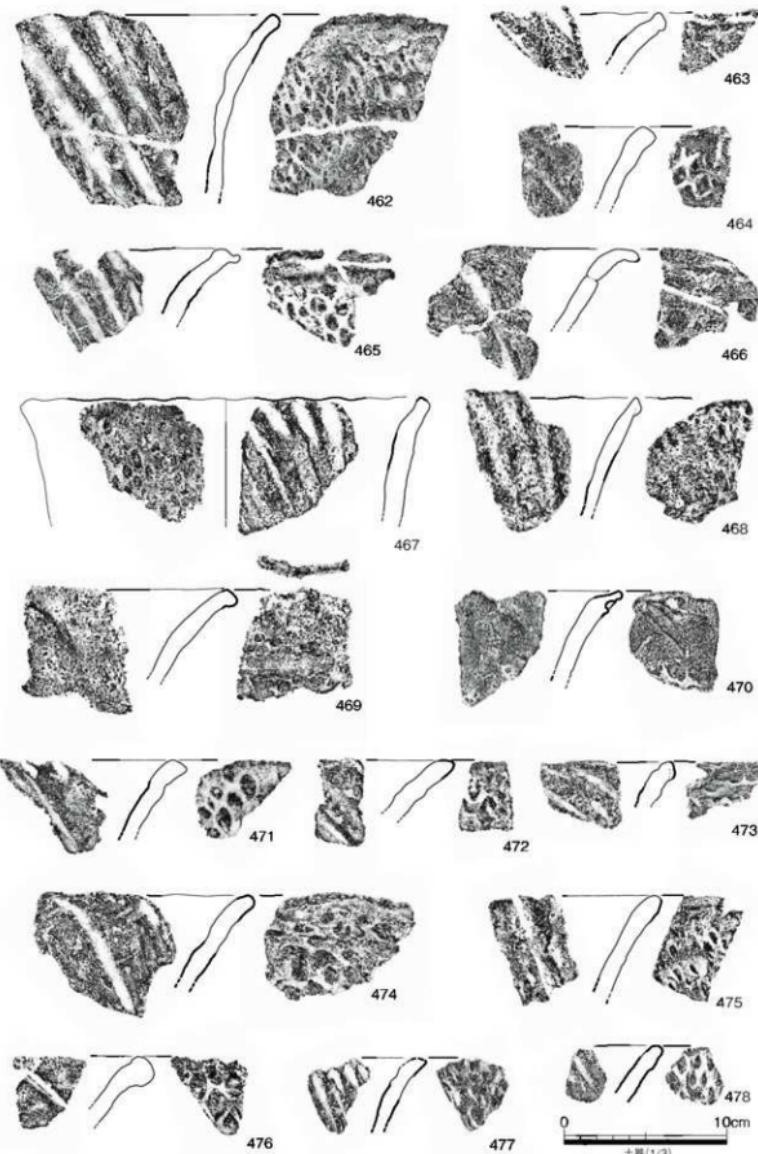
そのうち462～478は外面に押型文を施し、斜め上方に外反する口縁部内面に斜行沈線を施すものである。462～473は斜行沈線をナデ状に大きく器壁を窪ませて施文するが、474～478は棒状工具を用いて刻線状に施文する。なお、477は内面の沈線を細かいピッチで施文しており黄島式に類似するが、その他は高山寺式に該当する。押型文はすべて楕円文で、原体の単位は大形のものが多いが、475・477のみ小形の単位である。

479～492は外面に押型文を施し、内面に斜行沈線を施文しないものである。押型文はすべて楕円文で、楕円の単位は小形（486）、中型（479・489～491）が含まれるがその他はすべて大形である。483・485・486・492は口縁部下外面に貫通しない円形刺突文を巡らせる。484は補修孔を有す。

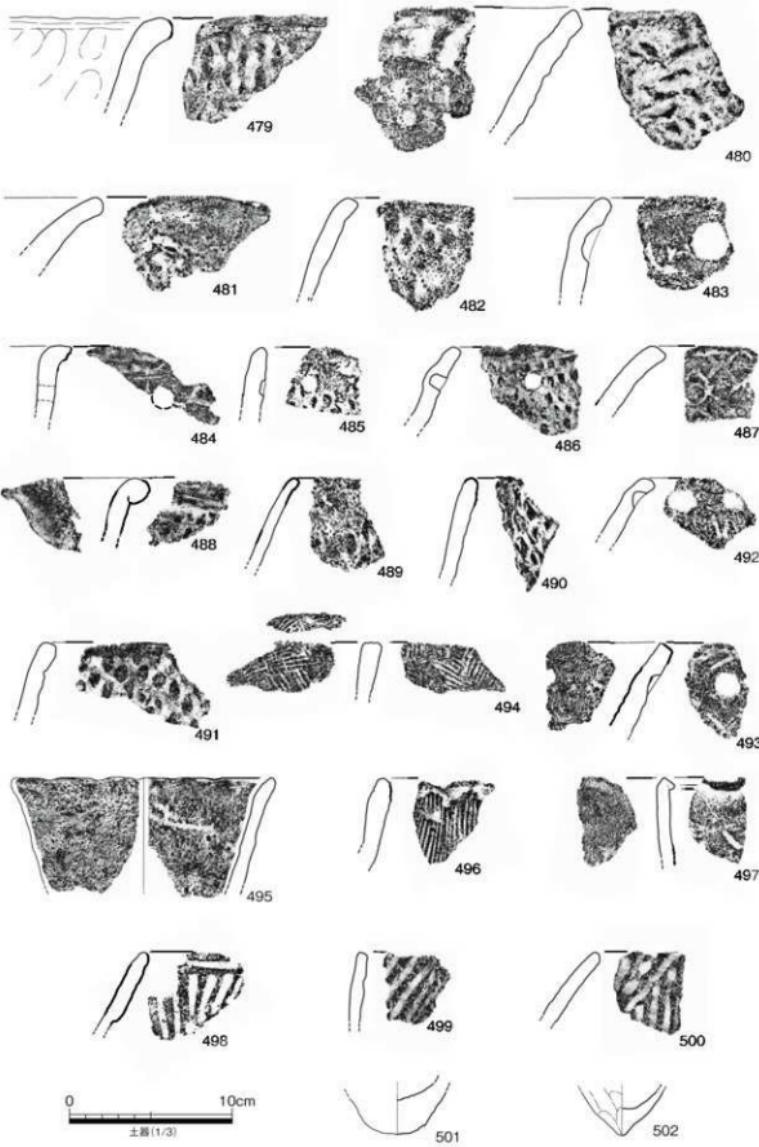
493・494は山形押型文を施文する。493は口縁部下に円形刺突文を施す。494は内面及び口縁部端面にも山形押型文を施文する。495は内面に斜行沈線を施すが外面調整は磨滅のため不明である。496は外面に5条1単位で縱位に条痕文を施す。497は外面は無文で口縁端部に突帯状の隆帯を貼付し、内面には斜行沈線を施す。498は口縁部外面が肥厚し幅4.5cmの文様帶を認める。ここに太い沈線文及び刺突文を施す点で、九州地方の平柄式（八木2008）に類似する。499・500は口縁部肥厚は認められないが、沈線文を施文することから498と同様の型式であろう。

501・502は尖底の深鉢底部である。501は底部下端は丸味をおび、502は下端が短く突出する形態である。

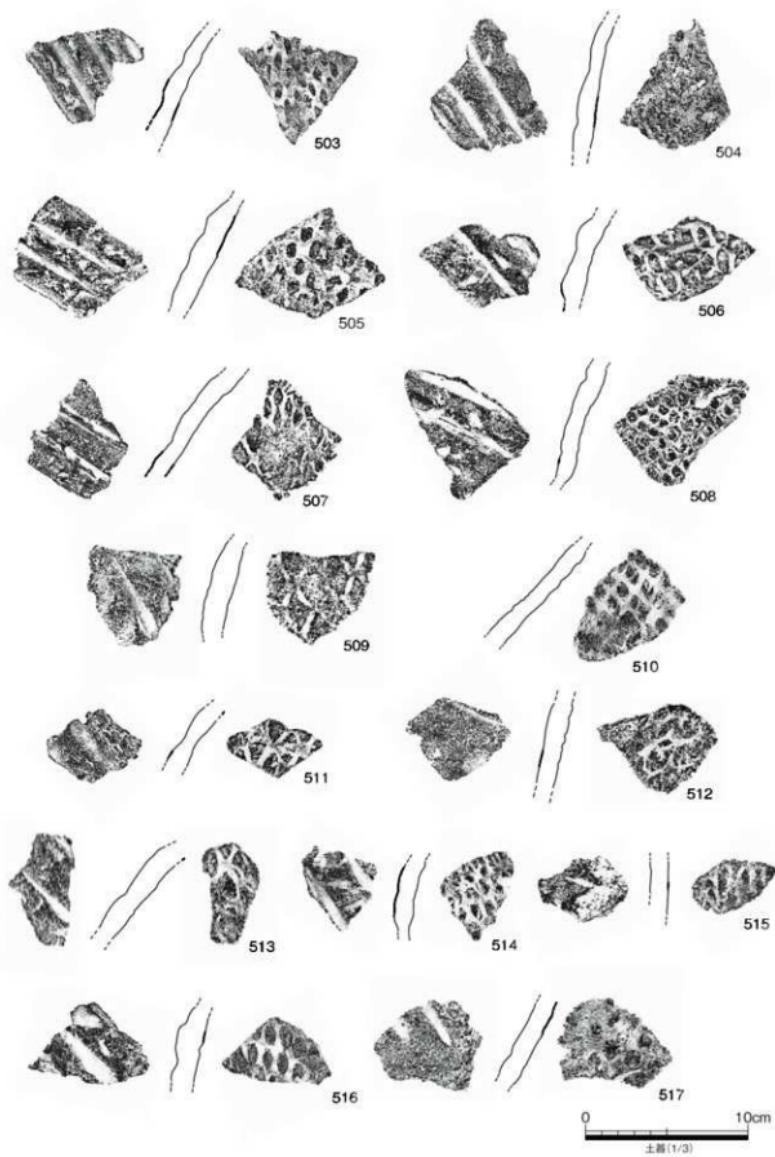
503～538・568は外面に楕円押型文を、内面に斜行沈線を施す深鉢の胴部上半片である。内面沈線は、



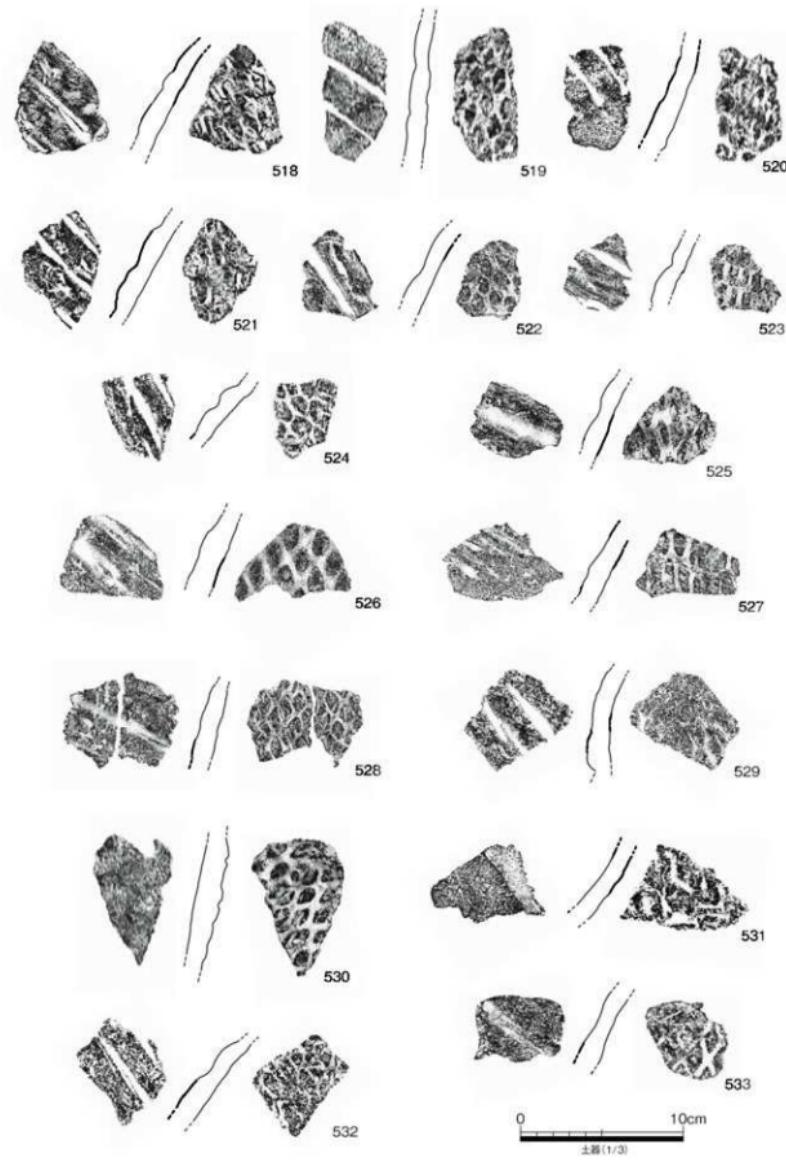
第 56 図 5 区縹文包含層下層出土遺物 (1)



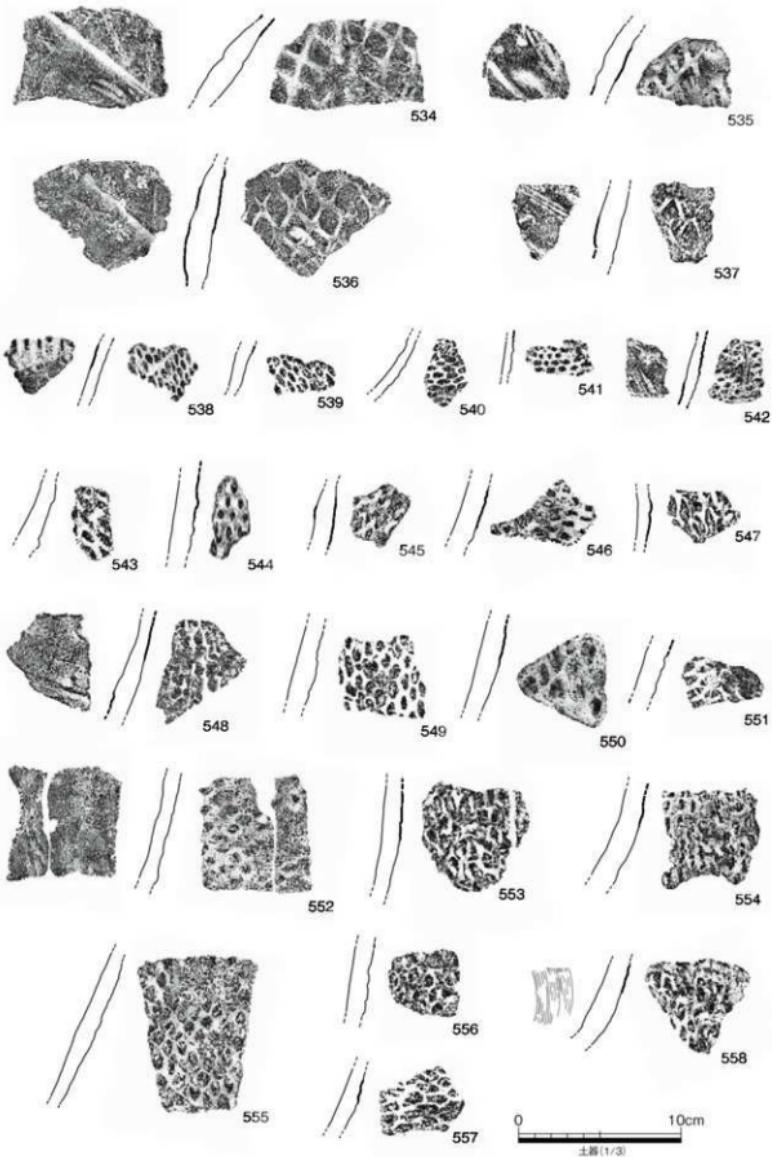
第 57 図 5 区縄文包含層下層出土遺物 (2)



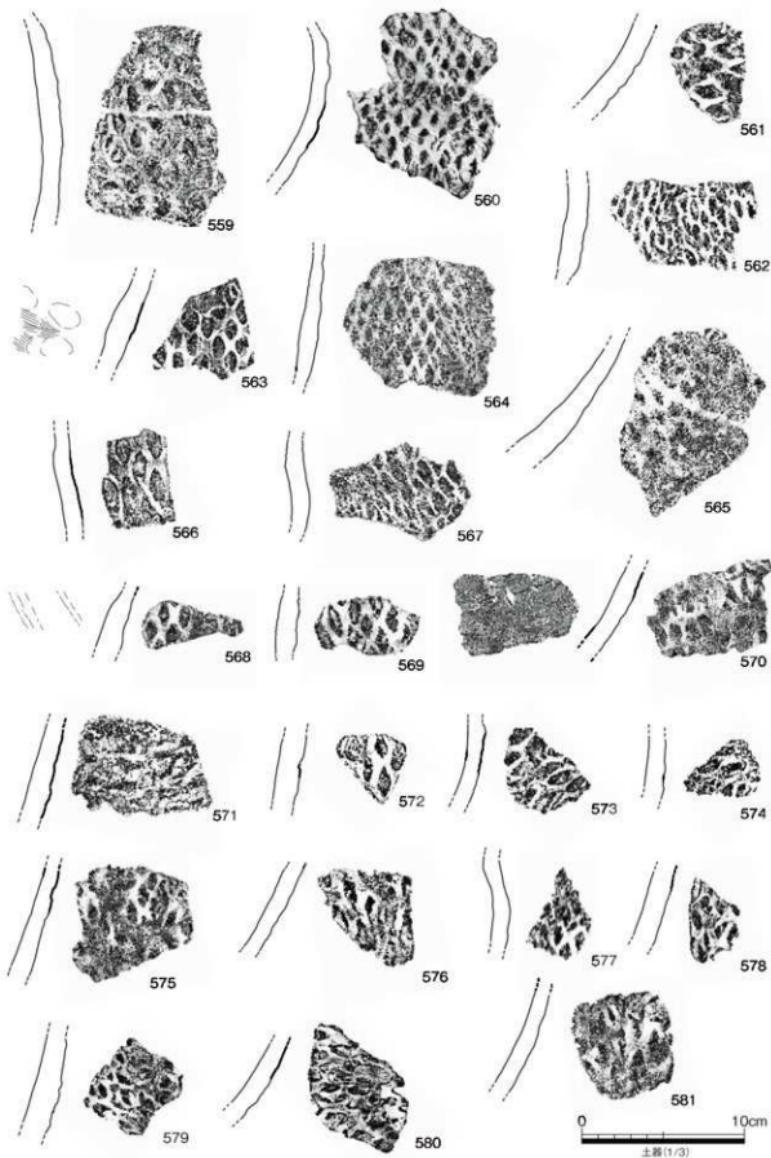
第58図 5区縄文包含層下層出土遺物 (3)



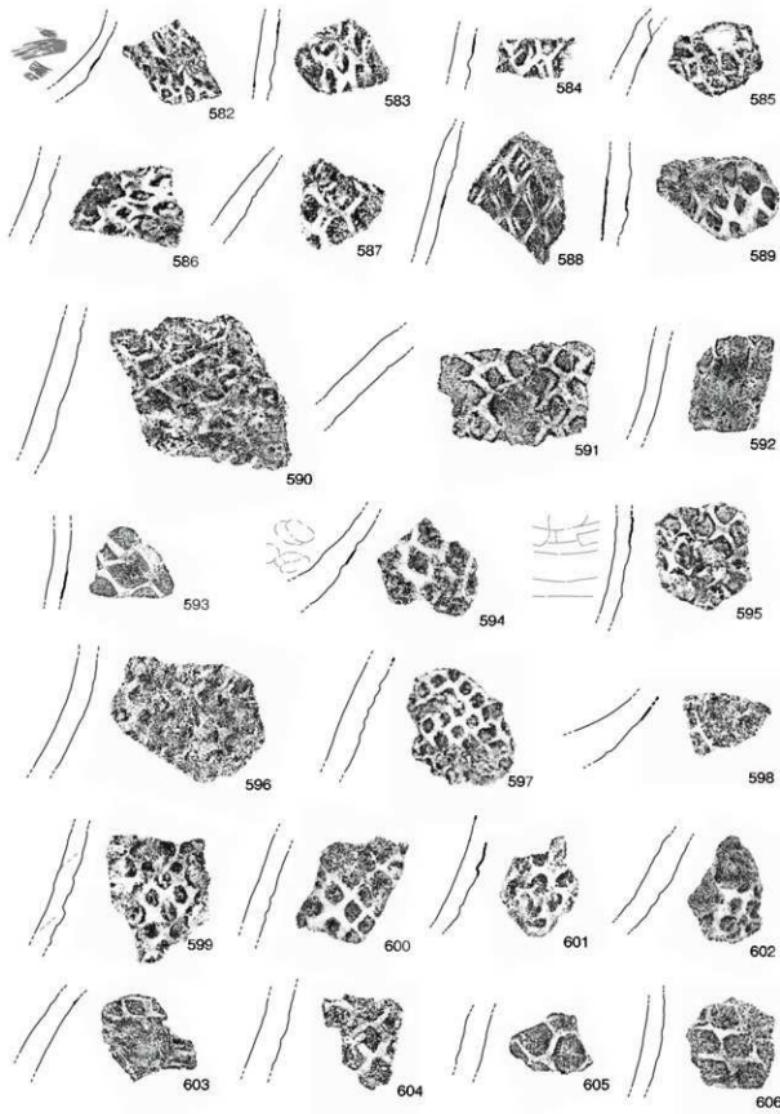
第59図 5区縄文包含層下層出土遺物(4)



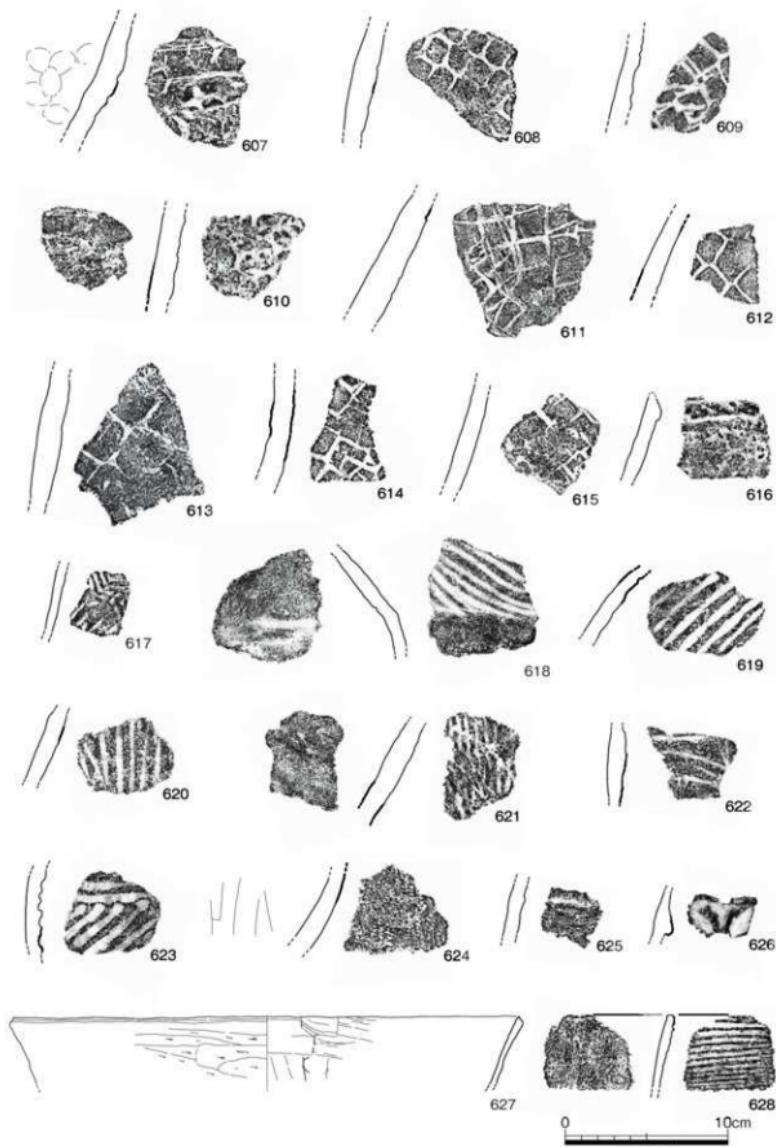
第60図 5区縄文包含層下層出土遺物 (5)



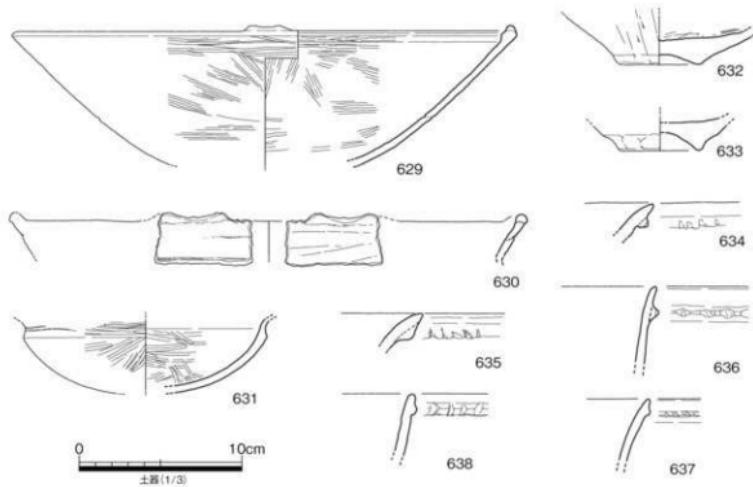
第61図 5区縄文包含層下層出土遺物 (6)



第62図 5区縄文包含層下層出土遺物 (7)



第63図 5区縄文包含層下層出土遺物 (8)



第64図 5区縄文包含層下層出土遺物(9)

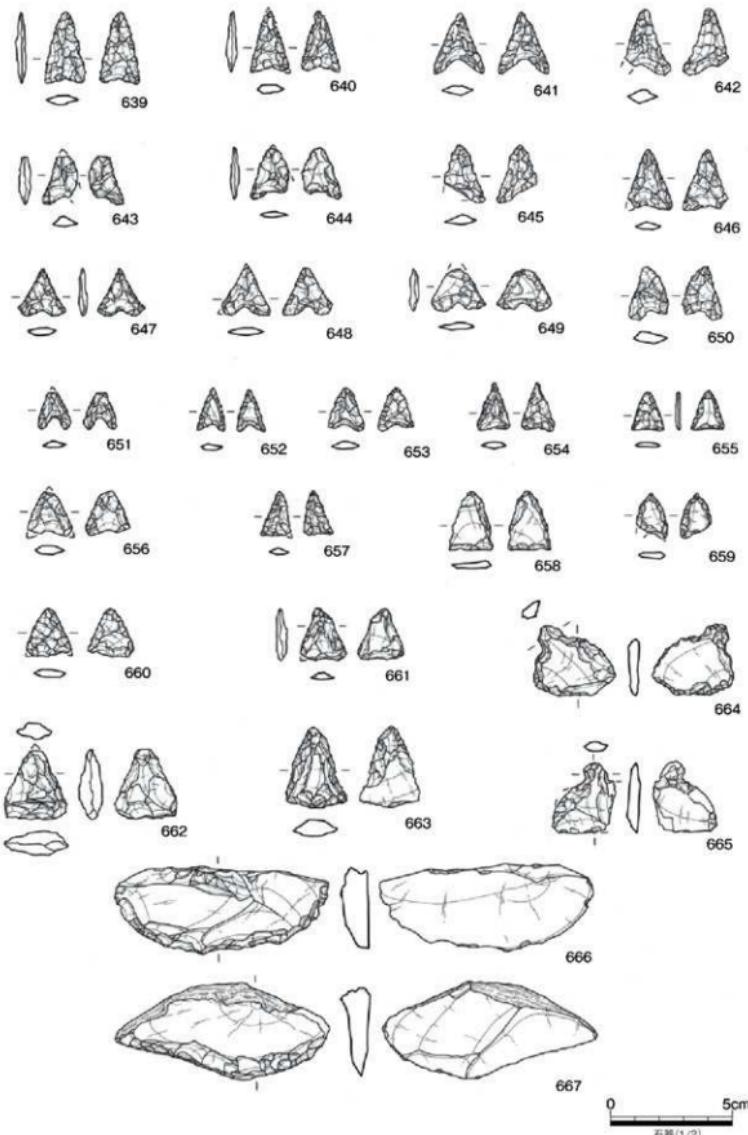
多くが幅広いナデ状の沈線で、534～538は刻線状に、538は縦位で密に施される。外面の楕円文は大形のものが多く、高山寺式の特徴をもつが、538は単位が極端に小さく内面の縦位沈線とも合わせて黄島式の特徴を認める。

539～561(568を除く)は外面に楕円押型文を施す深鉢胴部片で、内面に沈線文を施さない一群である。楕円文は大形のものが多いが539～549は538と同様の小形である。その他は楕円の上下端が鋭角のものや、幅が広く斜格子風のものなど多様である。

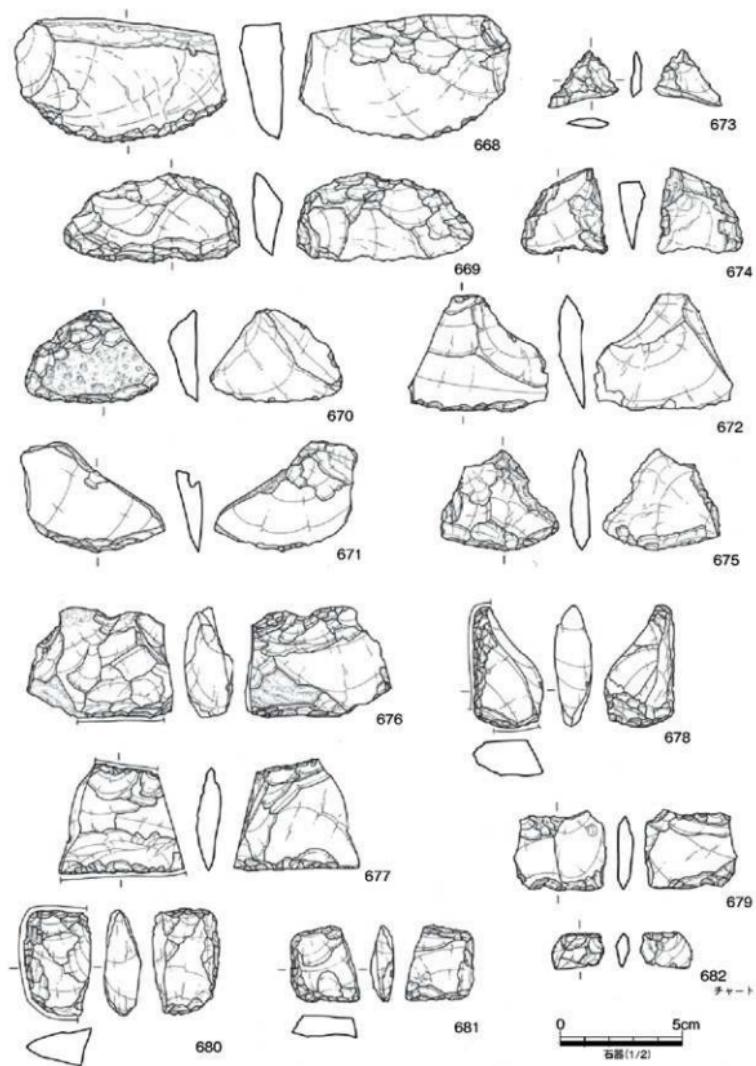
616は口縁部に刻目を施した隆帯を貼付する。617は山形押型文と沈線文を組み合わせて施す。618は胴部が屈曲する器形で屈曲部から上に斜行する沈線を施す。619～623は外面に沈線文を施すものである。このうち621は外面に細い単位の沈線(または条痕)を施し、内面に幅広い斜行沈線もしくは斜め方向のナデを施すものである。624は外面に撲糸文を施す。625は外面に細い粘土隆帯を貼付する。626は下向きの三角形突起を貼付し、細沈線を施す。

627～637は縄文時代晩期の土器である。627・628は外面を二枚貝条痕または削りで調整する深鉢。629・630は口縁部にリボン状突起を貼付するボール状の黒色磨研系浅鉢である。631は胴部で屈曲するタイプの浅鉢で屈曲部直上に浅い沈線を施す。632・633は上げ底の深鉢底部である。以上の627～633は晩期前半に属す。634～637は口縁部に刻目突帯文を貼付する深鉢である。晩期後半に属す。

639～663は石鏸である。すべてサヌカイト製の凹基式で、逆刺の突出が短いもの(639・640・654～663)のタイプと、強く突出するもの(641～653)がある。いずれも不整形の未製品が多い。664・665はサヌカイト製の横形石匙である。柄部の抉りは明瞭だが、刃部の調整加工は不十分である。これらも未製品であろう。666～672はサヌカイト製のスクレイパーである。666～668は幅広の横長剥片



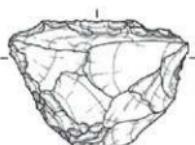
第65図 5区縄文包含層下層出土遺物 (10)



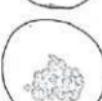
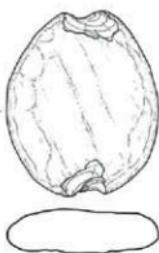
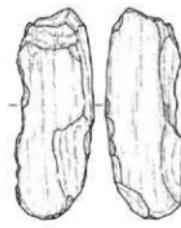
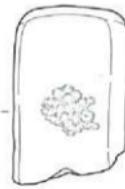
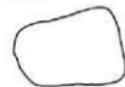
第66図 5区縄文包含層下層出土遺物 (11)



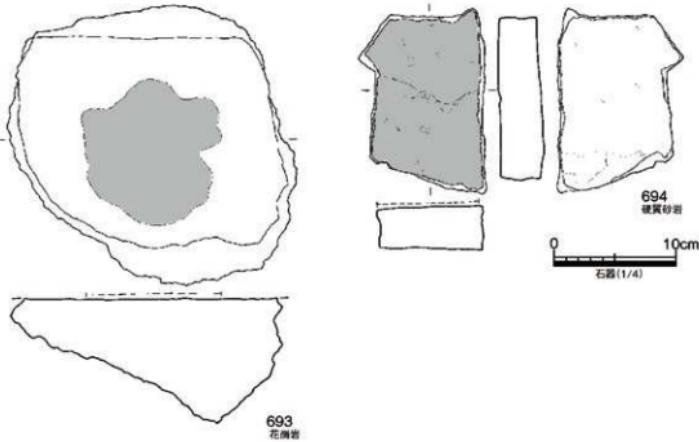
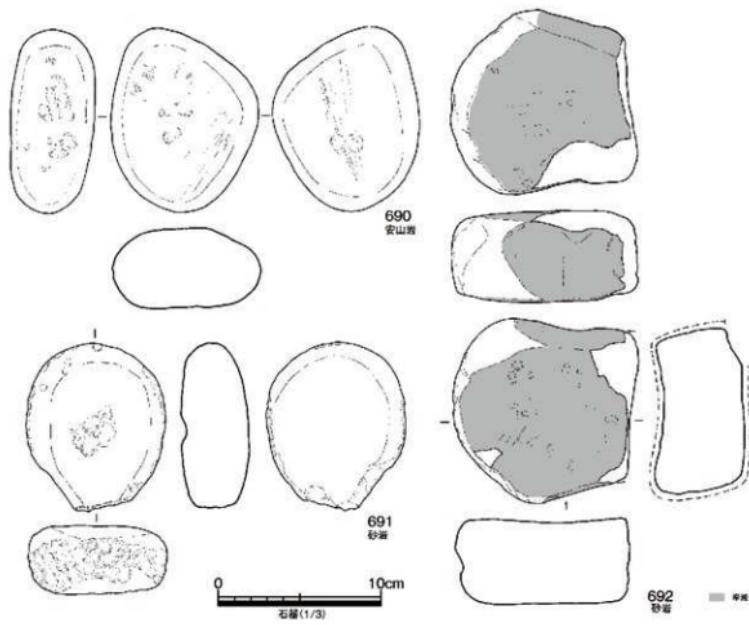
683

686  
結晶片岩

684

687  
砂岩685  
結晶片岩石器(1/2)  
0 5cm689  
結晶片岩688  
砂岩

第 67 図 5 区縄文包含層下層出土遺物 (12)



第68図 5区縄文包含層下層出土遺物 (13)

を素材とし、曲線的な下縁を片刃調整、背部を敲打するものである。669は表裏素材面に複数剥離面を残すことから、石核を転用したものである。670～672は素材剥片の剥離時に折損した剥片を用いて刃部加工を施すものである。いずれも片刃調整である。673～675は小形の剥片周縁に不規則に調整加工を施すか微細剥離をもつ。そのうち673は石鏃未製品の可能性がある尖頭部片で、風化状況から縄文時代晩期に属する。676～681はサスカイト製の楔状石核である。上下縁を敲打し、側縁が垂直に折損するものが多い。両極打撃により剥片剥離作業を行った後の残滓である。このうち677は風化が弱く縄文時代晩期に属す。682はチャートの剥片である。図の上縁に敲打痕があることから、両極打撃により剥離した剥片である。683・684は厚みのあるサスカイト製の石核である。厚さ2cm以上の板状素材から不規則に打点を移動させながら扁状の剥片を剥離した後の残滓である。685は結晶片岩製の打欠石錐である。扁平楕円礫の両小口部を敲打で打ち欠く。686～691は叩石である。686・689は結晶片岩製で、扁平礫の周縁に敲打痕が認められる。687・688・691は砂岩製で、687・691は上下の小口面にあばた状の顕著な敲打痕があり、側縁には線状の敲打痕がある。690は安山岩製、その他は結晶片岩製である。692～694は石皿である。692は砂岩製で磨滅面が窪む。693は花崗岩製で磨滅面は平坦である。694は硬質砂岩製で磨滅面は平坦である。

#### <5区縄文包含層上層出土遺物> (第69～74図)

695～707は深鉢口縁部片である。そのうち695～704は楕円押型文を施文するもので、702～704以外は内面に斜行沈線を施文する高山寺式である。702は口縁端部を外側に拡張し面をもつ。704は口縁下に円形刺突文を施す。705は口縁外面に粘土帶を貼付し楕円と山形が組み合う複合押型文を横位に1条施文するもので、穂谷式の新しい段階(矢野2008の穂谷式第2段階)に属す。706は外反しない直口外面に二枚貝条痕を横位に施し、上端面に押捺縄文を施すものである。707は口縁部が斜上方に開く器形で、外面に斜行する平行線押型文を施文する。原体彫刻は4条横位刻みで、器面側で3条凹線の陰刻となる。1回転毎に器面から離し、重複して施文する。内面は縦位の刷毛状の木目条痕を施す。

708～741は楕円押型文を施文する深鉢胴部片である。そのうち708～714は内面に斜行沈線を施文する高山寺式。734～741は楕円の単位が小形で、734は内面にも押型文を施文する黄鳥式(兵頭2008)である。

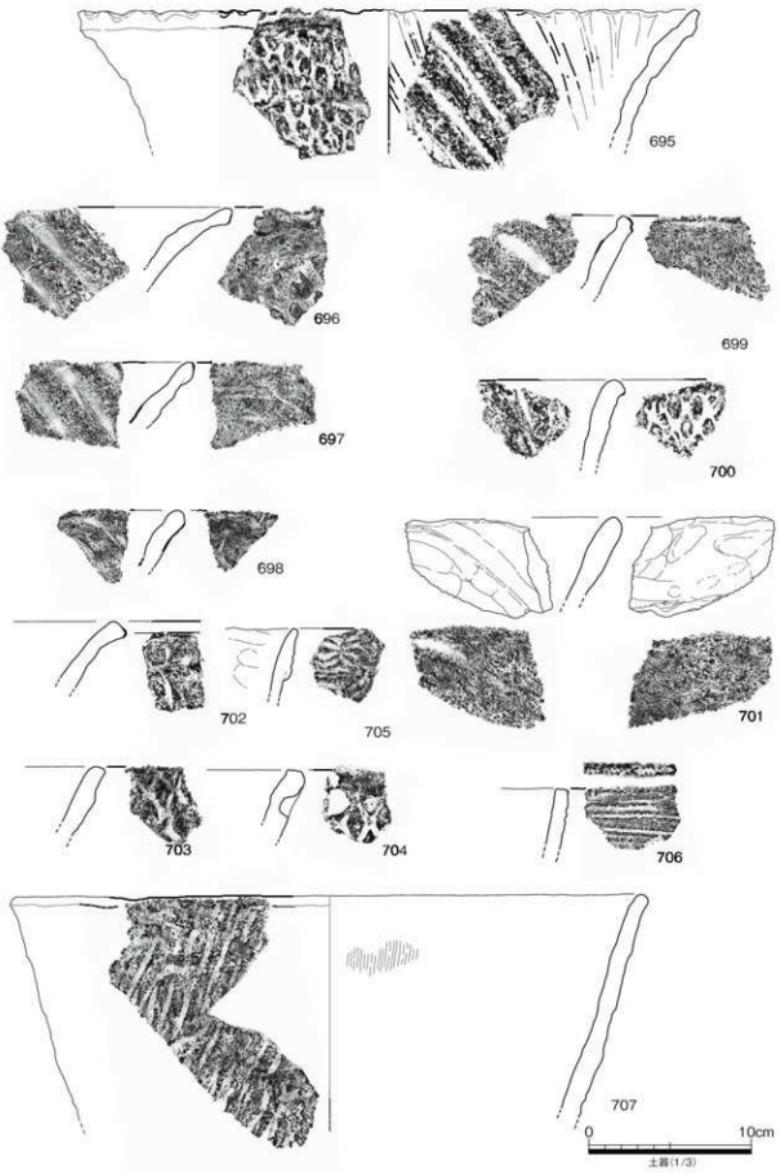
742～745は押型文系以外の深鉢片である。742は内外面に撲糸文を施文。743は外面に刻目隆帯1条、押引沈線文を施文。744・745は下向きの三角形突起を貼付する。

746・747は縄文時代晩期の混在遺物である。746は口縁端部に刻目をもつ深鉢で外面を二枚貝条痕で調整する。747はボール状浅鉢で内外面を研磨し、外面に3条以上の沈線を施文する。

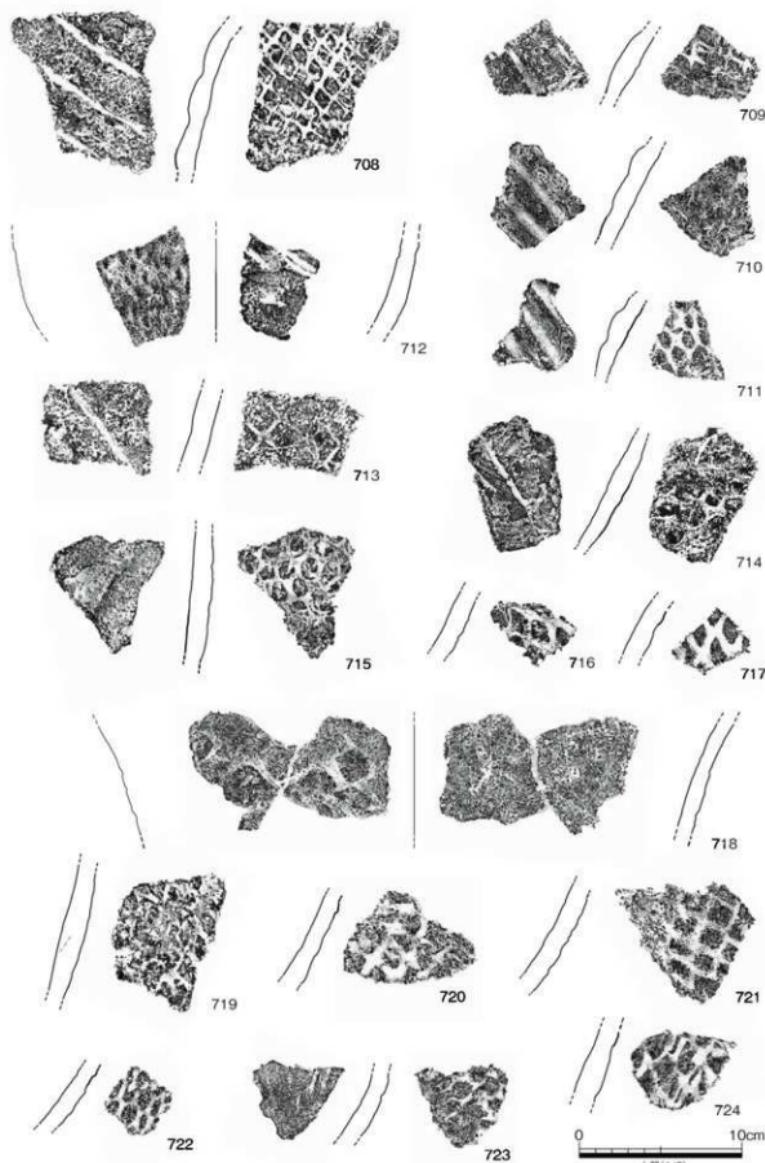
748～776は石鏃である。すべてサスカイト製の凹基式である。このうち762～775は風化が進行していないことから、晩期に所属する。748・749は側縁で屈曲し、先端に向かって細く仕上げる。753・755・759は逆刺の下端を丸く仕上げるものである。晩期の石鏃は、素材剥片の剥離面を残すものが多い。

776は石鏃未製品の可能性があるものでここではスクレイパーに分類した。777は尖頭器である。調整加工には楕状剥離が認められず、断面は扁平な三角形状を呈す。778は結晶片岩製の打欠石錐である。図上側の打欠は片側からのみで、2か所に認められる。

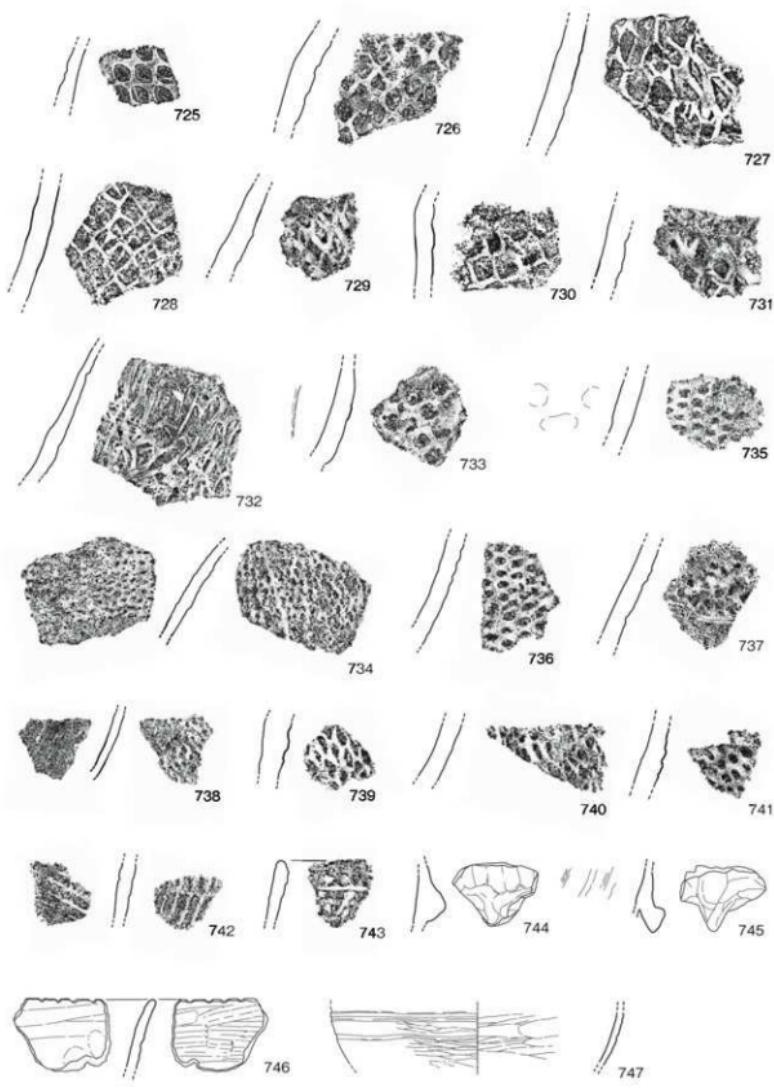
779～782はサスカイト製のスクレイパーである。いずれも風化が進行していないため晩期に所属するものである。779は片刃の刃部を直線的に仕上げる。780～782は刃部加工が不規則である。



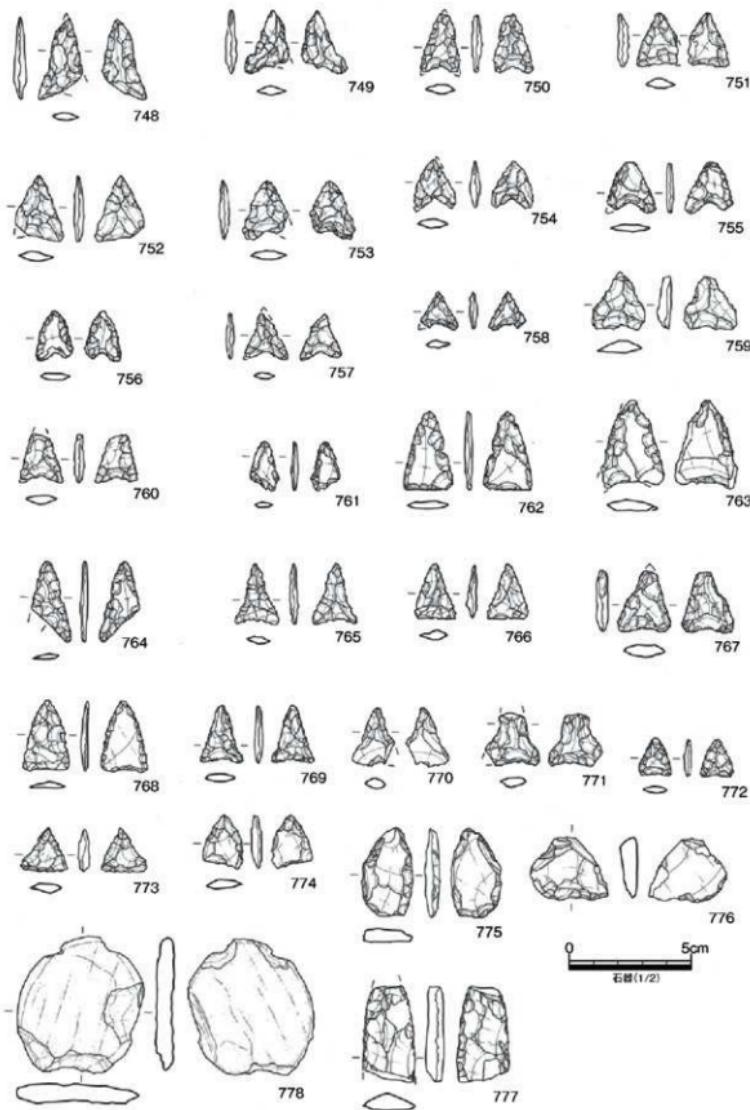
第69図 5区縄文包含層上層出土遺物 (1)



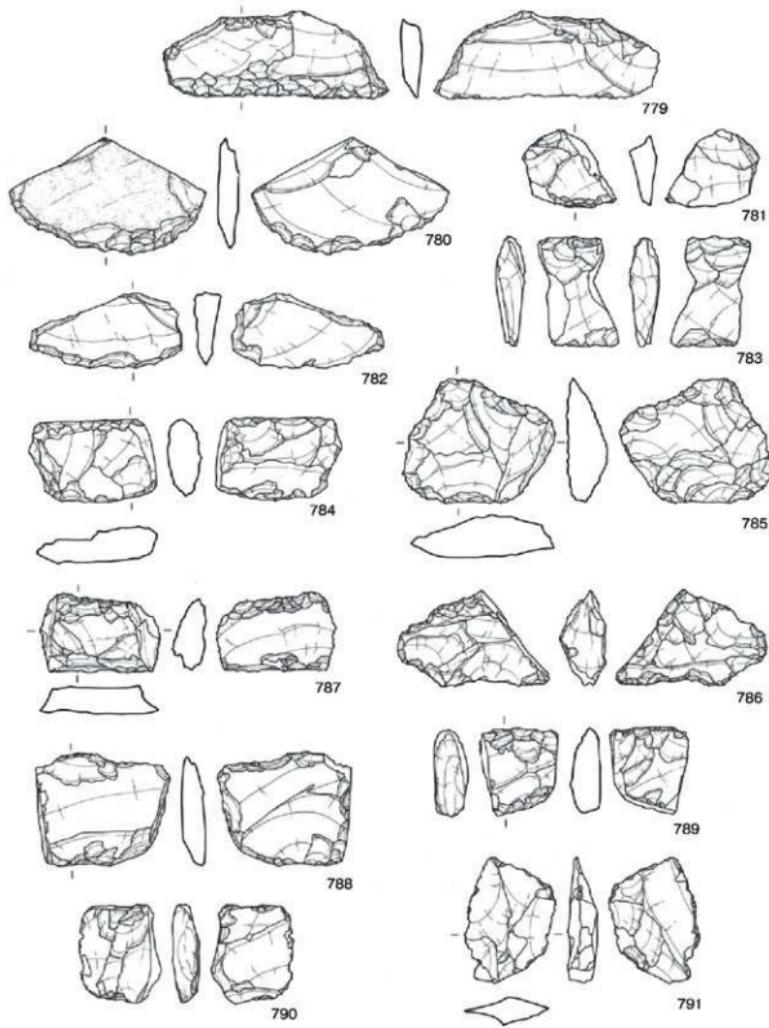
第70図 5区縄文包含層上層出土遺物 (2)



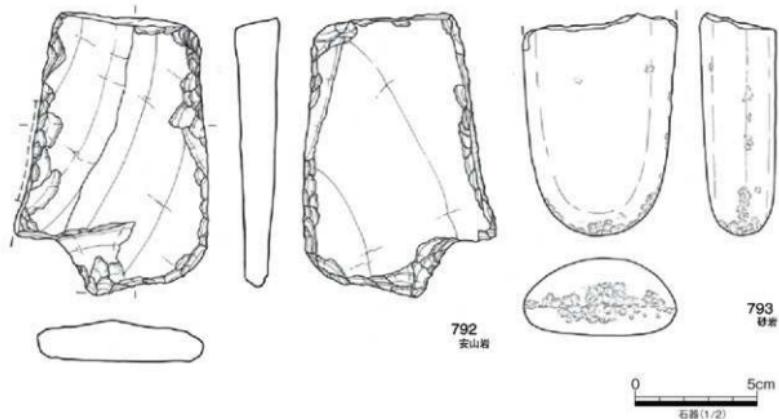
第 71 図 5 区縄文包含層上層出土遺物 (3)



第72図 5区縄文包含層上層出土遺物 (4)



第73図 5区縄文包含層上層出土遺物 (5)



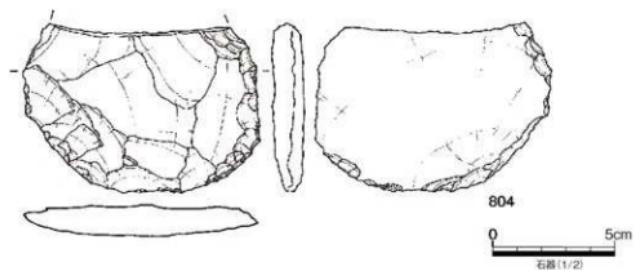
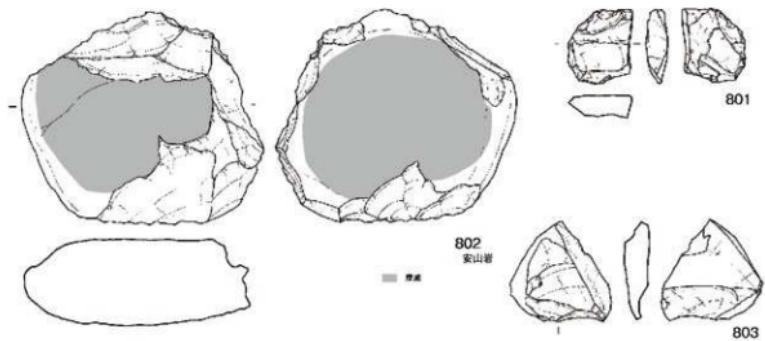
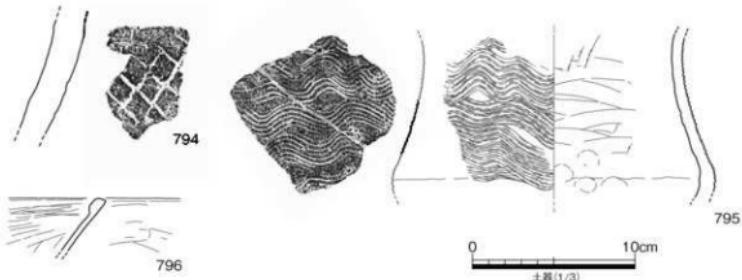
第74図 5区縄文包含層上層出土遺物(6)

783～790はサヌカイト製の楔状石核である。このうち787～790は風化が進行していないため晩期に所属する。791は晩期に所属するサヌカイト製の交互剥離石核である。792は安山岩製の打製石斧である。刃部付近に磨滅を認める。風化の程度からは判断できないが、晩期に所属する可能性が高い器種である。793は砂岩製の叩石である。図下端の小口部にあばた状の敲打痕が残る。

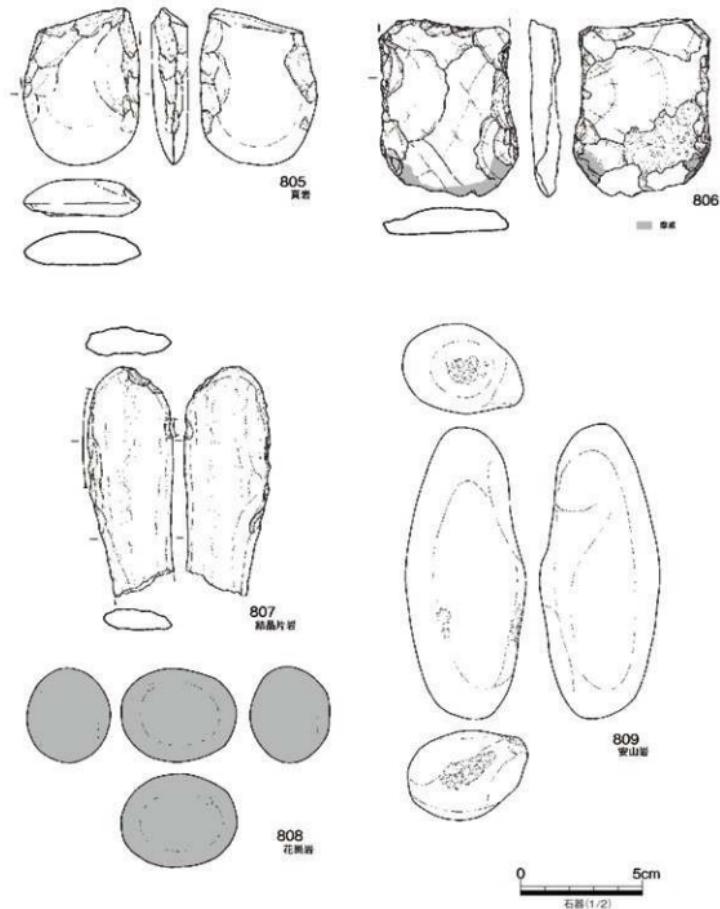
#### <4・5区出土位置・層位不明遺物> (第75・76図)

794は押型文系深鉢胴部片である。格子目状の楕円押型文を施文する。795は胴部がくの字に屈曲する浅鉢である。屈曲部から上に横位の条痕波状文を施文する。口縁への外反部までが残る。穂谷式第1段階(矢野2008)に位置づけられる。796は晩期前半の黒色磨研系浅鉢の口縁部片である。口縁部内面に玉縁状肥厚をもち、内外面を研磨で仕上げる。

797～800はサヌカイト製の石鏃である。798は風化の程度から晩期に所属する。801はサヌカイト製の楔状石核である。802は安山岩製の磨石である。被熱のため赤色化する。803はサヌカイト製の剥片である。側縁に自然面を残す。804はサヌカイト製のスクレイパーである。周縁を主に片側から加工する。805は頁岩製の磨製石斧である。側縁に加工痕を残し、刃部は平面的に丸く、若干片刃に磨き上げる。基部側は折損しており、全長は不明である。806はサヌカイト製の打製石斧である。刃部に磨滅痕がみられる。807は結晶片岩製の叩石である。主に側縁に敲打痕が残る。808は全面研磨の花崗岩製磨石である。809は安山岩製の叩石である。上下の小口部にあばた状の敲打痕が残る。



第75図 4・5区出土位置・層位不明遺物 (1)

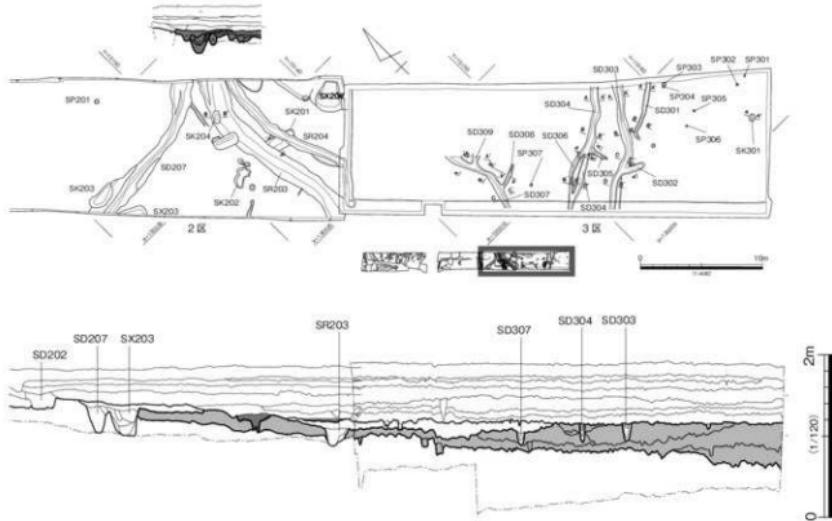


第 76 図 4・5 区出土位置・層位不明遺物 (2)

### 第3節 弥生・古墳時代の遺構・遺物

### (1) 概要及び報告の方法

2区の東半から3区にかけて、地形は緩やかに東に傾斜する。第2節で記した3区の縄文時代遺構を覆う縄文時代晚期から弥生時代初頭にかけての遺物包含層（第77図の薄いトーン）は2区東半の中程付近から始まり、次第に厚みを増し、3区東端では厚さ0.6mに達する。暗褐色系で粗砂を多く含み穂やかに堆積した土層である。弥生・古墳時代の遺構はこの堆積層を基盤として掘削されている。ただし、2区3区の境付近に真南から真北に向かう幅約20mの低地帯が形成され、その中央部に自然流路SR203・SR204がやや東に蛇行しながら北流しており、その東西両側の微高地に柱穴が、微高地から低地帯への傾斜面に溝が所在する。第77図断面では、特に3区側では、低地帯の上端から当該期遺構確認面まで、上部層との層剥が水平である。これは後世に耕作等により上面を削平された痕跡とみられる。この範囲で柱穴8基、土坑5基、不明遺構2基、溝9条、自然流路2条を確認した。なお、柱穴・土坑・不明遺構は出土遺物が少なく、時期不明のものが多い。出土遺物のある遺構を取り上げて報告することとした。

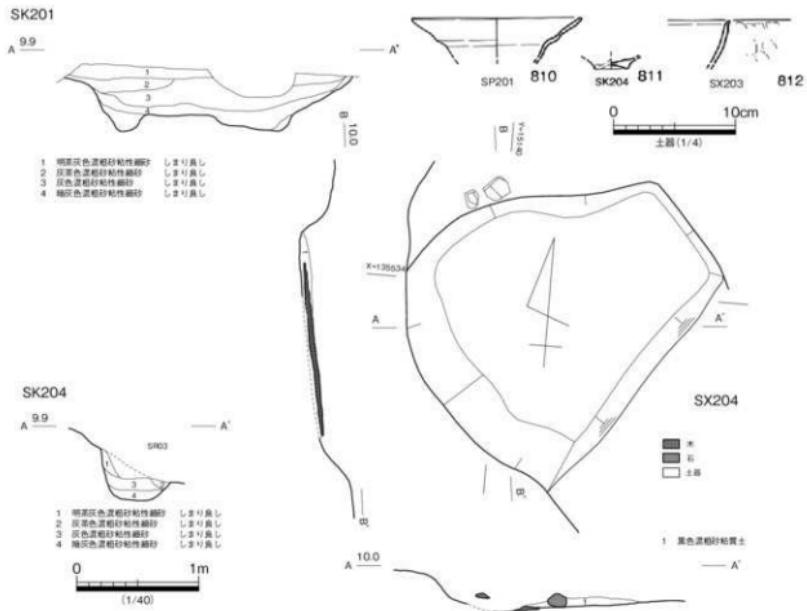


第77図 2・3区弥生・古墳時代遺構分布図

(2) 柱穴·土坑·不明遺構

SP201・SP301～SP307（第78回）

2区側で1基、3区側で7基の柱穴を確認した。SP307を除き、微高地に位置する。配列は不規則で、建物構造は明らかでない。出土遺物もほとんどなく、SP201で古墳時代土師器が1点出土したにとどまる。



第 78 図 SK201・SK204・SX204 実測図、柱穴・土坑・不明遺構出土遺物

810 は古墳時代の土師器鉢である。口縁部屈曲が弛緩した二重口縁のタイプで器壁が薄い。

#### SK201～SK204（第 78 図）

自然流路 SR203・SR204 に上面を削られ、流路に直交する方向で配置される不整格円形土坑群である。最も長い土坑は SK201 で約 2 m。深さは 0.5 m ほどのものが多い。暗灰色系の粘性細砂で埋積しており、自然形成の可能性もある。出土遺物はほとんどない。

811 は SK204 で出土した弥生土器の底部片である。上げ底で内面が剥落しており、厚さは不明である。弥生時代後期前半の鉢である。

#### SX203・SX204（第 78 図）

いずれも自然流路を覆う低地帯縁辺で検出した不定形な落ち込みである。SX203 は SD207 と同時に低地帯堆積土で埋没するが、その堆積以前に SD207 を切り込んで掘削されていることから SD207 より新しい遺構である。812 の土師器鉢が出土した。

一方、SX204 は自然流路 SR204 の東肩付近に広がる低地帯底面の凹凸の一部である。一辺約 2 m の不整台形状の落ち込みで、深さ約 0.4 m の底面は平坦に描う。底部に灰色細砂、その上層に黒褐色粘質

土が堆積する。底面に接して板状加工木が組まれたような状態で出土した。埋土中にはここでは報告していないが弥生時代終末期の土器が含まれていた。

### (3) 溝

#### SD207 (第79・80図)

低地帯を横切るように、その西側縁辺から東方向に流下し、自然流路SR203に合流するように掘削された溝である。ただ、北壁の断面観察でSR203の埋没後に掘削されたことが判明している。幅は1.4～2.0m、深さ0.35mで底面は凹凸があり2条に分かれる部分もある。下層(8～10層)は細砂が目立つ灰褐色系シルトで自然堆積し、再掘削による埋積(7層)を経て、粗砂混じり土(4・5層)堆積中に土器が多量に投棄されている。

813は二重口縁壺である。頸部が強く締まり直立する口縁部外面には凹線状の強いナデを3条施す。胴部上端までヘラケズリが及ぶ。814は頸部胴部境が不明瞭で頸部径が小さい壺である。外面には胴部から頸部まで連続したハケメを施す。815・816は口縁部が大きく開く形態の壺である。816は頸部がやや直立し、口縁端部を上方に拡張する。淡橙色を呈す胎土中に結晶片岩片や赤色粒を多く含むことから、阿波地域からの搬入品と考えられる。817は小形丸底壺である。頸部の締りが弱く、底部にわずかな面を残す。粗いハケメ調整を施す。818～838は甕である。このうち、819は下川津B類土器と同形態だが胎土中には角閃石ではなく粗い金雲母を含む。826は二重口縁の吉備系甕である。口縁部に擬口縁8条を施し器壁が薄い。胎土は茶褐色で小粒の角閃石を含む。吉備地域からの搬入品と考えられる。838は口縁部下に×字を施す幅広い突帯を貼付する。西部瀬戸内系の土器である。839～846は鉢である。840・846は底部が厚く下端が外に踏ん張る形状を呈すが、839、841、845は丸底化が進行しつつある。847～855の底部片も下端稜線が弛緩する。850は底部から2cm上の外面に細棒状モチーフを陰刻する絵画土器である。856は製塙土器である。外面に斜め方向のタタキが施され、脚部は外下方に踏ん張る形態を呈す。備讃Ⅲ式に位置づけられる。

以上の出土土器は、直立する二重口縁壺、鉢主体の供膳器種組成、丸底傾向のある底部片、吉備系古式土器の存在などから古墳時代初頭を下限とする資料である。溝は弥生時代後期後半から継続し、再掘削を経て古墳時代初頭に埋没したものと考えられる。

#### SD301 (第81図)

3区南東部で検出した。幅0.32m、深さ0.1mで北東方向に流下し、灰色系砂質土で埋没する。土器片が少量出土した。

857は弥生土器甕である。口縁端部の面取りは明瞭である。858は製塙土器脚台部片である。茶褐色を呈し、脚台の外下方への踏ん張りはあるが、若干の矮小化が認められる。備讃Ⅲ式の範疇で位置づけられる。

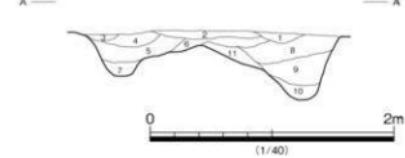
#### SD303 (第81図)

3区で検出した。調査区の西から東に蛇行しながら流下する。途中SD302に分岐する。幅0.67m、深さ0.35mで下層に粗砂ブロックを含む灰褐色系砂質土で埋没する。

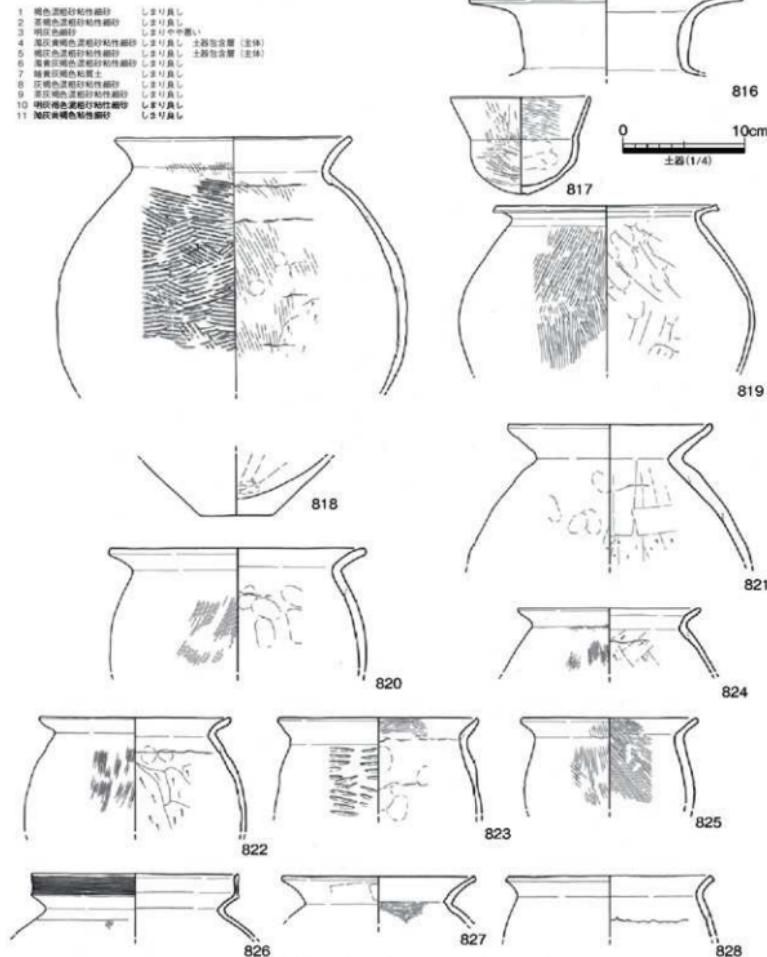
859・860は壺である。859は小形丸底の短頸壺で肩が張る胴部から口縁部が短く屈曲するタイプで、

SD207

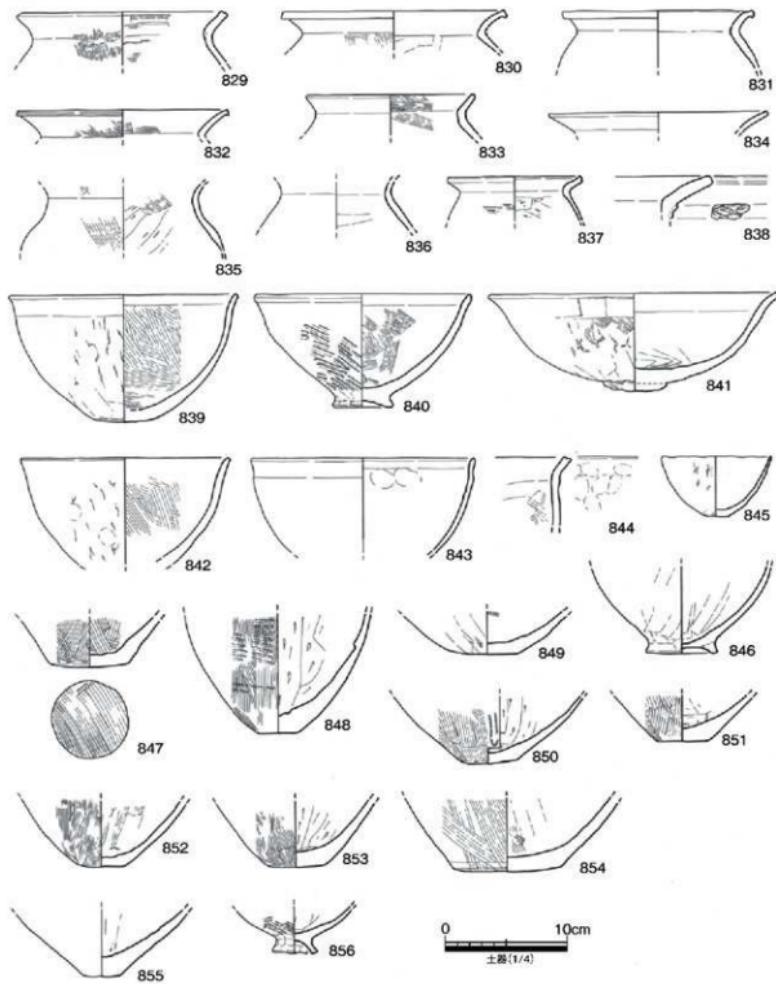
A 10.5



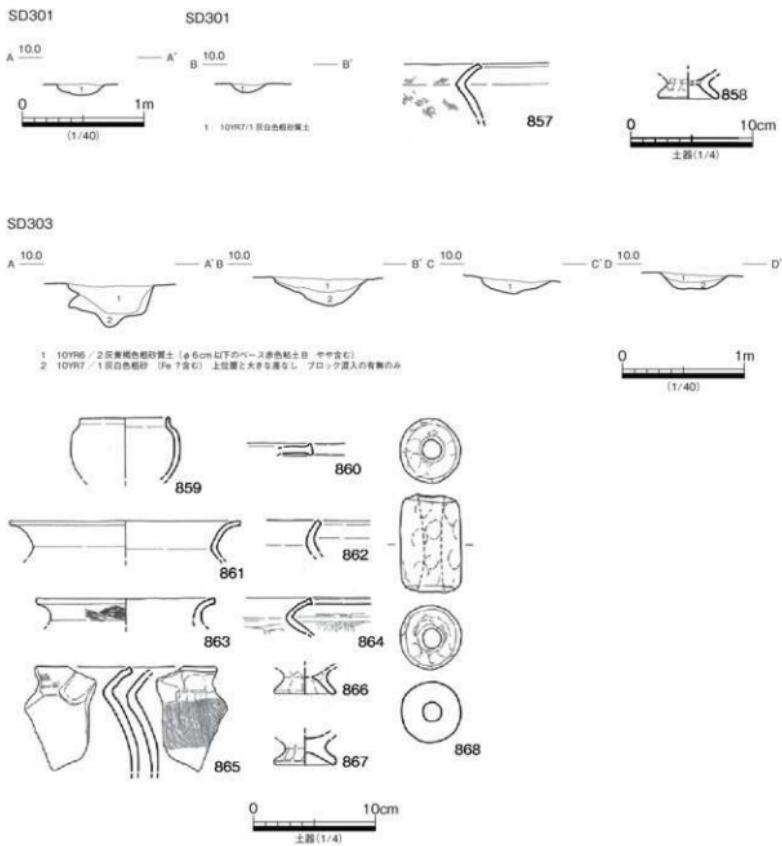
- 1 暗赤褐色砂質性細目
- 2 黄褐色泥質砂質性細目
- 3 黄褐色泥質砂質性細目
- 4 黄褐色泥質砂質性細目
- 5 暗赤褐色泥質砂質性細目
- 6 黄褐色泥質砂質性細目
- 7 黄褐色泥質砂質性細目
- 8 黄褐色泥質砂質性細目
- 9 黄褐色泥質砂質性細目
- 10 暗赤褐色泥質砂質性細目
- 11 暗赤褐色泥質砂質性細目



第79図 SD207 実測図、出土遺物（1）



第 80 図 SD207 出土遺物 (2)



第 81 図 SD301・303 実測図、出土遺物

器壁が薄い。860は広口壺口縁部片である。端部を上下に拡張する。861～864は甕である。865は片口鉢。866・867は製塙土器脚台部片である。裾を外下方へ踏ん張る形態で備讃三式である。868は土師質の大形管状土錐である。上下に面を持ち側面は直線的で、胎土は茶褐色を呈し粗い砂粒を含む。長さ 8.1cm、重量は 247.8 g と大形で、孔径 2 乗値も 2.25 と瀬戸内海の児島地域に多い管状土錐C型に相当する（乗松 2009）。

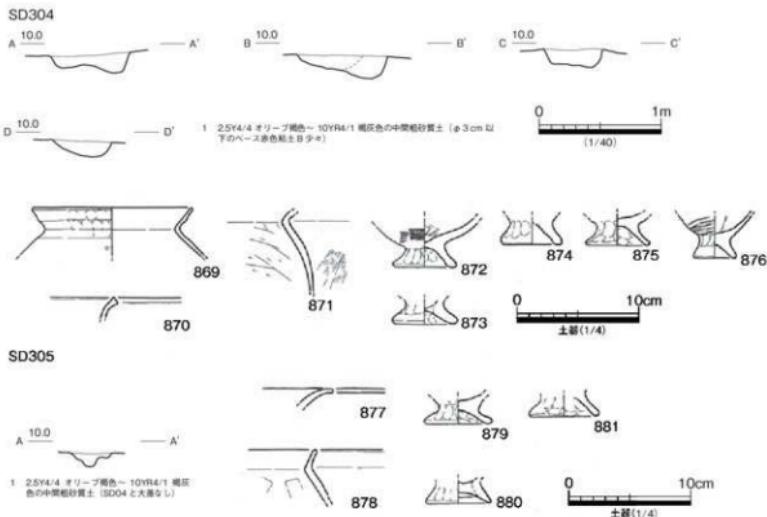
以上の出土土器は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられる。

### SD304・SD305（第82図）

3区で検出した。SD304は、調査区の西から東に蛇行しながら流下する。途中SD305に分岐する。幅0.7m、深さ0.15mで灰褐色系粗砂質土で埋没する。SD304とほぼ同じ軌跡をもつ。製塙土器が多く出土している点が注目される。SD305は幅0.32mと小規模で、南方に派生し延長1.3mで消失する。このSD305分岐点付近で製塙土器がまとまって出土している。

869～871は甕である。869は器壁が極端に薄く、口縁部中位に僅かな屈曲があり、端部は内面に僅かに肥厚する。内面はヘラケズリの痕跡が僅かに残る。残存状態は悪いが、古式土師器の範疇に含まれる個体である。872～876は製塙土器の脚台部片である。872～875は外下方への踏ん張りが強く、876は脚台の矮小化が認められる。なお872は体部に横方向の連続タタキ、内面に放射状に調整原体圧痕線が残り、胴部下半が丸くなる形態と推測される。備讃Ⅲ式からⅣ式古相に位置づけられる。

877～880はSD305で出土した土器である。877・878は甕口縁部片、879～880は製塙土器脚台部片である。いずれもSD304出土資料と顔面はなく、同時に埋没したものと考えられる。

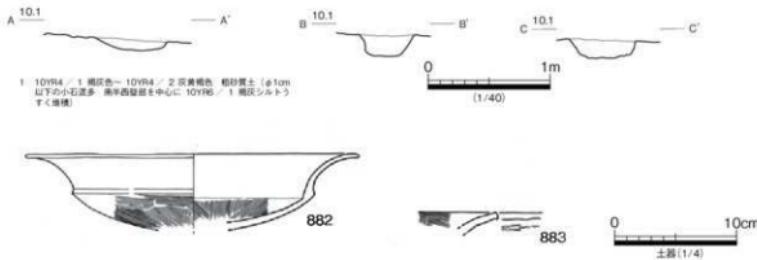


第82図 SD304・305実測図、出土遺物

### SD307（第83図）

3区北側低地帯の東肩に沿うように掘削された溝である。途中SD308・SD309が東方に分岐する。調査区南壁断面では、溝の埋没後に低地帯堆積層に覆われることがわかる。幅0.55m、深さ0.16mで礫混じりの粗砂質土で埋没する。

882は高杯部片である。口縁部の開きが大きく端部の肥厚は見られない。883は甕口縁部小片である。端部を面取りし、外面に胴部から続くとみられるタタキが残る。弥生時代後期後半に位置づけられる。



第83図 SD307 実測図、出土遺物

#### (4) 河川跡

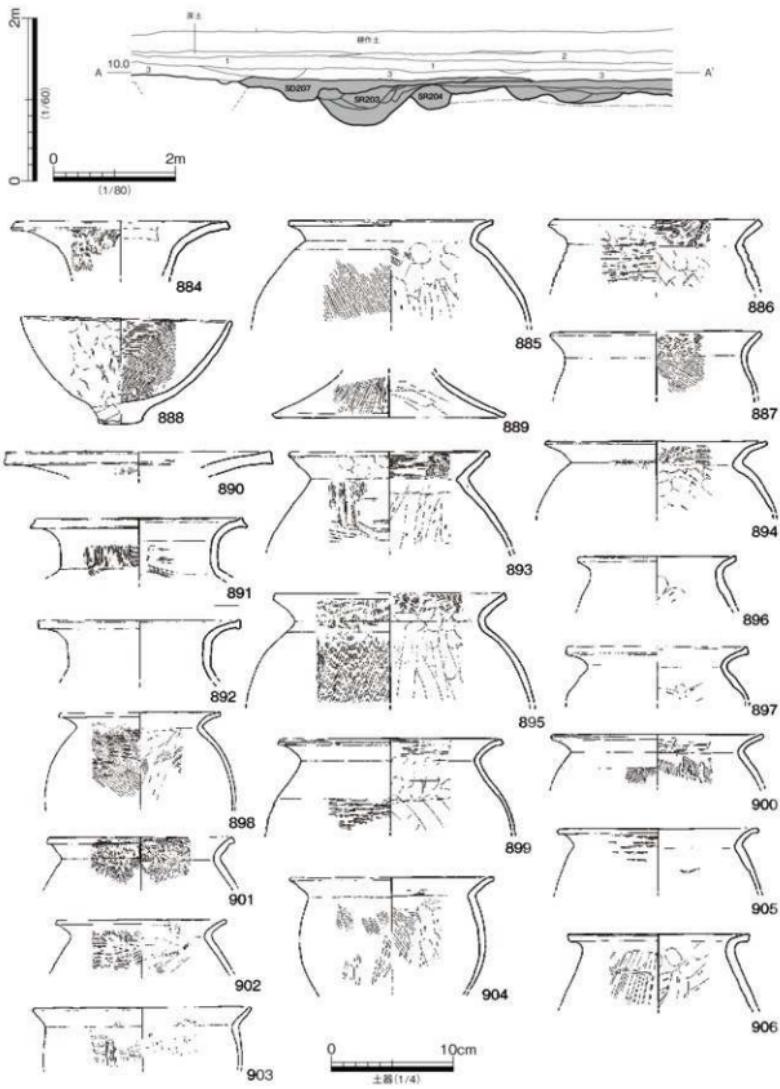
##### SR203・SR204 (第84・85図)

SR203は2区南側低地帯中央を背骨状に南から北に流下する自然流路である。幅2.1m、深さ0.8mで断面はU字形を呈す。断面観察から、東に隣接して流下するSR204の埋没後に流れが生じたことがわかる。下層に灰白色粗砂層が0.3m堆積し、その後暗黄色系シルト質土が粗砂ラミナを介しながら堆積する。この層に出土遺物の大半が含まれる。調査区北半に遺物が集中する。流路底面で検出したSK204の位置よりやや北側に遺物集中区があり884～889の土器が出土した。また北壁土層の観察から、当該流路埋没後に東から流下して合流するようにみえるSD207が掘削されている。なお、SR204は実測可能な出土遺物が出土しなかった。

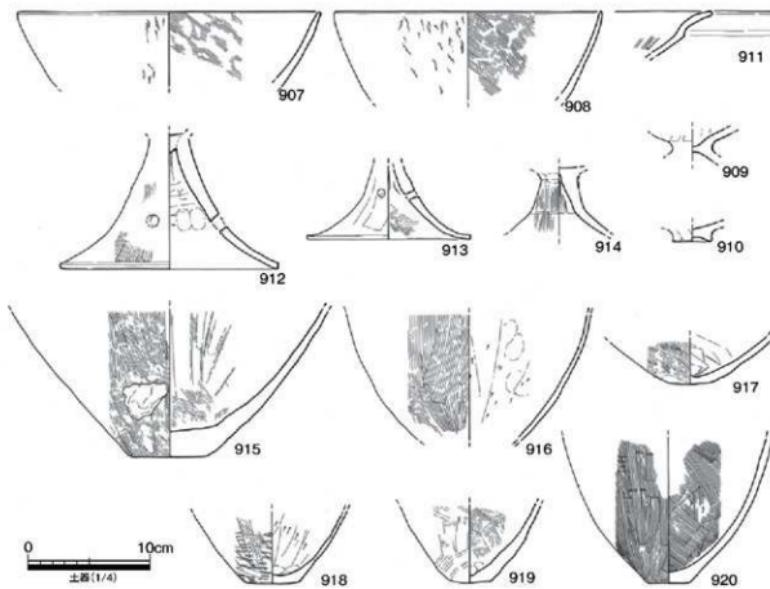
884は口縁部が大きく開く広口壺口縁部片である。端部を下方に若干拡張する。885～887は甕である。いずれも口縁部の面取りは丁寧に施される。888は厚く突出した平底をもつ直口鉢である。889は器壁が薄く脚端が大きく開く高杯脚部片である。以上の土器がSK204北側の遺物集中区でまとまって出土した。

890～892は壺である。890は口縁部が大きく開く広口壺、891は頸部が直立し口縁部が短く外反する広口壺、892は胴頸部の屈曲が弱く外面調整が胴部から頸部まで継続するタイプの壺である。893～906は甕である。口縁部は面取りを行うものと丸く取めるものがある。胴部境はくの字に屈曲するものと緩やかにカーブを描いて反転するものがある。899は胴部上半中程まで横位のタキを施し、そこから上がりやや内傾する器形を呈す。907～910は鉢である。909・910は低脚台が付く鉢で製塗土器ではない。911～914は高杯である。914は脚部中程で弱い屈曲を経て脚端が開く形状を呈す。915～920は胴部から底部にかけての破片である。915は外面に焼成破裂痕様の剥離が残る。917・919は底縁稜線が弛緩し、丸底化の傾向がみられる。

以上の出土土器は弥生時代後期後半新相に所属する。



第84図 SR203・SR204 実測図、出土遺物 (1)



第85図 SR203出土遺物(2)

#### 第4節 古代・中世の遺構・遺物

##### (1) 概要

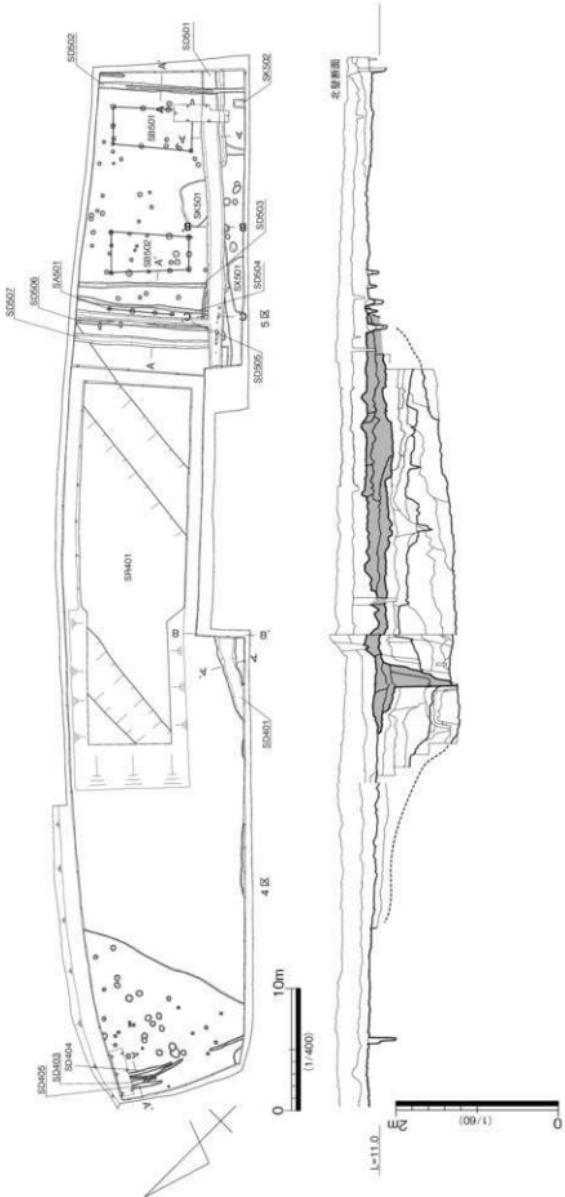
古代は2区に浅い低地帯SR201・202に9世紀頃の土器が少量、4・5区にまたがって西から東に流下する自然流路SR401に10世紀頃の遺物の出土をみると、ほかにまとまった遺構は所在しない。中世から近世にかけて、4・5区ではSR401埋没後の低地帯の南北に柱穴・土坑・溝が分布し、主に低地帯南側で建物遺構を検出した。そのほか、近世の木樋を埋めた暗渠水路も検出している。1区では土坑墓1基、井戸1基、溝4条を検出した。2区では溝2条を検出した。以下、遺構種別ごとに報告する。

##### (2) 建物跡

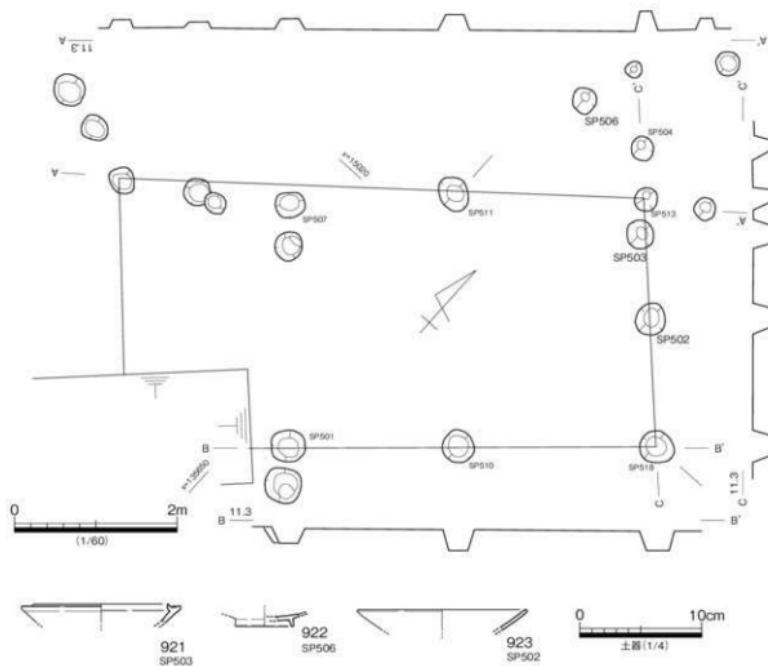
###### SB501(第87図)

5区南側で検出した掘立柱建物である。梁間2間(3.1m)、桁行3間(6.6m)で主軸方位はN 50°Eを示す。柱穴の大きさは直径0.35～0.4mで、深さは深いものでも0.25mを超えるものではなく、上面の削平を被る。柱痕が遺存したものでは直径0.18mの太さを確認した。柱穴埋土中から少量の土器片が出土した。

921は7世紀中葉の須恵器坏身片である。混在品とみられる。922は土師器椀の高台部片である。高台径4.6cmと小形で、高台も矮小化した形態である。923は土師器皿である。橙色を呈し焼成は硬く、



第86図 4・5区古代・中世遺構分布図



第87図 SB501 実測図、出土遺物

15世紀頃のものであろう。

#### SB502 (第88図)

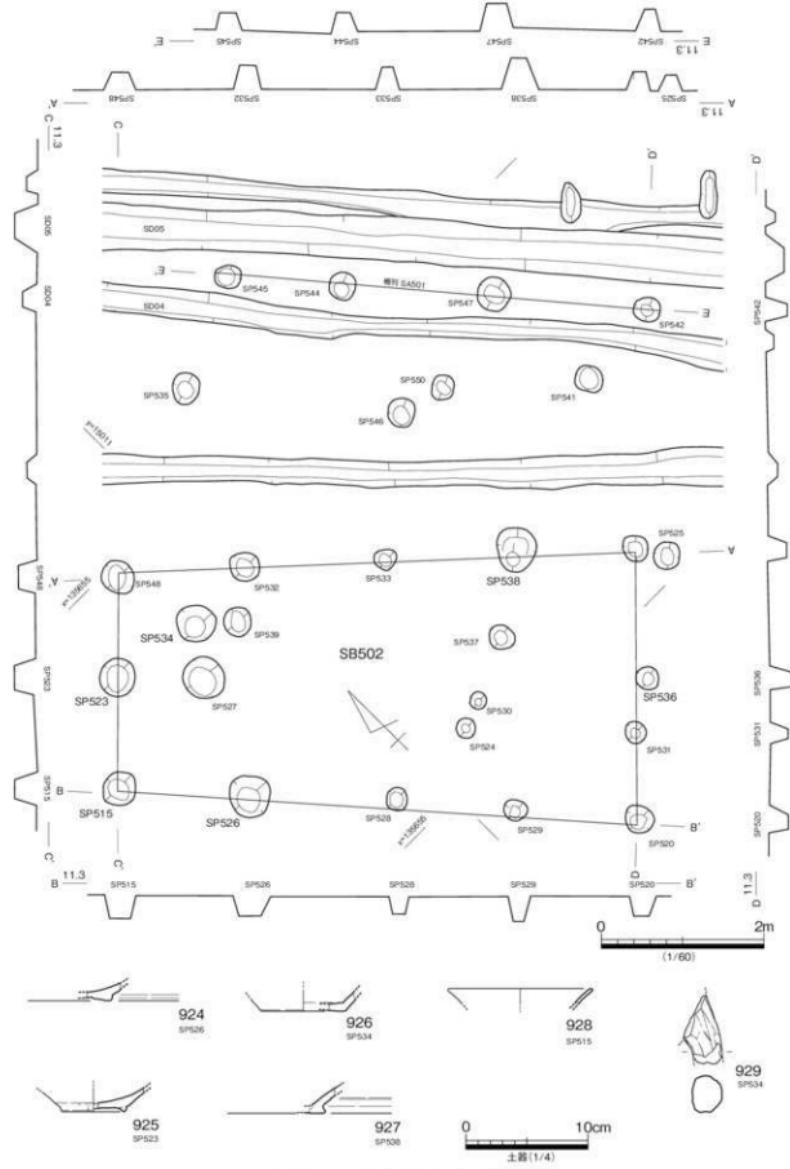
5区北側で検出した掘立柱建物である。梁間2間(3.3m)、桁行3間(6.6m)で主軸方位はN 50°Eを示す。SB501と同じ方位で並列する。柱穴の大きさは直径0.35~0.5mで、深さは深いものでも0.3mを超えるものではなく、上面の削平を被る。柱痕が遺存したものでは直径0.18mの太さを確認した。柱穴埋土中から少量の土器片が出土した。

924は緑釉陶器の椀底部片である。釉は全面が剥離するが形状から判断した。925は黒色土器底部片である。926は須恵器底底部片である。927は土師器底である。928は土師器皿口縁部片である。929は土師器足金脚部片である。

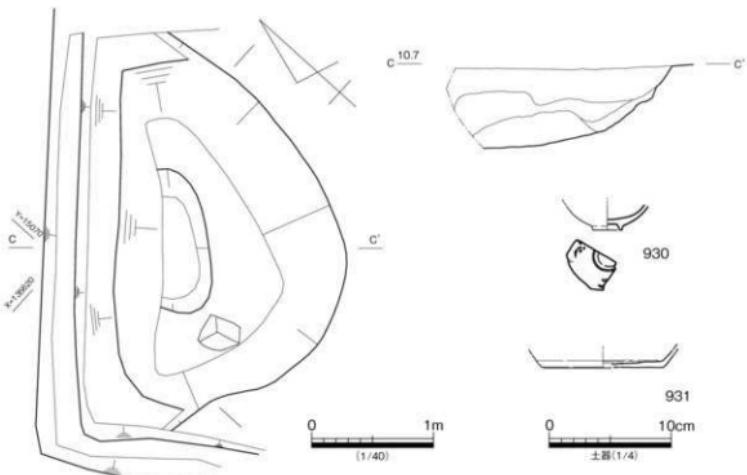
#### (2) 井戸

#### SE101 (第89図)

1区北端で検出した井戸である。直径約3m、深さは0.65mで断面は緩やかなU字形である。埋土中



第88図 SB502 実測図、出土遺物



第89図 SE101 実測図、出土遺物

より若干の遺物が出土した。930は埋土中位で出土した磁器染付小壺である。外面に草花文を施文する。931は須恵器壺である。瓦質焼成で底面付近に火燄が残る。18世紀前半の遺構である。

### (3) 土坑

#### SK501 (第90図)

5区南側で検出した土坑である。長径3.7mの不整楕円形で、深さは0.2mが残り、褐色系砂質土で埋没する。埋没後、南側をSD401の掘開で削られる。埋土中より少量の土器片が出土した。

932は黒色土器A類の椀口縁部片である。端部が短く折れ、内面に沈線が巡る。933は黒色土器B類の椀高台部片である。934は土師器壺底部片である。黒色土器の年代から12世紀ごろの遺構と考える。

#### SK502 (第90図)

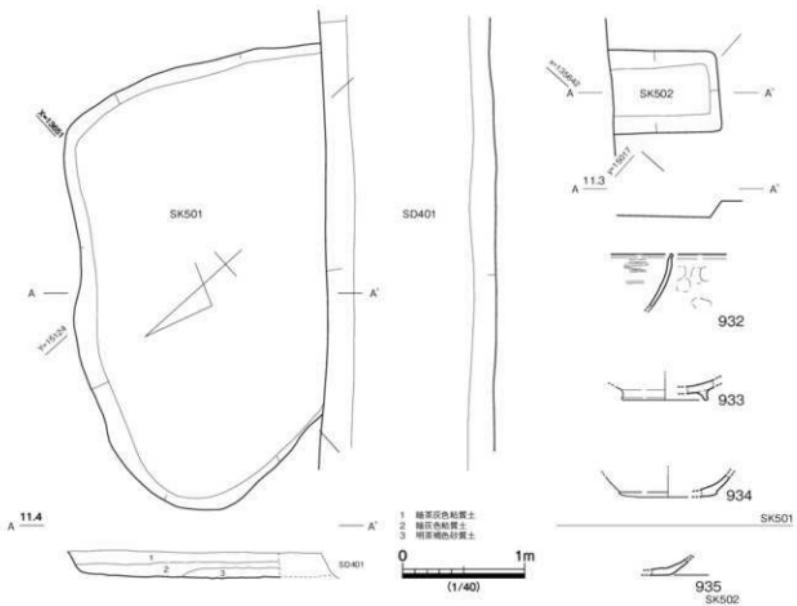
5区南側で検出した長方形土坑である。南側は調査区外に延びる。長さ0.9m以上、幅0.7mで箱型に掘削される。深さは0.15mである。埋土中から土器片1点が出土した。

935は土師器皿底部片である。内外面に丹塗りを施す。底部棱線が明瞭で、9～10世紀の所産である。ただ、当該遺構の時期を示すかどうか、明らかでない。

### (4) 土坑墓

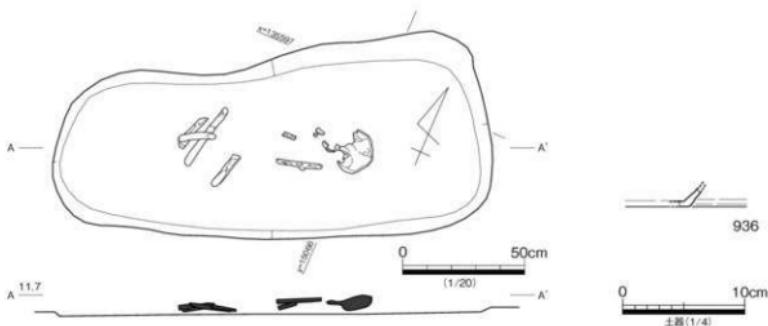
#### ST101 (第91図)

1区北端で検出した土坑墓である。長さ1.84m、幅0.8mで東が若干幅広の楕円形掘り方をもつ。深さは0.05m以下と浅く、底面にはば接して掘り方中央部から人の頭蓋骨及び手足骨が出土した。頭蓋



第90図 SK501・SK502 実測図、出土遺物

骨が東側で横位に置かれ、正面は東を向く。そのすぐ西に手骨が、さらに西に足骨が折り重なるように出土した。出土位置に乱れはなく、足を折り曲げて埋葬したものと思われる。性別や年齢等は不明である。936は埋土中から出土した13世紀頃の十瓶山産須恵器底部片である。この遺構の上限時期を示す。



第91図 ST101 実測図、出土遺物

## (5) 溝

### SD101 (第 92 図)

1 区の調査区中央部を、等高線に沿って縱断するように流下する地境の溝である。南肩には大形の角礫を配した石列が残る。石列前面から計測した溝幅は 0.7 m、深さは 0.5 m である。石列の背後には奥行約 1 m 分を控え掘りし裏込め土を充填する。井戸 SE101 の埋没後に掘削されている。また当該溝の埋没後には同じ位置に現代用水路が設置されている。埋土中から中世から近世にかけての遺物が出土した。

937 は備前系陶器壺口縁部片である。口縁部の立ち上がりが短く端部が若干玉縁状となる。備前Ⅲ期(13~14世紀)の所産である(間壁・間壁 1966)。938 は磁器染付碗底部片である。内面見込みは蛇目釉剥ぎし、砂目が若干残る。高台部外面に 3 条線を染付する。939 は磁器染付皿口縁部片である。口縁内面に草木文を施す。940 は京焼風陶器の瓶底部片である。底面に墨書が残る。キヘンの一文字を記す。941 は土師器小皿底部片である。底面にヘラ切痕がある。942 は陶器小皿片である。内面光沢釉、底面糸切痕を残す。幕末ごろの所産であろう。943~945 は土師器足釜口縁部片である。946 は弥生時代後期ごろの製塙土器片である。947 は古墳時代の須恵器甕口縁部片である。外面にヘラ記号が認められる。948・949 は丸瓦片である。側縁内面側に幅広いケズリ調整が施される。内面には鉄線切の痕跡は観察できない。950 は凝灰岩製の石臼である。風化が進み、磨目がほとんど遺存しない。951 は銅鏡(洪武通寶)である。952 は器種不明の肉厚の鉄器である。

以上の出土遺物から、SD101 は近世幕末期までに埋没した用水路と考えられる。

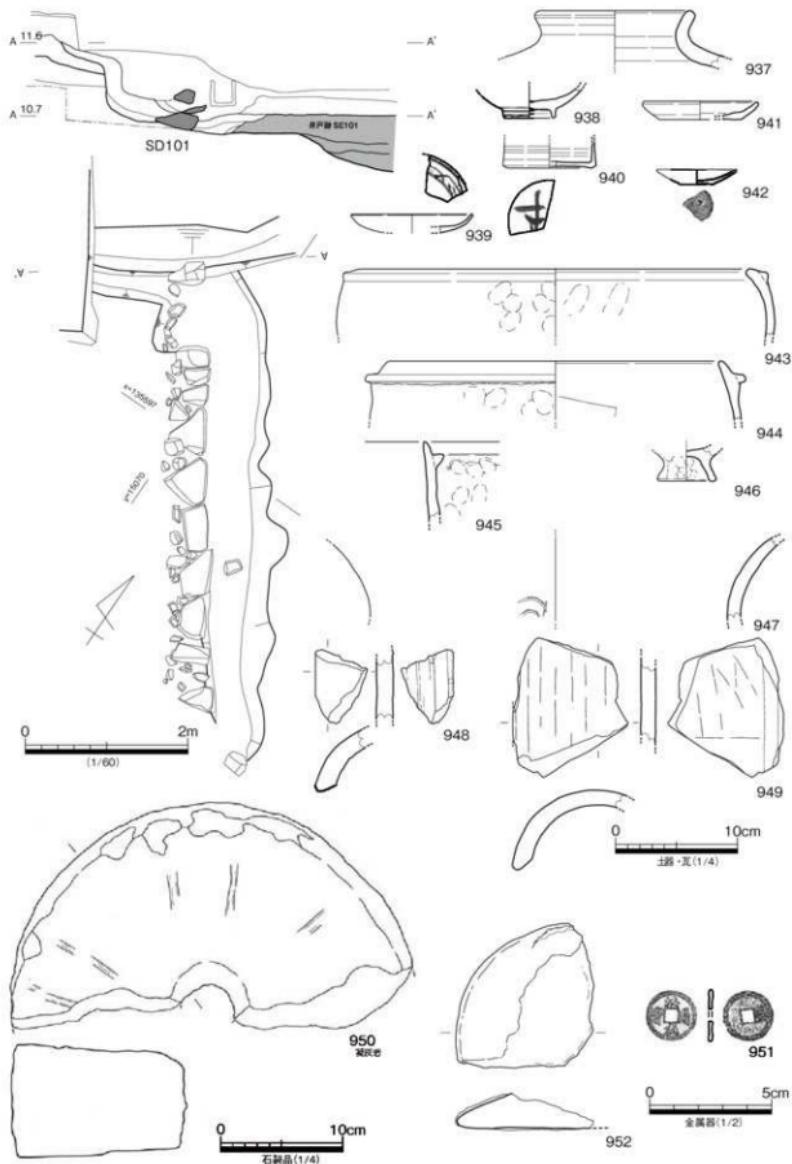
### SD102 (第 93 図)

1 区 SD101 と一部重複しつつ、その下位や側面にずれながら掘り方を残し、調査区を縱断する形で走行する溝である。調査区西側では緩やかにカーブして調査区外の北側に流下する。調査区東側では SD103・SD104 と合流し、合流部分では調査区の南に所在するため池堤防の基礎部分と推定される礫土で埋められる。埋土は下層に流水を示す褐色系粗砂混土が 0.14 m 堆積する。その中層には灰色系粘質土が堆積し穏やかな埋没過程を示し、さらに上層を粗砂ブロック混土が覆う。上層は埋め戻した可能性が高い。

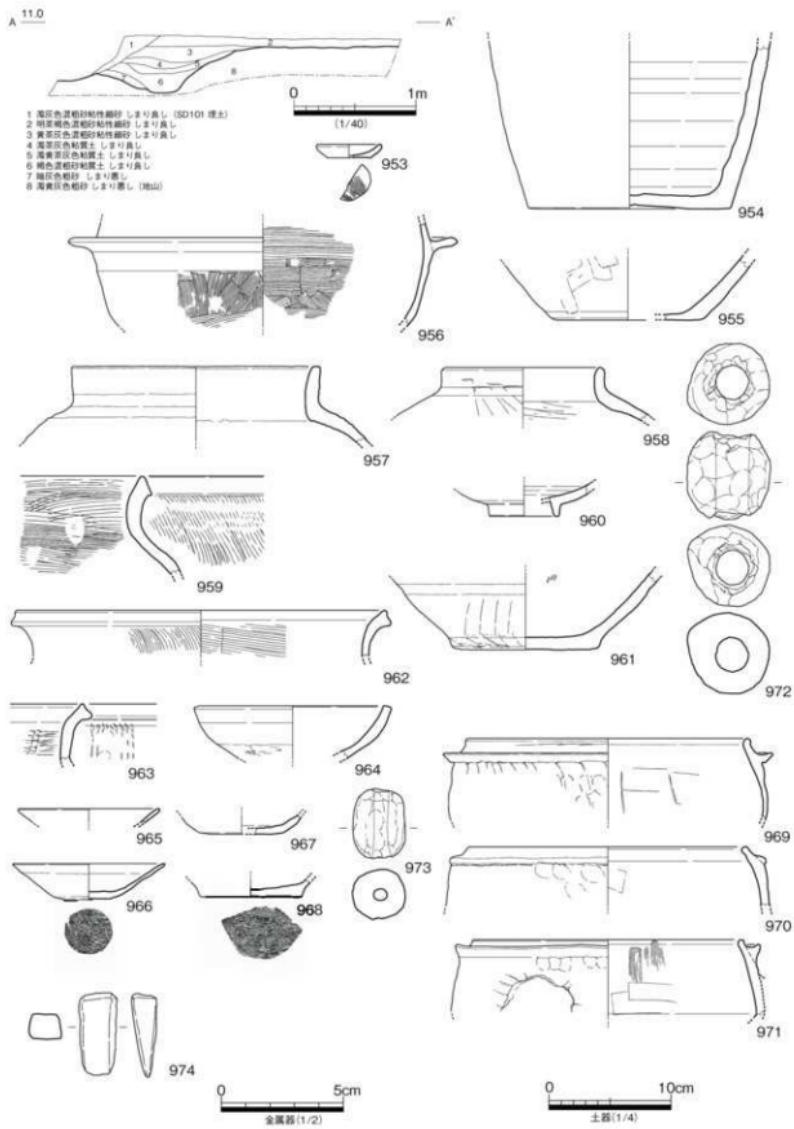
953~959・972 は下層で出土した遺物である。954 は備前系陶器壺胴~底部片、955 は須恵器こね鉢底部片である。956 は瓦質土器羽釜、957・958 は土師質土器壺で口縁部が短く立ち上がる形状。959 は土師質土器甕口縁部片である。972 は土師質の漁網錘で大形管状土錘である。長さ 6.2 cm、重量は 296.3 g と大形で孔径 2 乗値は 6.76 となる。

960~974 は中層・上層出土の遺物である。960 は肥前系陶器の刷毛目塗鉢である。内面に施釉と刷毛目塗、外面は釉剥ぎ。961 は土師質土器の擂鉢である。962・963 は瓦質土器甕、964 は土師質土器鉢である。965~968 は土師質土器壺・皿類で、底面に糸切痕を残す。969~971 は土師質土器足釜である。973 は土師質の漁網錘で管状土錘である。長さ 5.7 cm、重量は 88.7 g、孔径 2 乗値は 1.69 となる。974 は鉄器の楔である。

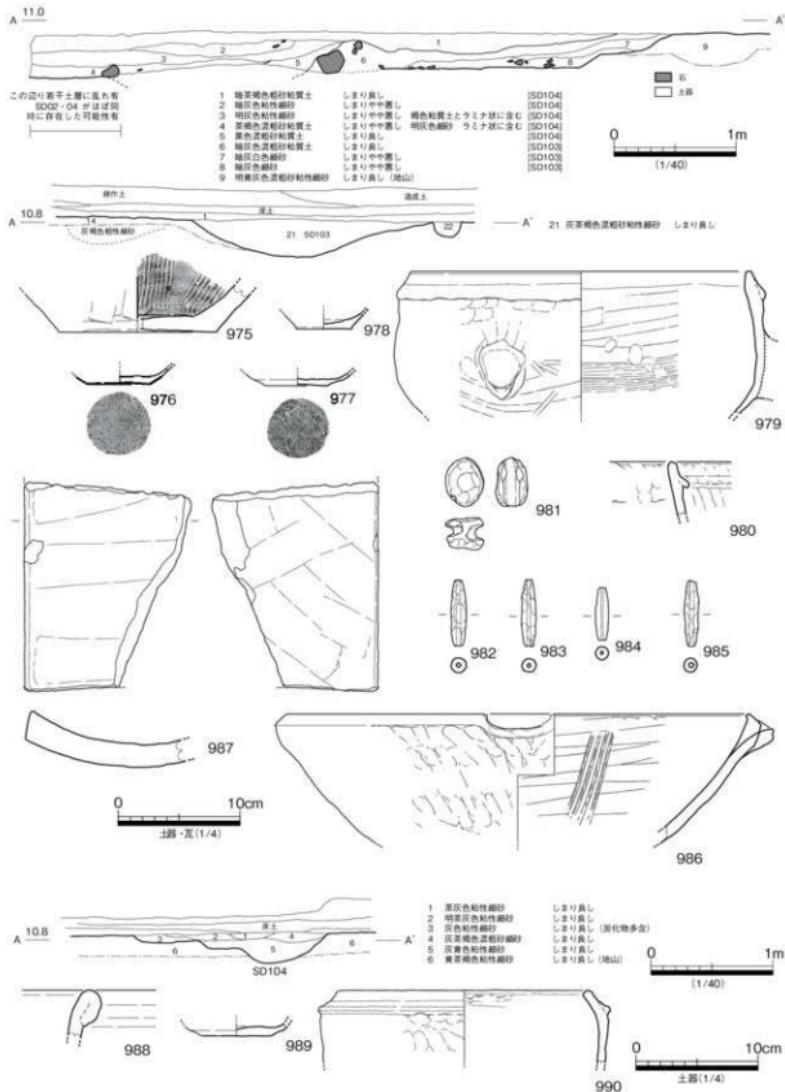
以上の出土土器から、当該溝の埋没時期は 16 世紀後半ごろと考える。



第92図 SD101 実測図、出土遺物



第93図 SD102 実測図、出土遺物



第94図 SD103・SD104 実測図、出土遺物

#### SD103・SD104（第94図）

1区中央部を横断するように2条件走する溝である。SD104が北側、SD103が南側で、両溝は最大2mの間隔をもち、SD102と交わる部分では両溝が重複する。断面ではSD103が先行し、埋没後にSD104が開削されたことがわかる。いずれも灰色系砂質土で埋没しており、細砂のラミナ層が介在することから、継続的な水流があったものと推測する。両溝ともSD102との交差部近辺では直径20～30cmの礫が多数出土する。SD102交差部より南側は大形礫が集中し、溜池状遺構SG101として別に報告しているが、SD102を含めて両溝ともSG101と関係をもつものと考える。

SD103は幅3.0m以上、深さ0.3mで断面は浅い皿状を呈する。SD104は幅2.4m以上、深さ0.3mで断面は浅い皿状を呈する。

975～986はSD103出土の遺物である。975は備前系陶器捕鉢底部、976・977は土師質土器坏である。坏底部には糸切痕が残る。978は土師質土器皿、979・980は土師質土器足釜、981～985は土師質の土錘である。そのうち981は側面に溝をもつ有溝土錘、982～985は管状土錘である。細型管状A型である（乗松 2009）。長さ4.4～5.5cm、重量は4.6～7.9g、孔径2乗積はいずれ0.09となる。986は土師質土器捕鉢で、口縁部は片口となる。987は平瓦片である。

988～990はSD104出土遺物である。988は備前系陶器壺の玉縁状口縁部片である。989は土師質土器の坏、990は土師質土器足釜である。

以上の出土遺物からSD103、SD104は15世紀ごろに埋没したものと考える。

#### SD201・SD202（第95図）

2区中央部を南から北に走行する重複する2条の溝である。SD201は幅5.0m、深さ0.3mで浅く幅広い。SD202は幅約1.8mで深さ0.15mをはかる。いずれも皿状の断面を呈す。

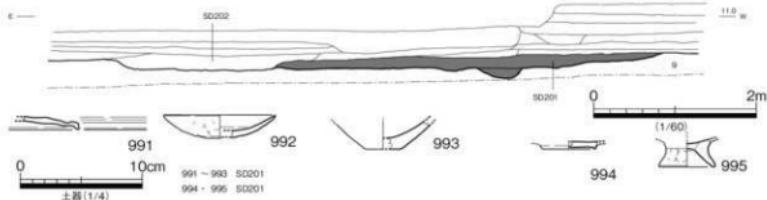
991～993はSD201出土土器である。991・993は9世紀前半の須恵器坏蓋と弥生土器底部で混在品、992は15世紀頃の土師器小皿である。994・995はSD202出土土器である。994は土師器碗の高台部片である。高台は細く矮小化しており古代末のものである。995は製塙土器脚台部片である。いずれの土器も、混在品である。

以上の出土遺物から、SD201・SD202は992が示す15世紀頃の堆積により埋没したものと考える。

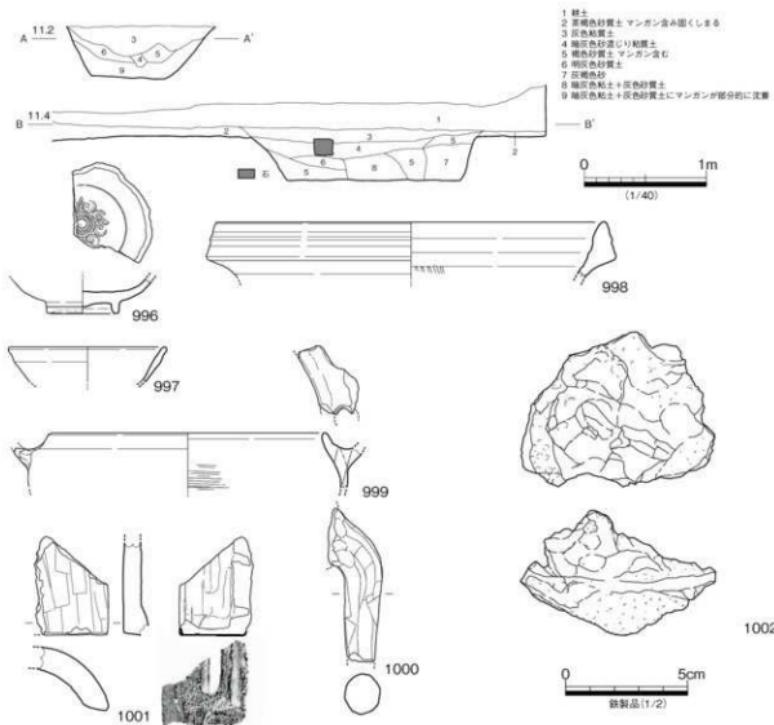
#### SD401（第96図）

4区の調査区南壁に沿って東から西に流下する溝である。幅1.5m、深さ0.4mで断面は逆台形で底面が平坦となる。灰褐色系砂質土で埋没する。

996は内面に花弁文を陰刻する18世紀頃の肥前系の施釉陶器である。997は土師器碗である。10世



第95図 SD201・SD202実測図、出土遺物



第 96 図 SD401 実測図、出土遺物

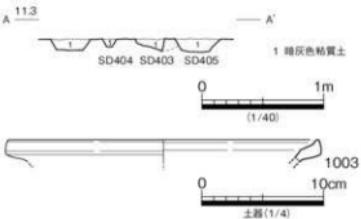
紀代の混在。998 は陶器の擂鉢である。口縁部を大きく拡張し端面に幅広い凹線を施す。内面にやや粗い撻目を備える。999 は土釜口縁部片。1000 は足釜。1001 は軒丸瓦の瓦当部が剥落したものである。天部に釘穴 2 孔をもつ。側面は斜めに大きく面取りする。中世末から近世にかけての瓦である。1002 は椀形壺である。重量は 238.4 g で上面はガラス化する。底面のカーブから直径 8 ~ 9cm の小形の鋳治炉が想定できる。996 の陶器から 18 世紀頃に埋没した溝である。

#### SD403 ~ 405 (第 97 図)

4 区北端で検出した小溝群である。幅 0.1 ~ 0.3 m で深さ 0.1 m 程度、断面 U 字形である。1003 は SD405 で出土した青磁皿口縁部片である。13 ~ 14 世紀頃のものである。周辺柱穴からも同様の時期の土器が出土していることから、調査区外にかけて所在する建物群に伴う溝と考える。

#### SD501 (第 99 図)

4 区の調査区南壁に沿って東から西に流下する溝である。幅 1.5 m、深さ 0.4 m で断面は逆台形で底



第97図 SD403～405 実測図、出土遺物

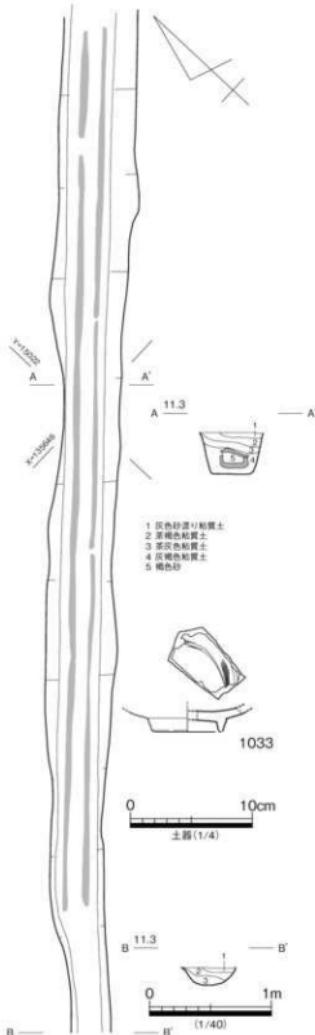
面が平坦となる。灰褐色系砂質土で埋没する。溝の北側に主軸を直交する中世の掘立柱建物 SB501・SB502があるが所属時期は異なる。また SD503～SD507の中世溝を切り込んで掘開している。調査区東端では、木樋を検出した SD502 に切られている。

1004 は磁器染付碗である。草花文を施文する。1005 も磁器の碗である。1006 は京焼風陶器碗である。1007 は陶器の灯明皿である。以上の遺物が当該溝の所属時期を示す。一方で、1008～1031 は混在品で、主に 10～12 世紀代のものと 15 世紀代のものがある。1010・1011 は縁軸陶器である。1012・1013 は黒色土器椀、1017～1022 は土師質土器椀・坏である。1023 は法華経を表裏に陰刻する瓦経片である。黄桃色で酸化炎焼成されたものだが、まるで石のように硬く焼き締っており、砥「石」に転用されている。片面は砥面のため経文の残りが悪いが、対面は経文、割付綫跡とも明瞭である。側縁には砥「石」転用の際の擦切分割痕が残る。経文は第 4 章で詳説するが、「妙法蓮華経（法華経）見宝塔品第十一」の一節である。1024・1025 は陶器擂鉢、1026～1029 は土師器坏である。1030 は土師質土器鍋、1032 は外区に連珠をもつ巴文軒丸瓦である。

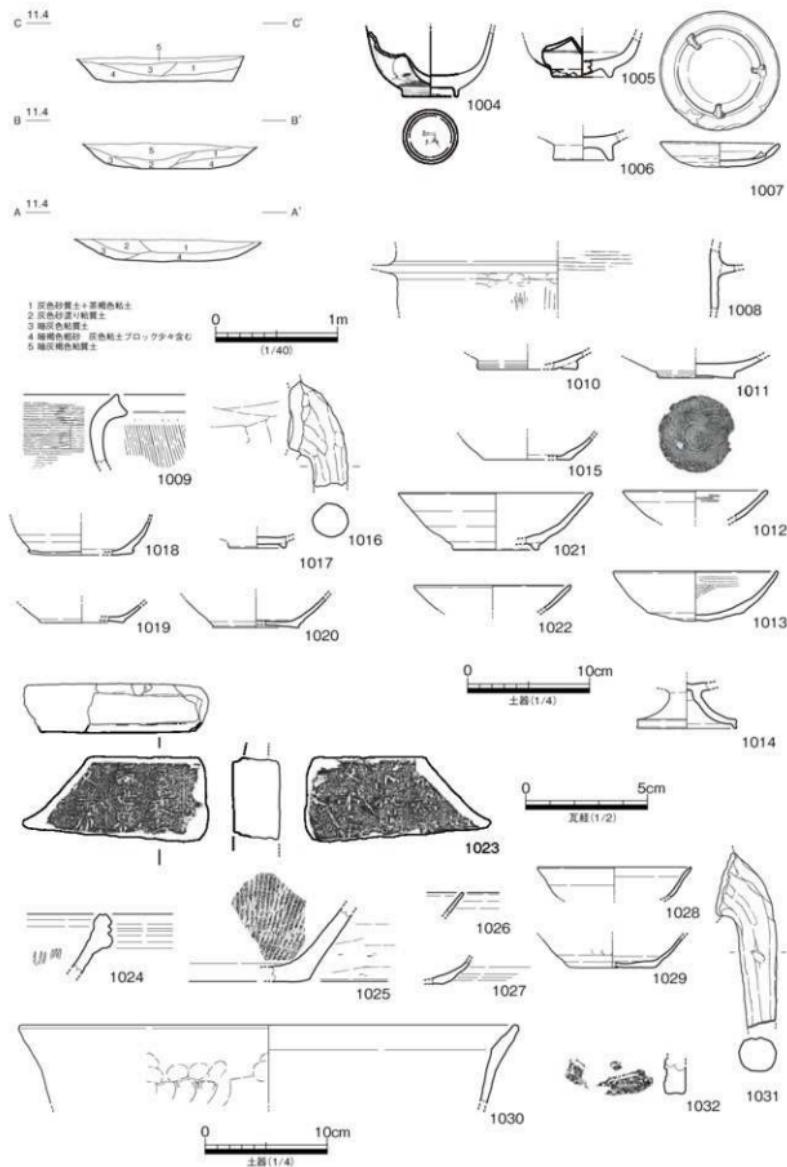
以上の出土遺物から 18 世紀頃に埋没した溝と考える。

#### SD502 (第98図)

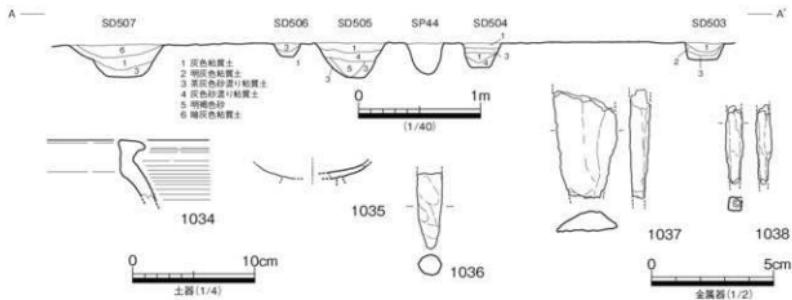
5 区南端で調査区東壁に沿って北流する溝である。SD501 埋没後に掘削されている。幅 0.52 m、深さ 0.35 m で断面は逆台形を呈す。溝内には幅 23 cm、高さ 10 cm の木樋を設置する。木樋は上面に蓋が遺存するこ



第98図 SD502 実測図、出土遺物



第99図 SD501 実測図、出土遺物



第100図 SD503～507 実測図、出土遺物

とから、暗渠水路として使われたものである。埋土中より1033の白磁が出土した。内面に円弧状の印刻を施す大宰府分類V類（森田・横田1978）である。13世紀ごろのもので混在品である。所属時期はSD501の埋没時期である18世紀以後である。

#### SD503～SD507（第100図）

5区の掘立柱建物SB501・SB502の北側に所在する溝群である。幅0.23～0.64mで、深さは0.1～0.27m、断面は逆台形を呈す。いずれの溝も灰色系の砂質土で埋没する。1034はSD504出土の陶器壺、1035はSD507出土の黒色土器壺、1036は同溝出土の土師器足釜片である。1037は同溝出土の不明鉄器、1038はSD505出土の鉄釘である。SD504は出土遺物からみて近世に下るが、それ以外の溝は中世の溝とみておく。

#### （6）河川跡

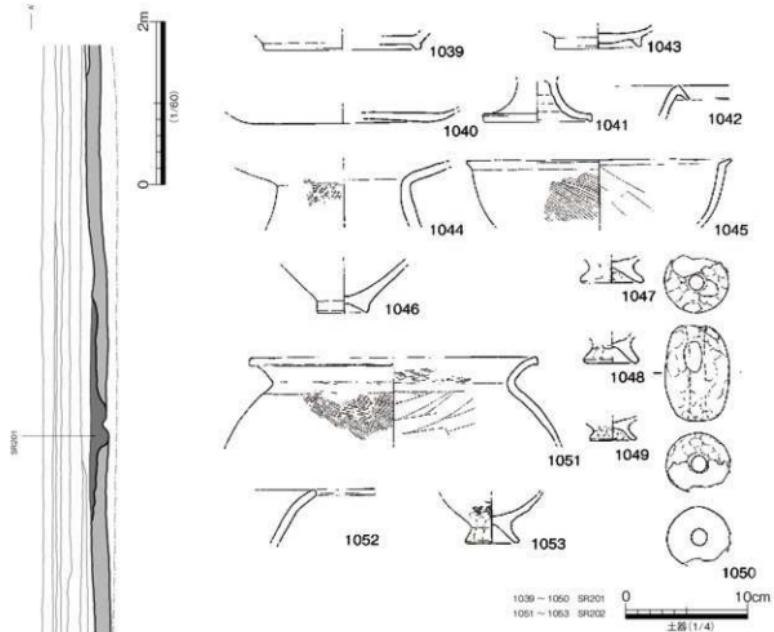
##### SR201・SR202（第101図）

2区南側で検出した河川跡である。弥生時代の河川跡SR203・SR204の埋没後に浅く幅広く堆積したSR202と、その西側で幅2.5m、深さ0.25mで中央部が強く窪む断面を呈するSR201からなる。両河川は調査区中央付近で合流し北に流下する。

埋土は暗褐色系砂質土で、埋土中から古代の遺物とともに弥生時代遺物が混在して出土した。1039～1050はSR201出土遺物である。1039～1042は古代の須恵器である。1039は幅広の高台を有する須恵器壺、1040は須恵器皿で、内面を硯に転用した転用硯である。1041は須恵器高杯、1042は須恵器甕口縁部である。1043は土師器壺、1044～1050は混在の弥生時代遺物である。SR203遺物の巻き上げと考えられる。1047～1049は製塙土器脚台部片、1050は大形の管状土錐である。重量は177.8gで、孔径2乗値は1.69となる。1051～1053は混在の弥生土器及び製塙土器である。出土遺物からみて中世以前に埋没した溝である。

##### SR401（第102～106図）

4区・5区にまたがって検出した河川跡である。調査区北西の谷から接続する河川で、調査区を斜交し、南東に向かって流下する。河川は縄文包含層を切り込むように浅く流れる低地域と、低地域北端付

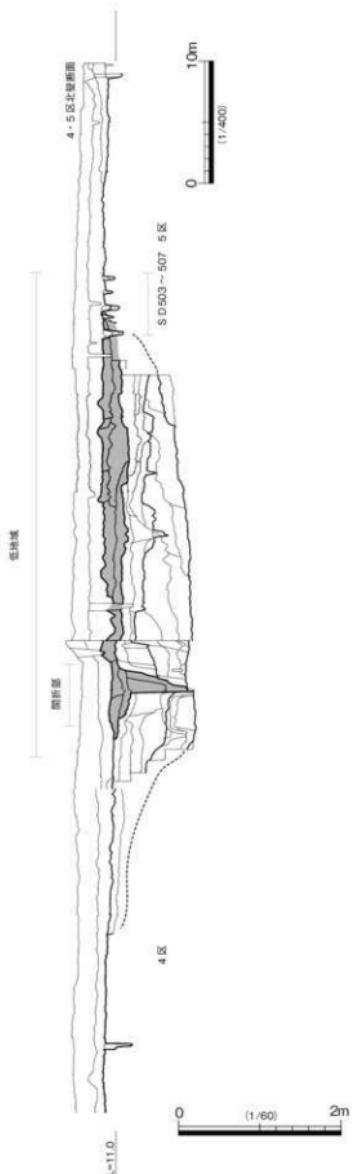


第101図 SR201・SR202実測図、出土遺物

近で強く開析する開析部に分かれる。開析部は最大で幅3.5m、深さ1.7m、白色の粗砂で一度に埋没した痕跡が認められる。一方低地域は幅25m、深さ0.25mで灰褐色系砂質土で埋没する。南肩部は中世の溝群SD503～507に切られる。出土遺物は多くが低地域側(5区)で出土しており、開析部付近(4区)で出土した遺物は少ない。

1054～1067は縁釉陶器である。1054～1056は皿。削出高台で口縁端部が短く弱く屈曲して外反する。胎土は暗灰色で硬く焼き締める。1057～1061は椀の口縁部片である。胎土が黄色系を呈し、釉の色調が淡い緑色であるものが多い。ただ1061の釉は深緑色を呈す。1062～1065は椀の高台部片である。いずれも削出高台である。1066は坏底部の削出高台部片。1067は削出高台をもつ大形の皿底部片である。これらはすべて京都産縁釉陶器と考えられるが、1061は釉薬の色調から近江産の可能性がある。いずれも9世紀後半から10世紀のものである。

1068～1095は須恵器である。1068～1071は坏蓋である。天井部と口縁部の境稜線が明瞭で、口縁部端部拡張は弱い。1072～1082は坏である。

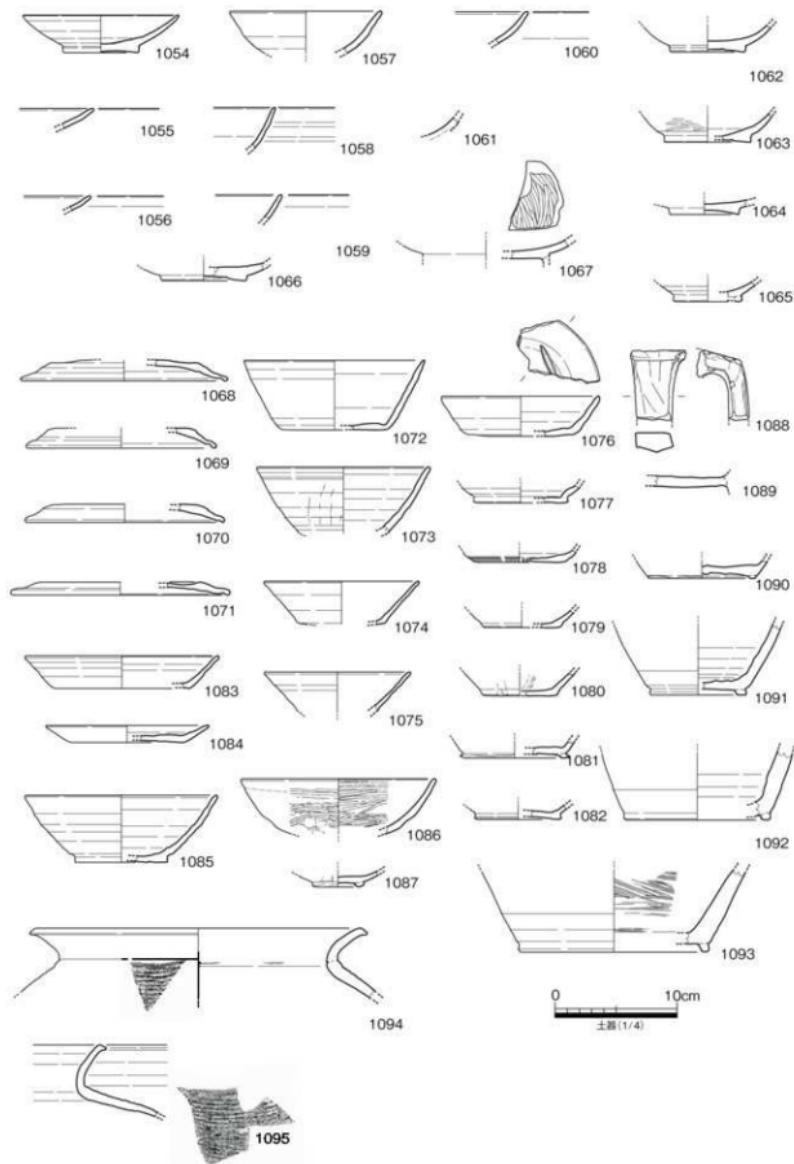


第102図 SR401断面図

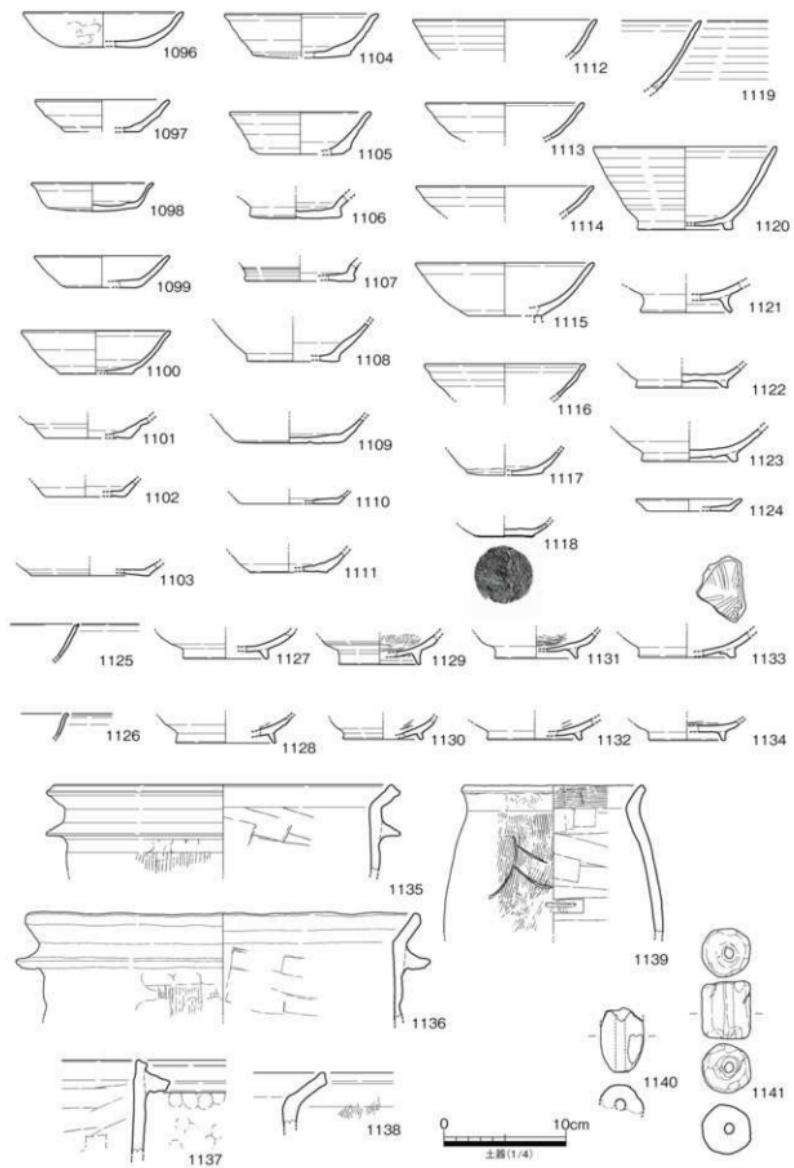
1072～1075は口縁部が斜上方に直線的に長く立ち上がる形態である。1077は底部を円盤状に削り出す。1083・1084は皿、1085～1087は椀である。1086は内面に暗文状の箝磨きを施す十瓶山産の須恵器である。1088は火舎香炉の脚部片、1089は内面調整が粗いので大形の壺底部片である。1090～1093は壺、1094・1095は十瓶山産須恵器壺である。外面に細かな格子叩きを施す。

1096～1124は土師器である。1096～1118は坏、1119～1123は椀、1124は小皿である。坏は口縁部の立ち上がりが低いもの、長く直線的に斜め上方に延びるものなど複数形式に区分できる。底部も円盤状のものや高台付などがある。

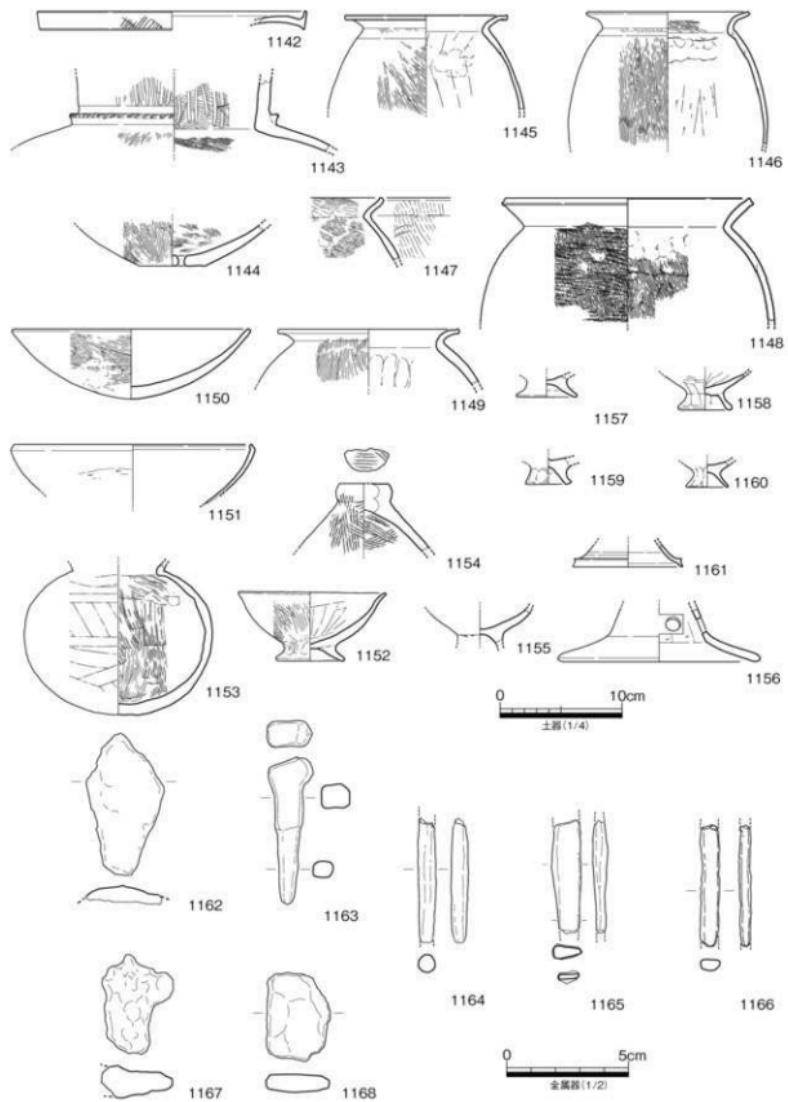
1125～1134は黒色土器椀である。いずれも内面が黒化するA類で、高台は断面三角形のものと台形のものがある。1135～1138は土師器羽釜・壺の煮沸具である。1139はヘラ記号をもつ壺である。口縁部が短く真蛸壺の可能性もある。1140・1141は管状土錐である。1142～1156は混在の弥生土器・土師器である。1157～1160は製塙土器。1161は須恵器高杯脚部片である。1162～1173は鉄器である。1163は頭部が方形となる大型の釘、1164・1166は棒状鉄片で鉄鎌茎か後述の馬具部品の可能性がある。1165は断面形からみて刀子と考えられる。1167は鉄滓。1168は小型の鉄斧片である。1169～1171・1173は馬具である。1169は棒を直径約7cmの円環状に曲げたもので、図の左右両端は内側に若干屈曲するため正円にはならない。1171は円環連接部接着片である。円環は連続する両環とも直径0.5～0.7cm断面丸形の鉄棒を蕨手状に曲げ加工し内径約1.0cmの環を形成するもので、いわゆる蕨手状環である。1173は棒を長さ4cm以上、幅2.8cmのU字形に強く曲げたもの。1170は棒を長さ7.5cmの釣り針状に曲げたもの。これらはいずれも轡の部品と思われる。1169は環状鏡板の円環部と考えられるが、円環が正円ではないことや、1173の強く曲げられたU字形環が付属することからみて古代の馬具における複環式轡（津野2012）の鏡板部品群の可能性がある。1171



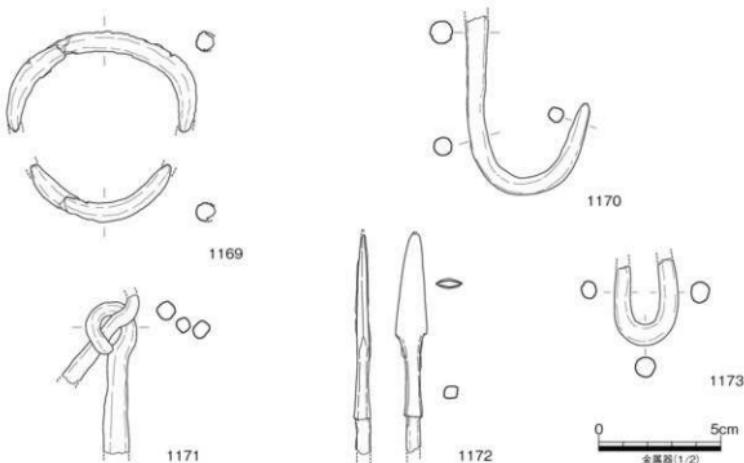
第103図 SR401出土遺物(1)



第104図 SR401出土遺物(2)



第105図 SR401出土遺物(3)



第106図 SR401出土遺物(4)

は両環の内径が小さいことから連鎖の中央連結部と考えられる。1170は、現形状から部位を特定することが困難だが、麻手状環が変形して広がったものとみれば内径2.5~3cmの環が想定でき、街端または引手端の環とみることができる。すなわち馬具の轡一式がほぼ揃う。1172は細根の柳葉式鉄鎌で、刃部長4.3cmに対して籠被部が3.3cmと長い。籠被端は下端がやや幅広となり明瞭な関をもつ。津野編年の柳葉I式でII期(10世紀)に属す形態である(津野1990)。

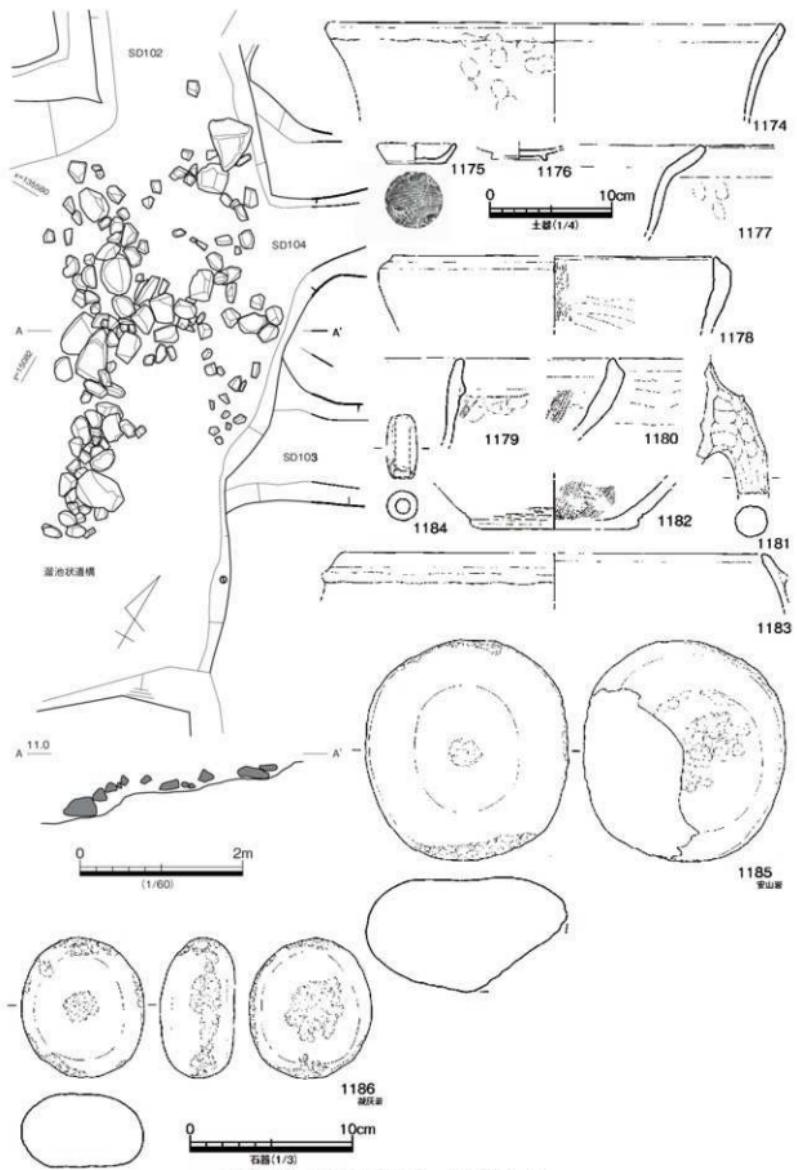
以上の出土遺物は9世紀後半から10世紀前葉の遺物が最も多く、その時期の遺構が調査地至近に埋没している可能性を示唆するものである。また、綠釉陶器が多数出土することと、この時期としては珍しい馬具轡一式、仏具である須恵器火舍香炉の出土など、一般集落にはあまり含まれない遺物が目立つ点が注目できる。

#### (7) 池跡

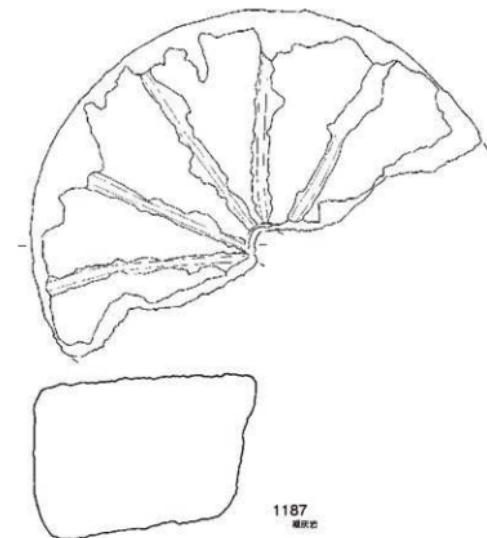
##### SG101(第107・108図)

溜池状遺構として捉える遺構である。溝のSD102・103・104のすべてが交差する部分で、地形に反して溝底が南に大きく傾斜しその肩部付近に最大直径60cmの大形礫が集中して分布する。礫上部は埋め戻したようなブロック土が置かれており、調査地より南に広がる溜池の堤体基礎の可能性を考えられる。基礎部分に混在する遺物と、それより南の低位で出土した池堆積層から出土した遺物がある。

1174・1177は堤体出土の土師器鍋、1175・1176・1178~1181・1183は堆積層出土の土師器である。1182は堤体出土の土師器擂鉢、1184は堆積層出土の管状土錐である。1185・1186は敲打痕をもつ叩石である。1185は安山岩、1186は凝灰岩製である。1187・1188は堤体南側にはりついで出土した石臼である。いずれも凝灰岩製。



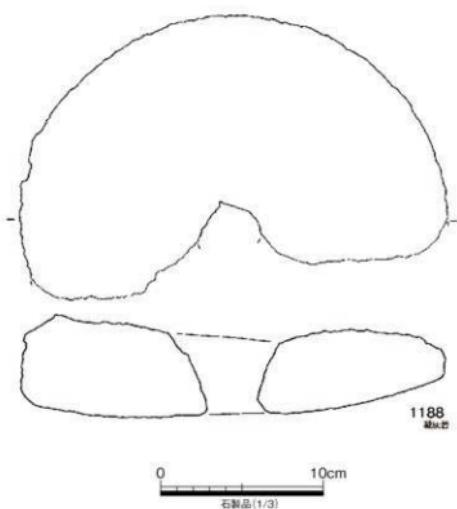
第 107 図 SG101 実測図、出土遺物 (1)



1187 石製品

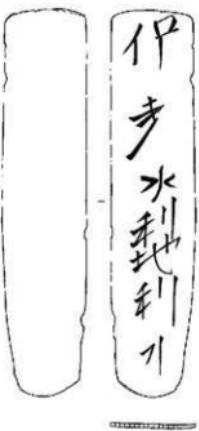


1189



1188 石製品

0 10cm  
石製品(1/3)



1190

0 5cm  
木製品(1/2)

第108図 SG101出土遺物 (2)

1189・1190は木札片である。1190は墨書の木簡である。7～8文字が記される。そのうち上から3～4文字目に「水」とある。その他の文字は判読できないが、溜池状遺構とも合わせて考えると興味深

い資料である。

#### (8) 柱穴・包含層出土の遺物

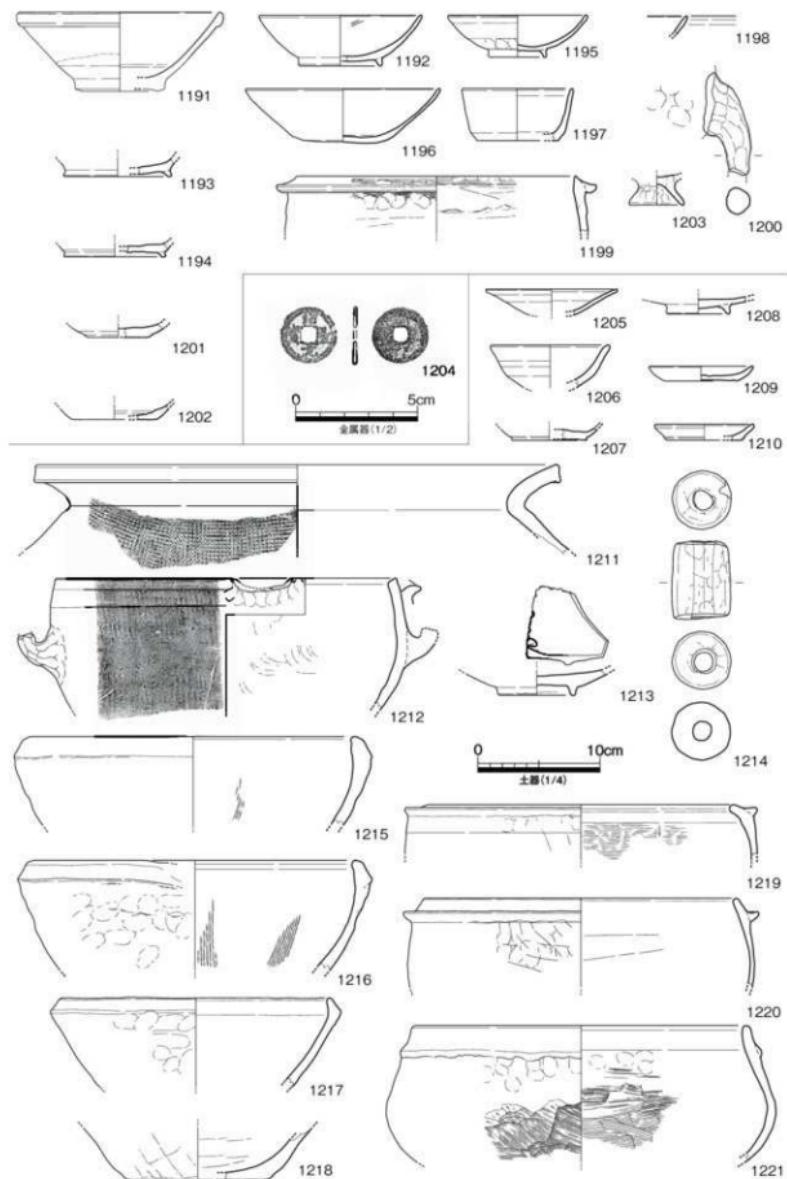
1191～1203は柱穴出土の遺物である。1191は1区出土の白磁碗である。IV類（森田・横田1978）で12世紀頃である。1192は5区出土の黒色土器椀A類、1193は5区出土の須恵器坏、1194は1区出土の須恵器坏である。1195は1区出土の土師器椀、1196は5区出土の土師器坏、1197は4区出土の土師器坏、1198は1区出土の土師器小皿、1199は1区出土の土師器足釜、1200は4区出土の土師器足釜である。1201・1202は5区出土の土師器坏。1203は1区出土の製塙土器である。

1204～1276は包含層出土遺物である。以下、調査区ごとにまとめて報告する。

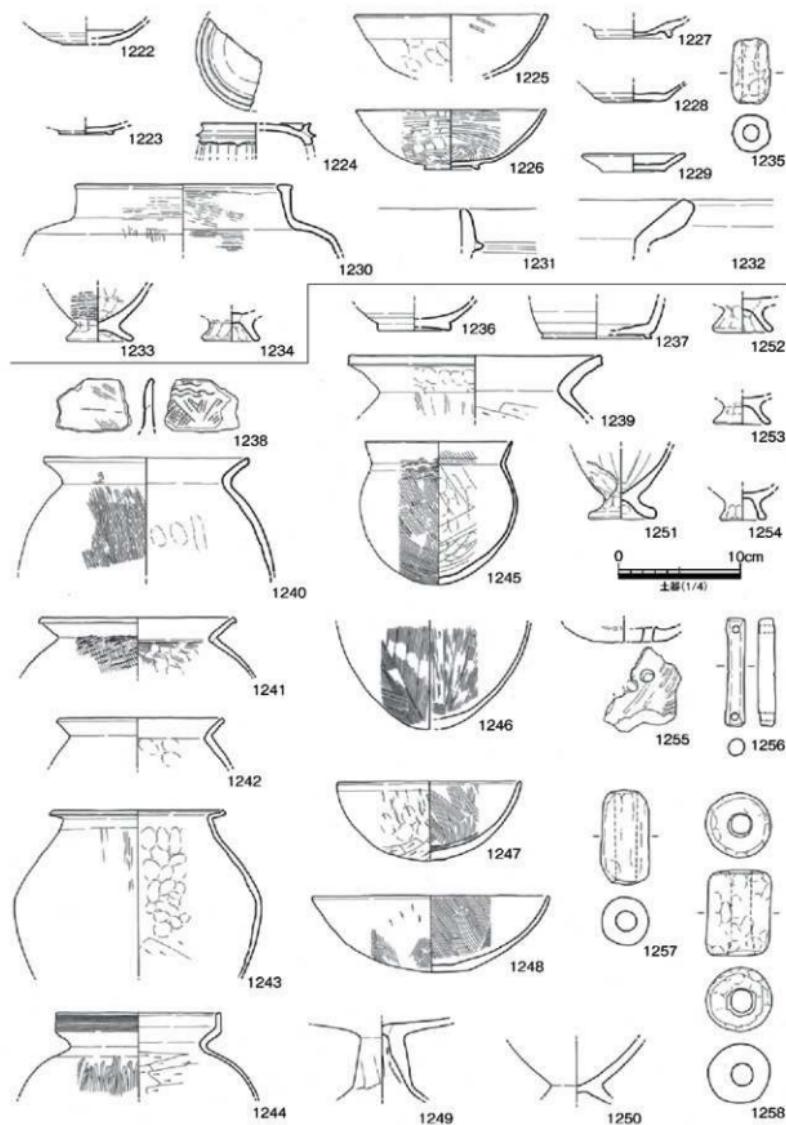
1204～1235は1区出土遺物である。そのうち、1204～1220は縄文包含層の上を覆う包含層堆積出土の遺物である。調査時には河川堆積として調査を進めている。1204は銅鏡で紹熙元寶。1205～1207は土師器坏、1208は土師器椀、1209・1210は土師器小皿である。1211は須恵器壺、1212は須恵器瓶である。口縁部が片口となる。1213は磁器染付皿。1214は土師質の管状土錐である。重量は163.9 gで、孔径2乗値は289となる。1215・1216は土師器擂鉢、1217・1218は土師器捏鉢、1219～1221は土師器足釜である。1222～1235は1区の表土剥ぎあるいは精査中に出土した遺物である。1222は白磁碗の底部片である。底部は削り出しの低い段状高台で、内面に高低差の低い段が巡る。1223は黒色土器椀底部片、1224は須恵器円面鏡である。肩部から硯面にかけての破片で、脚部上端が若干遺存する。細長の透孔の上端痕が多数みられる。硯面端部は高台状に仕上げ、硯面の海と硯部との境の稜線は明瞭である。ただし、硯面の器面は平滑化していないことから、実際に使用したかどうかは疑わしい。1225・1226は瓦器椀である。1227～1229は土師器で、椀、坏、小皿である。小皿の底部はヘラ切り痕を残す。1230は瓦質土器の土釜、1231は土師質土器の羽釜、1232は土師質土器鍋である。1233・1234は製塙土器である。1233は体部外面に横方向のタキを残す。1235は土師質の管状土錐である。重量は442 gで、孔径2乗値は1.96となる。

1236～1258は2区包含層出土遺物である。1236は削出高台の須恵器坏である。1237は須恵器高台付壺底部片である。1238は弥生土器複合口縁壺口縁部片である。細い工具による櫛描波状文及び鋸歯文を施文する。1239は古墳時代土師器壺口縁部片である。1240～1243は弥生土器壺である。このうち1243は茶褐色を呈し角閃石を多く含む胎土で高松平野香東川下流域産の土器である。1244は土師器壺である。複合口縁の外面に擬凹線9条を施文する。胴部の肩部の張りが顕著で器壁は薄く、内面は口縁部直下までヘラケズリが及ぶ。吉備系で亀川上層式に相当する。1245は胴部球形の土師器壺。1246は同様に底部周りが膨らみ、球形の胴部を呈す土師器壺である。1247・1248は底部が完全な半球状となる土師器鉢である。1249は脚部が屈曲して裾が広がる土師器高杯。1250は脚台付の弥生土器鉢である。1251～1254は製塙土器脚台部片である。1251は胴部器面の表面剥離がみられる。1255は土師器瓶である。端部が曲線的な平底面に3個以上の穿孔をもつ。1256は土師質の棒状土錐である。上下両端に貫通孔をもつ。孔回りは穿孔時の押圧によりやや扁平となり、平面矩形の成形痕跡が残るタイプで、古墳時代後期に多い。1257・1258は土師質の管状土錐である。重量は1257が114.9 g、1258が194.1 gで、孔径2乗値は1257が225、1258が256である。

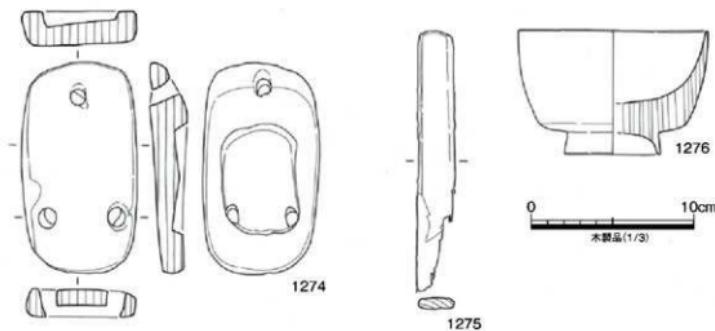
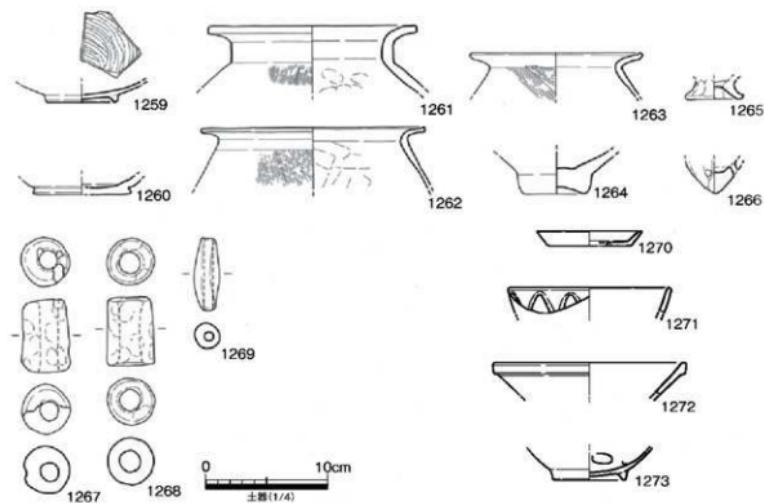
1259～1269は3区包含層出土遺物である。1259は須恵器椀底部片である。内面に暗文風竈磨きが認められる。1260は削出高台をもつ須恵器坏底部片。1261～1264は弥生土器の壺・壺である。1265は



第109図 柱穴・包含層出土遺物（1）



第 110 図 柱穴・包含層出土遺物 (2)



第 111 図 柱穴・包含層出土遺物 (3)

製塙土器脚台部片。1266 は尖底の瓶である。底部中央ではなく側縁に穿孔を施す。1267 ~ 1269 は土師質の管状土錘である。重量は 1267 が 90.6 g、1268 が 90.9 g、1269 が 22.4 g で、孔径 2 乗積は 1267 が 1.96、1268 が 3.24、1269 が 0.36 となる。

1270 は 4 区包含層出土の土師器小皿である。1271 ~ 1273 は 5 区包含層出土の遺物である。1271 は青磁碗で外面に鎬蓮弁を施文、1272 は白磁碗口縁部片である。口縁端部外面に蒲鉾状に肥厚する。IV 類（森田・横田 1978）で 12 世紀頃である。1273 は黒色土器 A 類底部片である。内面にヘラミガキによる暗文が施される。

1274 ~ 1276 は 1 区包含層出土の木製品である。1274 は下駄、1275 は板状木製品、1276 は漆椀である。1276 は黒漆を全面に塗布する。これらは中世以後の遺物である。